ISSN 0913-0705

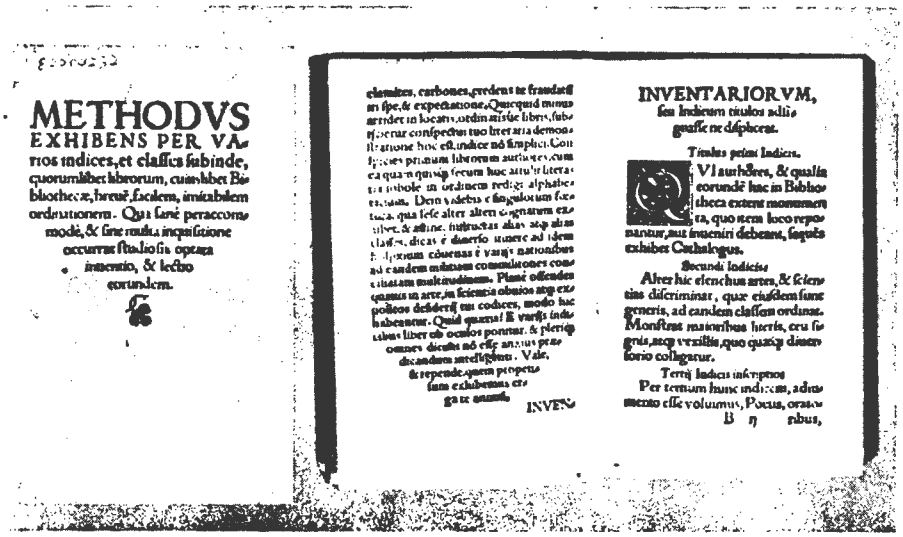
KULIC

20

1986. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

Treflerus の Methodus


METHODVS
EXHIBENS PER VA-
rios indices, et classes subinde,
quorumlibet librorum, cuiuslibet Bi-
bliothecæ, breuē, facilem, imitabilem
ordinationem. Qui sanē peraccom-
modē, & sine multa inquisitione
occurrat studiosis optata
inuentio, & lectio
eorundem.

INVENTARIORVM,
seu Indicum titulos adhi-
buisse ne displicerat.

Tituli primi Indicis.

VIrorum, & qualia eorundē hac in Bibliotheca extent monumenta, quo item loco reponantur, aut inueniri debeant, sequēs exhibet Catalogus.

Secundi Indicis

Alter hic elenchus artes, & scientias discriminat, quæ eiusdem sunt generis, ad eandem classem ordinat. Monstrat manuribus literis, cui sugrū, atq; vexillis, quo quæq; diuersorio collegatur.

Tertij Indicis inscriptio

Per tertium hunc indicem, adiumento esse voluimus, Poetas, oratores

B η ribus,

十六世紀の図書館運営法

Treflerus (Florianus). Methodus exhibens per varios indices, et classes subinde quorumlibet librorum, culuslibet bibliothecae, breve, facilem, imitabilem ordinationem. Augustae Vindelicorum, Philippus Ulhardus, 1560. 104 *l* 8。

活字印刷技術が発明されて一世紀を経過する頃になると，修道院図書館や大学図書館では印刷本以前の時代にくらべようもないほど急激に蔵書が増加するようになった。そのことは容易に推測できるが，そうした状況の下で資料の合理的組織法が図書館運営法の最重要案件として検討されるようになる。前号で近世最大の書誌 Bibliotheca Universalis を編纂した Condrad Gesner を紹介したが，彼は書誌の編纂だけではなく図書館の運営にも卓越した所見を Pandectrum に残している。ここに取りあげたベネデクト派の僧侶 Treflerus (1483-1563) の Methodus もその案件に関する総合的な論文の一つである。

Treflerus は，図書館がよく機能するためには，立派な建物や豊富な蔵書だけではなく，それらをよく運用することが大切だと考え，いろいろな角度からそれを実務的に検討した。彼は第一に目録の整備を重視し，(1) アルファベット順の著者名目録，(2) 大中小項目を体系化した，いわゆる分類目録，(3) 書物の内容が検索できる件名目録の作成，などの作成を提言している。彼はまた，書物配架法について中世以来のプレスマークを書物のサイズ・表紙の色・分類の三つの要素から構成する方法を案出した。すなわち，大型本には P (Parvus)，中型本には M (Mediocris)，小型本には I (Inges) を与え，カバー地の色の白，または白っぽい色のものには A (Albus)，赤には R (Rubeus)，黒には N (Nigricans) を，そして最後にその書物の分類記号（AからRまで）を付ける。かくして，フォリオ判などの大型サイズで，黒または黒っぽい色の表紙で製本された聖書（この場合聖書の分類記号はHとされている）には，PNHというブックマークが付けられることになる。

〔渋川雅俊〕

Keio University Libraries & Information Centers

KULIC 20

目　次

1……この一年を振り返って　速水　融
3……理工学情報センター所長就任に当って　北川　節
5……パリに行く詩人の手紙<ティールーム>　永戸多喜雄

慶應義塾図書館の新しい閲覧システム

6……慶應義塾図書館の新しい閲覧システム —計画の全容　中島紘一
9……慶應義塾図書館の新しい閲覧システム —システムの設計　安田　博

12……学術情報センター「オンライン目録システム」について　高谷康子
15……医学情報センターを御存知ですか？ <スタッフルーム>　南野典子

KULIC のノウハウ

16……日吉図書館のＡＶサービスの現状　風間茂彦
19……英国の医学図書館を訪問して　館田鶴子
23……シカゴ大学図書館における研修報告　広田とし子
26……特別研修を終了して　酒井明夫
27……特別研修を終了して　加藤好郎
28……専門分野のコア・ドキュメント　斎藤泰則

29……ヘイ・オン・ワイの古本屋<ティールーム>　田村俊作
30……IFLA 東京大会雑感<IFLA レポート>　原田いづみ
31……IFLA 東京大会の印象<IFLA レポート>　関口素子
33……ちょっと前まで学生だった<スタッフルーム>　和田幸一
34……早慶相互協力について　加藤好郎
36……私の図書館回想（１）　笠野　滋

資　料

43……研究・教育情報センターに関する書誌
43……スタッフによる論文発表・研究発表
46……年次統計要覧<昭和60年度>

表紙裏……十六世紀の図書館運営法　渋川雅俊
50……八角塔・KULIC 記事索引　国井佐代子
64……編集後記　〈表紙〉孫福　弘　〈カット〉日下部圭子

ＫＵＬＩＣ第20号＊1985年11月１日発行＊編集人 渋川雅俊＊発行人 速水　融
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都
港区三田２—15—45＊電話（453）４５１１（内線 ２５０１）＊印刷所　梅沢印刷＊

この一年を振り返って

速水　融
（慶應義塾大学経済学部教授）

昨年9月ヨーロッパとアメリカでの学会を終え帰ったばかりの私には，理事から研究・教育情報センター（以下，図書館と略称してしまうが，これは他意あってのことではない）所長就任の打診が待っていた。時差ぼけも手伝って，予備的な折衝や，十分納得出来る決断の間もなく，引き受けることになった私には，正直なところその任務への自信も無く，むしろ不安が強かったし，今でも完全に消えたわけではない。

これは一つには，今までの自分を振り返ってみると，自分自身が，図書館の積極的な利用者ではなかったし，図書館に対する知識も，一般的であれ，塾固有であれ，まことに乏しかったこと，また行政管理的な仕事は苦手で，所長室に納まることなど夢想だにしなかったことによる。

それから以後一年近く，各図書館の各部署を回り，いろいろの方と接しながら，ようやく図書館というものがどういうところか，少しずつ解かりかけてきたと思っている。当初，自分の任務は，利用者である教員と学生と，塾当局との利害の調整にあるのではないかと考えていたのだが，実はこれはとんでもない間違いで，塾の図書館ともなれば，図書館自身が方針を持ち，自己回転しており，利用者，塾当局に加え，第三の主体となっているのである。従って，ある場合には，三者間の主張を調整するという，困難な役目を負わされていることに気付いた。

となると，今までのように単に利用者側の立場ばかりではなく，図書館という大きな機構について十分勉強しなければならないのであり，これは目下の私にとって大きな目標となっている。

また役職柄図書館に対する外部の方々との接触も多くなった。大学図書館の場合，日本では館長は殆ど教員が当っており，中には友人もいて，図書館関係の会合で顔を合わすことも多い。しかし正直にいってライブラリアンとしての経験の無い私にとっては，未知の世界に入ったような思いが強く，とまどう事もしばしばである。外国の友人に逢って事情を話すと，必ずお前は図書館の仕事に週何時間当てているのかとか，専門的ライブラリアンとしての経験があったのかとか痛いところを突かれて閉口することが多い。

このように書くと如何にもいい訳がましく聞えるかもしれないが，現在の私にとっては，正直な気持でもある。それでは図書館に対する理想や抱負が全く無いのかといえば，勿論理想は持っている。大学図書館は，私の考えでは，研究室やコンピュータセンターと共に大学における研究・教育の核であると考えている。

この三者がハード・ソフト両面に亙りうまく機能する事によって，その大学の学問は栄え，学界や社会に大きな貢献をすることが出来る。逆にもし，その機能がうまく働かない時には，その大学の，組織としての学問水準は低く留まるに違い無い。これは勿論個人のことをいっているのでは無く，機関としての大学の学問を指しているのであるが，塾の場合この点はどうであろうか。勿論私には判断する力は無いけれどもいくつかの問題を指摘することは出来る。

まずハードについて，三田・日吉に関しては日本でも最高水準の建物が完成し，蔵書も，少なくも三田に関しては質量ともに日本における私立大学のトップクラスであることは万人の認めるところである。但し戦前に建られた四ツ谷，また戦後であるが，矢上の建物は，単に老朽化したばかりではなく，設備，蔵書の収容能力からいっても，もはや限界を越えているといえるだろう。

自然科学系のこの二つの図書館がそれぞれの分野における学問の必要に応じて新しい器を必要と

している，という印象を強く持った。

蔵書についていえば，最近における一つの特徴として活字によらない媒体が市場に登場して来たことが挙げられる。既にマイクロフィルムは早くから現れていたけれども，ヴィデオカセット，レーザーディスク，磁気テープというように，姿や形が全く異り，“本とは違う取り扱い”をしなければならない情報源が増大しつつある。

さらに進むと，恐らくオンラインで情報を取り出す，つまり情報源は外部にあってそれを館内で読み取るという方式も増えて来るに違いない。

既に開始された，学術情報センターとの連携はその第一歩ともいえる。こうなって来ると，収書といっても従来とはかなり性格の異るものに変化せざるを得ないであろう。

しかし，現時点においては収書の中心は，やはり図書，定期刊行物である事には違い無い。従って年々増え続ける図書をどうするか，如何なる方針で，多様化する利用者のニーズに答えるか，その中で，図書館自身の方針を如何に貫ぬいて行くか，十分配慮しなければならないのはいうまでも無い。

つまり，我々は一方では新しい時代の到来に備え，ある場合には，日本の私立大学図書館の先頭を走るのだ，という自覚を持つと同時に，他方では，従来の伝統を如何に現在と調和させて行くかという問題にも晒されているのである。こうなるとハードとソフトは区別がつかなくなり，また，図書館とコンピュータセンターとの業務が判別し難いものとなるに違い無い。しかしハード面の解決はソフト面の問題に比べればまだしも単純である。イエスかノウの場合が多く，特に設備に関していえば，要するに資金の問題に帰着する。しかし最も大きいのはソフトの問題であろう。

私が個人的に考えている事は，先に述べた大学における学問の核，つまり研究室，コンピュータセンター，図書館は1年365日，毎日24時間利用出来る事が理想である。管理とか人員の問題を離れて，こういった核の活動が一般の休日であれ，夜中であれ，続けられているという事がその大学の学問に対する姿勢を物語っている。

現に，私の暫くいたプリンストン大学では研究室は24時間，図書館も夜中の2時迄，コンピュータセンターは24時間開いており，教員や学生が励んでいた。図書館が休みになるのは日曜の午前中やクリスマスの当日に過ぎず，大いに利用したものである。

勿論これを直ちに現在の塾で実施する事は非常に困難であろう。研究室の利用に関しても，夜9時を過ぎると，殆どの個室の明りが消えている事を考えてみると，高い費用をかけて，24時間開室に持って行く事に疑問を持つ人は多いに違いない。図書館においても現在の利用状況を考るならば，果して夜中の利用者がどれだけあるか，甚だ疑問である。しかし外国から呼んだ友人がいった言葉は忘れられない。「慶應は確かに素晴らしい大学に違いないけれども，研究室や図書館の使えない時間が多過ぎるのは困ります。」

この問題の解決は容易ではないし，切実な要求として多数の利用者が声を挙げている状況でも無いので，実現は無用だという意見が強いかも知れない。しかし，大学の学問に対する姿勢として考えるならば一人でも利用の声があれば，それに答えるのが筋というものだろう。

勿論，こういった業務の拡大の前に，固めて置かなければならない問題も多々ある。通常の図書とは異なる，歴史の史料に相当するような性格のものを，どれだけ図書館として購入出来るか，いかに整理し，保存し，利用者に提供するかは，私自身が，外部の図書館では専らそういう性格の所蔵資料を利用して来ているだけに，大いに気になるところである。いわゆる滞貨問題も，所詮は人員の問題とはいえ，全員の協力が何よりも必要な解決への前提条件であろう。

しかし，一年たらずではあるが，各職場の方々が，生きいきと，仕事に自分の生きがいを持って励んでいる様子を見て，問題は必ず解決され，さらに大いなる前進が可能だ，という自信も持つことが出来た。

理工学情報センター所長就任に当って

北川　節
（慶應義塾大学理工学部教授）

この度，畏友天野弘前所長のあとをうけて理工学情報センター所長をお引き受けすることになりました。申すまでもなく，情報センターの使命は利用者に対して研究・教育上の情報サービスを提供することであります。いままでは利用者の立場からセンターをみてきましたが，これからはいかにしてよりよいサービスを提供できるかを考え，責任を痛感しております。もとより，一個人の微力でできるものではなく，理工学情報センターの職員の方々は勿論のこと，全塾の情報センター，さらに利用者各位のご理解を得て，職務の遂行にご協力，ご支援，ご指導をお願い申し上げる次第であります。

さて，理工学情報センターとしてやるべき仕事には二つのカテゴリーがあると思います。一つは，理工学部が持つ歴史的，宿命的な問題であり，他の一つは全塾的ないしは大学相互間の問題であります。前者には施設増設の問題があり，歴代の所長の懸案であります。このことはいずれの図書館においても早晩起り得る問題でありますが，蔵書が毎年，8,000～10,000冊増加するうえに，特に理工学部においては，大学院の学生数が移転時に比べて7～8割も増加しており，彼等が特に研究のために情報センターを利用する頻度は極めて大きく，一方，学部の専門課程の学生についてみると，理工学部になってから学科の数も増し，利用の仕方が多様化してきて，閲覧のためのスペースの利用形態を再考しなければならない時点に来ているように思われます。このような状況は仮書庫の一時的確保によって凌いでいますが，サービスの低下は必至であります。このような問題は，しかし最近建てられた日吉や三田の情報センターでは差し当り起らないでしょうが，このような時にこそ将来に向けての対策ないし計画を推進すべきでしょう。すでにKULIC 17において，三田情報センター安西郁夫副所長が『情報センター機械化計画』について，昭和57年4月三田新図書館開館に際して立案された機械化計画案の展望を述べておられますが，この計画案は当時においても着実で実現可能な方向を目指されたことと推察されます。なぜなら，この計画は大学計算センターの組織・運営と無関係ではあり得ません。ここで問題となるのは，最近の計算機テクノロジーとの関連において，情報センターに課せられた『仕事』を達成するのに必要な経費を極小にするにはどうすればよいかということ，あるいは立場を変えていえば，ある情報処理ハードウェアが与えられたとき，最大の情報処理サービスを達成するにはどうすればよいか，ということではないでしょうか。

塾における図書館業務の機械化の歴史は古く，昭和45年に遡るようですが，情報センター側の意図と当時の情報処理ハードウェアの性能あるいはコストとは噛み合わず，ハードウェア・リミテッドの状態であったことも止むを得ない状況であったと思われます。時あたかも大型計算機発達の初期段階にあって，今日ほど性能／コスト比が良好でなく，情報の蓄積媒体も高密度のものでなかったため，塾だけでなくどの大学においても，計算機本体はともかくとして，大容量のファイルを具備している所はなかったように思われます。さて，情報センター機械化計画の実現は，大型計算機のトータルシステムとしての性能／コスト比を飛躍的に改善するためのハードウェア，ソフトウェア両面からの技術的進歩に負うところが極めて大きく，しかも焦眉の急を要する問題であります。幸いなことに，計算機のハードウェア面では高密度集積技術の進歩，いわゆるＶＬＳＩ化の成果をうけてＣＰＵの高性能，低価格は実現しつつありますが，

ソフトウェアは，種々の技法が考えられていますが，まだその生産性は高くはありません。このことは，利用者の需要に供給が追いつかないことを意味します。しかし，前述のＶＬＳＩ技術の進歩のお蔭で，キーボード，ディスプレイの大きさはともかく，ターミナル(端末)は著しくインテリジェントになり，コストの低下と相俟って，パーソナルコンピュータが急速に普及することになり，ワードプロセッサとともに，今後もこの傾向は続くでしょう。一方，大容量記憶媒体(ファイル)は高密度化が進んでおりますが，信頼の置ける画期的な高密度記憶媒体は未だ商用になっていないようです。情報センターが必要とするのは正にそのようなものです。100万冊の蔵書をもつ図書館は10～100テラ（10の12乗）バイト程度の，例えばＭＳＳ（スマストーレジシステム）を必要とするでしょう。

このような状況下にあって，今日，社会に氾濫しつつある情報を制御して，人間の知識として利用し得るためには，情報処理機（インフォメーションプロセッサ）としての計算機の使用は不可避であります。理工学情報センターにおいても，前述のように，学生数の実質的増加に伴う閲覧スペースの相対的狭小の問題が，書庫の実質的狭小とともに，その解決が迫られております。どの専門分野においても研究者にとって文献調査は極めて重要な仕事ですが，文献量の驚異的な増大に伴って，自分の研究分野に関連のある全ての文献に目を通すことは容易なことではないと思われます。探し当てた文献は他人の利用のことを考えると直ちにコピーするということになります。医学情報センター横山哲朗所長が指摘しておられるような，研究者ひとりひとりに端末を持ち，研究室あるいは自宅で内外の文献にアクセスできる時代に入りつつあるように思われます。このことは，大学計算センターの会報 KUCC No. 6 に藤沢益夫所長が述べておられますが，計算センターも年次計画が立てられる程に，情報処理に対して塾当局の深いご理解があったことが窺われます。その内容を拝見しますと，理工学部においてかって計画しながら実現しなかった矢上キャンパス内の光ファイバーによるＬＡＮ（ローカルエリアネットワーク）が昭和62年度に実現する予定であり，これは，勿論矢上キャンパス内に潜在する約150台以上と推定されるパソコン等のうち，広い意味での計算ないしは情報処理のために日吉のM380Ｒと接続して高速データ転送を可能にし，さらにミニコン等によるネットワーク形成に途を拓くものですが，理工学情報センターもその一環に入っていると理解しています。三田はすでに今年の夏休みに光ＬＡＮの設備が完了しているはずです。同様のシステムは他のキャンパスでも実施可能なことですが，これらの設備ないし施設が利用者に効果的に機能するためには，各キャンパス間をさらに光ファイバーネットワークで結合し，オンライン・リアルタイム高速データ転送を可能にすることです。光ファイバーケーブルがマイクロ波ケーブルより多く点で優れていることは周知のことですが，これによって塾内のあらゆる情報処理が居ながらにして高度なレベルで異質な価値を創成し，計算，情報検索等の基礎的ないし応用的研究・教育分野から各種の幅広い管理業務までを，整合性のあるシステムとして構築することができましょう。

さきに研究・教育情報センター速水融所長が塾大学報で述べておられるように，三田，日吉の情報センターでは図書貸出の機械化の一環として，図書利用券による塾独自のシステムを開発し実施しております。今までの利用者に不便をおかけしないという趣旨からこのシステムを開発されたセンター職員の苦心がしのばれます。しかし現実的な対応も極めて大切ですが，それとは別に近未来のテクノロジーの発達を予測して，より理想に近い方法で機械化計画を見直し，結合された２プラトーシステムを採る大学計算センターのメリットを最大限に生かすユーザとしての情報センター案を作成し，塾全体の立場から塾内は勿論，学術情報センターとの関連において充分検討を加え，広い意味での情報センターシステムを構築する時点に来ていると考えます。

パリに行く詩人の手紙—横部記念「山中散生コレクンォン」

永　戸　多喜雄

日吉図書館の貴重書室に，通常われわれが「山中コレクシォン」と呼んでいる研究資料がある。この資料は，1938年に，ブルトンやエリュアールがパリでは初めての国際超現実主義展覧会を開催したときに編纂されたカタログ「超現実主義簡略辞典」に，「超現実主義の詩人にして作家，日本におけるこの運動の推進者」と紹介された山中散生 Yamanaka, Tiroux（1905～1977）氏が，最後まで身辺から離されなかったものである。それではなぜこのコレクシォンが塾の図書館に収蔵されているのか，それにはちょっとした因縁話があるのだ。

詩人山中散生，本名利行は，旧制名古屋高等商業学校に学んだが，ちょうどそのころ同校でフランス語を講じておられたわれわれの先輩横部さん（故横部得三郎先生，塾在職中は経済学部教授）の知遇を得て，親しくフランス語およびフランス文学の特別講義を受ける機会に恵まれた。これが，今日半世紀を距てて，われわれが1930年代のシュルレアリストたちの声貌に接する想いで，貴重な原資料を披見できる幸運の発端となったのである。1981年の晩秋に，山中氏がその著書「シュルレアリスム・資料と回想」に使われた文献資料がなお未亡人のところに保管されていることを確認して下さった横部さんは，足が大変ご不自由であったにも拘らず，洗足池と線路を挟んで反対側にある山中氏宅まで筆者をご案内賜った上，私を未亡人にお引き合せ下さった。以後資料リストの作成から，学内でのさまざまな手続き，コレクシォンの引き取りにいたるには半年余の時間を要したが，1982年6月には，「山中コレクシォン」は塾大学日吉研究室書庫に納められたのであった。

日吉では西脇順三郎がイギリス留学から帰国した翌年に，超現実主義の先駆と見られる三つの雑誌「馥郁たる火夫よ」と「太陽の衣裳」（6号，1928–1931），「詩と詩論」（14号，1928–1931）が刊行され，1930年には，滝口修造翻訳によるブルトンの「超現実主義と絵画」が世に出るなど，超現実主義が語られる機会が増大していったが，名古屋高商を卒業して日本放送協会名古屋放送局に勤務していた山中散生は，滝口修造とともに日本で海外超現実主義作品展を開く計画を立て，冒頭に記した二人の超現実主義作家をはじめ，ルネ・シャール，ジョルジュ・ユニェ，マン・レイ，トリスタン・ツアラその他の詩人，芸術家と文通による直接連絡を開始した。その結果，山中散生の手もとには彼らの手書きの手紙が集まることになり，また1938年に東京で刊行された "L'Echange surréaliste" のために，詩稿（多くは手書き，一部タイプライター原稿）も寄せられるに至った。とりわけ，手紙に就いて言えば，山中がフランス在住の詩人その他に送ったものは，現在パリ市サント・ジュヌヴィエーヴ図書館内にあって，現代文学研究者にとっては宝庫といわれるジャック・ドゥーセ文学文庫に大切に保管されているものの，ブルトンらが名古屋に送った返信の類はフランスには存在せず，昨年6月になって日吉図書館を訪れた国立ポンピドゥー・センターの調査員によって，はじめて，その所在がフランス側に確認された。

「山中コレクシォン」に含まれる，フランスあるいはイギリス（ウォルター・ヘイター，ローランド・ペンローズ）の詩人・芸術家の限定初版著者自署献辞付の本は貴重なものではあるが，それにもまして，手紙類の処々にときには何げなく書かれている事柄は，それ自体他では得られない秘密の鍵となることが多い。

パリのポンピドゥー・センターでは，今年の12月から来年3月にかけて大規模な「前衛芸術の日本，1910—1970」展が開かれるが，それには三田図書館蔵の「馥郁たる火夫よ」とともに，山中コレクシォンいや横部記念山中コレクシォンから，ブルトン，エリュアール，トリスタンツアラ，ルネ・シャールが，1933年から37年にかけてはるばる名古屋に送った手紙計8通と「海外超現実主義作品展」（1937年6月10日—14日，於銀座日本サロン，日本委員　滝口修造，山中散生。海外委員　エリュアール，ユニェ，ペンローズ）が出品される。

（経済学部教授）

慶應義塾図書館の新しい閲覧システム
—計画の全容—

中島紘一
（三田情報センター整理課長
同　前閲覧課長）

慶應義塾図書館（新館・旧館）の貸出し，返却等の手続きが，昭和60年11月25日から電算機による方式に切り換った。これによって手続きが大幅に簡素化され，大量の処理が短時間でできるようになったのはいうまでもない。1万人を越える三田の利用者にとっては閲覧サービスのドラスチックな改善が実現したといってよいだろう。

貸出し関連業務の機械化という方策はそれ自体一般的にはそれほど珍しいことではない。我が国でもすでに多くの公共図書館や一部の大学図書館がこの方策をとっており，慶大でも日吉の図書館が4年前から機械によるサービスを実施しているからである。けれども三田の図書館において機械化が実現したという事実には2つの大きな意義がある。その1はこれが歴史の古い図書館のもつ複雑性を克服してその大規模な蔵書を対象としたものであるということであり，その2はその理由の故に既製のどのソフトウェアにも依存できないためほぼ独力でプログラムを開発し，実情に相応するシステムを完成させたということである。

以下ではこの機械化についてその計画の全容を概観する。

◇貸出し業務の概要

昭和58年に創立125年を迎えた慶應義塾はこの間に全体で200万冊を越える図書を蓄積した。このうち140万冊が三田のキャンパスにあり，この中から製本雑誌や和装本などを除いた残り90万冊が機械化の対象となったのである。百年以上もの歳月をかけて収集された蔵書であるから，その構成は単純ではない。分類法だけでも数種類あり，グループの別を意味する配置記号によって蔵書の群を数えるとその総数は100以上にも及ぶ。貸出しのルールは，この配置記号と教職員や学生などの利用者の資格との対応関係によってそれぞれ異なっている。

このような蔵書のマニュアルによる貸出し・返却などの手続きはニューアーク方式の一変型ともいうべき方法によっていた。即ち，利用者は貸出券という名のＩＤカードを持ち，図書を借り出す時はこれに図書の請求記号を記入する。同時に貸出票というスリップに本人の氏名や所属，図書の書名や著者名を書き込んで，図書，貸出券，貸出票の3つをカウンターに呈示するという方式である。貸出票は図書の1冊ごとに書かねばならないから，多数の図書を一度に借り出すことの多い教員の利用者や外国人研究者にとっては少なからぬ手間であったといってよい。返却の時は貸出券の該当する請求記号の欄に係員が「返却」の印を押す。貸出券はＩＤカードと冊数コントロールの役を，貸出票は図書の貸出し記録の用をそれぞれ果たしていたわけである。

この方式によって1日に多い時で1,000冊を越える図書が借り出され，ほぼ同数の図書が返却されていた。機械化はこうした記入や押印の手間を一掃し，貸出券の毎年の発券事務や貸出票のファイリング，その抜き取りといった仕事をなくすことになったのである。

◇業務分析と業務設計

機械化の対象がこのように複雑でスケールが大きい上，オンラインシステムの開発という仕事は誰にとっても初めての経験だったので，計画は当初から試行錯誤の連続であった。最初によく練り上げられた計画表があり，これに従って全体が順調に進行したというわけではないのである。

システムの基本構想が固まり，予算獲得の展望が開け，関係者の合意が得られた後で，閲覧課が最初に取り組んだ作業は閲覧業務の徹底的な分析であった。閲覧業務を先ず登録，貸出し，返却，

継続，予約，問い合わせ（図書・利用者），督促，統計，インベントリーの9つに分ける。そしてその1つ1つについて業務の構成内容を入念，細心，正確に分析，把握するというものであった。HIPO (Hierarchy plus Input Process Output) という手法によった分析作業は閲覧課の職員を中心とし，これにプログラム開発を担当する職員が適宜参加した。分析の基本は1つの行為がどんな入力を得てどう処理されどんな出力に至るかという観点からこれをとらえることである。HIPOを理解するため関係者はそれなりの勉強をして臨んだのだが，しかし出来上った結果は HIPO が期待する本来の姿とは相当かけ離れた代物となってしまった。

図書館の開館を第一の責務とする閲覧課は，たとえどんなに重要な仕事が間に入ってきても開館業務を疎かにすることは許されない。それ故新しい任務を抱えた職員はそれなりの相当ハードな対応を要求される。分析作業は限られた時間内で手際よくというプレッシャーの中で進められ，昭和59年の3月末にはほぼ全体の分析を終えた。この作業を通じて既存方式の不合理な点がいくつか発見され，又はよりよい方法が案出されるなど，作業効率の改善にプラスするような結果を得ることができたが，これは予期せぬ副産物であった。

業務分析が終了すると次は業務設計である。業務設計はマニュアルによるプロセスを機械に置き換えた場合の人と機械との対応関係を明らかにすることである。具体的には，「ああして欲しい」，「こうして欲しい」という閲覧課の要望をプログラムの開発担当者に伝達し，開発担当者との間でこれに対するフィードバックを行う作業であるといってよい。知恵のすべてを出し合って，およそおこり得るあらゆるケースを想定する。そしてそれへの対策をもれなく検討するのである。機械化システムの成否はこの部分のツメの良し悪しによって決まるといっても過言ではない。

プログラム開発担当者は図書館の職員であるから業務の必要性を理解するのは早い。要望に不合理な面があればこれを指摘しより良い案を提言することもできる。こうして両者の関係はきわめて建設的に進行していった。この点は自力開発の大きな利点といえるだろう。

三田の図書館の業務設計は分析によって得られた結果を基礎に，先に挙げた9つの業務について1つ1つ着実に進められた。これを進めるにあたっての基本原則は，マニュアル方式がもつサービスのキメの細かさを機械化した場合でも一つ残らず維持すること，というにあった。プログラム開発を容易にするために，複雑なルールを単純化したり，サービスの幅を狭めたりするという選択の余地は確かにないわけではなかった。しかしこれは機械による足切りである。この結果，機械化によって得るものも多い半面，失うものも少なくないであろう。機械化したらサービスが悪くなったという事態だけは絶対に避けなければならない。多様なニーズをもつ人間を相手に良いサービスをするためには機械化システムの中に人間の判断を介入させる余地を残しておくことが大切である。

業務設計は曖昧なルールや処理手順をそのまま放置しておくことを許さない。機械に曖昧な処理をさせることはできないからである。この厳密性が既存の曖昧性の明瞭化に与って力あったのはいうまでもない。業務設計には3ケ月を要し，59年6月末にはほぼ完了した。

◇ソフトウェアの開発

閲覧業務の新しいシステムについて閲覧課を中心にその基本的な内容の検討を終えた後は，導入する電算機の機種の調査，実際に稼動している大学図書館の実情の調査，図書の一点一点に対する機械可読ラベルの貼付作業などを同時並行させながら昭和60年3月からいよいよソフトウェアの開発に乗り出した。三田の図書館の職員でプログラムの書ける者4名，閲覧課から2名の合計6名で「貸出しシステム開発プロジェクト」チームを作り，これにソフトウェア会社からの1名（後にもう1名追加）が適宜加わって先ずファイルの設計

を行い，次で画面設計を行った。

ファイルの設計ではこのシステムが必要とするファイルとその役割を決定し，その全て，例えば図書マスターファイルや利用者マスターファイルなどについて，それぞれが持つべき情報を特定する。そしてこれらの情報を記憶するためのスペースを割り当てるという作業が中心になった。

画面設計は，先の9つの業務のうちから対象を登録，貸出し，返却，継続，予約，問い合わせの6つにしぼり，その各々について業務のプロセスが変るごとに画面がどう変ったらよいかという遷移の実際を設計用紙に具体的に書き下すという作業であった。書いては破り，書いては破りを繰り返しながらシンプルな画面の創出に努め，併せて機能性の実現をも目指した。この作業には3ヶ月を要し，60年の5月末までには一通りの画面設計を終えた。こうして計画はその最終局面であるオンラインプログラムの開発に入ったのである。

プログラム開発は先の職員4人とソフトウェア会社からの応援要員2名が担当し，途中の障害を克服しながら機械が導入された8月以降から本格的な取り組みを進めた結果，10月末には遂にその完成をみることができた。内容は閲覧課がほぼ期待した通りの手抜きのない親切なシステムであった。業務分析を開始してから約1年半の間の関係者の知恵を結集した成果であったといえよう。

◇関連する業務

ところで，機械化された閲覧システムを実現するにはまだ大きな仕事が2つほど残っていた。1つは利用者用のＩＤカードの作成であり，もう1つは機械可読ラベルの図書への貼付作業である。

ＩＤカードの作成は，その識別番号を学生分は教務部が付与する学籍番号，教職員分は人事部が与える個人番号を利用するとして，問題は先行する日吉の図書館が採用するバーコードと三田のＯＣＲとをどう調和させるかにあった。即ち，1人の利用者が日吉，三田それぞれのカードを別々に2枚持つべきか，それとも1枚の共通カードに統一するかという問題であった。結論は1枚のカードにバーコードとＯＣＲの両方を表示して共通利用をするところに当然ながら落ち着いたが，そのため日吉の図書館のシステムを若干手直しするという影響が出ることになった。この問題は日吉の前向きの協力を得て無事におさまり，60年4月から新しいＩＤカードの配布がスタートした。

一方，機械可読ラベルの貼付についてはとりあえず1983年度までに受け入れた対象図書50万冊分の一括貼付を目標とした。冊数が多いので，三田の図書館職員で所長を除く約80人の全部がこの作業に取り組む必要があった。1人当たりの割り当て枚数は平均6,000枚強となったが，59年夏休みから開始して機械化業務の始まる61年11月までの間にはほぼ目標分の貼付を終えることができた。残りの分（殆どは旧館に収容した旧分類図書に貼るラベル）は貸出のつど貼ることとして現在に至っている。なお，1984年度以降の受入本はBook-ID と登録番号とを等しくして受入れの段階で貼付されている。

慶大の図書館には業務全般の機械化をトータルに検討する常設の内部機関がある。Keio University Library Automation System（略してKULAS）開発委員会というのがそれだが，機械に強い職員を中心に構成されるこの委員会はマスタープランを描き，実行順位を検討して自らその実現に努めている。閲覧システムの機械化はその第1順位にあり，この完成に中心的役割を演じた職員は無論この委員会のメンバーである。慶大図書館の機械化は今後ともこの委員会を中心に自力開発の原則によって進められることになろうが，このことは機械に強い職員層を着実に厚くしていく必要があることを意味している。機械化が進めば維持業務が増え，委員会の力だけではすべての機械の面倒をみることができなくなるからである。従って，動き始めた閲覧システムの維持は最終的には閲覧課が独力で行えるようにならねばならないであろう。それが自力開発のシステムを持つものの宿命というものである。

慶應義塾図書館の新しい閲覧システム
—システムの設計—

安　田　　博
（三田情報センター副所長付）

慶應義塾図書館は昭和60年11月25日から閲覧業務のオンライン化を開始した。閲覧システムをオンライン化した目的は，従来のマニュアル方式では，今後，困難になると予想される貸出冊数の増加と蔵書冊数の増加に対応することである。オンライン化の計画は，システムの稼働に先立つ2年半前に立案され，現状分析，システム設計，ハードウェアの選定，ソフトウェアの開発を経て，本番の稼働を迎えた。以下で，オンライン閲覧システムの設計と開発計画，移行準備の概要について述べたい。

1.　現状分析

閲覧システムの設計，開発に先立ち，HIPO (Hierarchy plus Input Process Output) の手法を用いて，マニュアルの閲覧システムの現状分析を行った。

2.　設　計

現状分析に基づき，オンライン閲覧システムの設計を行った。まず最初に設計方針を決め，その後，システムの設計を行った。

a．設計方針

1）マニュアル・システムのサービスの質を維持する。

貸出業務をオンライン化することにより，利用者に対するサービスを低下させない。

2）新たなサービスの展開に対応する。

オンライン化することによって，新たに生じうるサービスの展開に容易に対応できる体制をつくる。

3）貸出冊数の増加に対応する。

今後，予想される貸出冊数の増加に，容易に対応できる体制をつくる。

4）運用を容易にする。

運用を容易にし，端末の操作が誰にでも簡単にできるようにする。

b．システムの設計

閲覧システムは，オンラインの窓口業務とそれ以外の管理業務とにわけた。窓口業務のモジュールは，貸出，返却，継続，予約，問い合わせ，登録，初期設定であり，管理業務のモジュールは，督促，統計，ファイル更新，インベントリーである。

1）貸　出

図書を貸し出す手続きを行う。利用者は借りたい図書と図書利用券を貸出カウンターに持って行くだけで良い。

2）返　却

図書を返却する手続きを行う。利用者は返却する図書をカウンターへ持って行くだけで良い。図書を延滞した時は，延滞のペナルティーを計算する。また，予約のある図書が返却された時は予約ノーティスを打ち出す。

3）継　続

貸出の更新手続きを行う。利用者は継続したい図書をカウンターへ持って行くだけで良い。

4）予　約

貸し出された図書に予約をかける手続きを行う。

5）登　録

利用者が閲覧システムを利用できるように登録する。図書利用券の再発行も行う。

6）問い合わせ

図書問い合わせと利用者問い合わせの二つの問い合わせがある。図書問い合わせはBOOK-ID，請求記号，ISBN などから検索でき，利用者問い合わせは USER-ID，氏名から検索できる。

7）初期設定

貸出規則の一時的な変更を行う。

8) 督　促

延滞図書の督促を行う。督促状ははがきのフォーマットで打ち出される。

9) 統　計

各種貸出統計を作成する。

10) ファイル更新

各種ファイルの更新を日次，月次，年次で行う。

11) インベントリー

一年に一度行われるインベントリー（在庫調査）の補助を行う。

3. 移行準備

閲覧システムの設計，開発と並行し，オンライン・システムに移行するための準備作業を行った。準備作業は，基本データの入力，ＯＣＲラベルの貼付，共通図書利用券の発行の三つである。

a．基本データの入力

オンラインの閲覧システムが必要とする基本データは，図書のデータと利用者のデータの二つである。このうち，図書のデータは目録カードから一括入力した。新刊書のデータは閲覧課で随時入力している。利用者のデータは，学生は塾員情報ファイルから，教職員は人事情報ファイルから借用した。

b．ＯＣＲラベルの貼付

図書館員全員が一年かけて，全蔵書のうち，約50万冊にＯＣＲラベルを貼った。残りの約30万冊分は順次，貼付を行っている。新刊書は，受け入れ時にＯＣＲラベルを貼付している。

c．共通図書利用券の発行

三田情報センターと日吉情報センターとで共通して使える図書利用券を図書館独自に発行している。図書利用券は新任の教職員と新入生には全員配布している。

4. ハードウェアの選定

システムの設計に基づいて，種々検討した結果，閲覧システムに使用するコンピュータとしてFACOM-K280を採用した。選定にあたって，基準としたのは，以下のことである。

a．レスポンス・タイムの速さ

貸出業務のメインは窓口業務であり，利用は短時間に集中する。一つの処理に許される時間はほんの数秒である。従って，どのようなときでもレスポンス・タイムが速いことが要求される。

b．マシン・ダウン時の対応の容易さ

コンピュータはしばしばソフト（ＯＳを含む）が原因でマシン・ダウンすることがあるが，窓口業務はマシンがダウンしたからといって休むわけにいかない。従って，マシン・ダウン時に復帰が早く，対応が容易なことが望ましい。

c．分散処理の可能性

計算センターには大型コンピュータがあるので，コンピュータの負荷を分散させるために分散処理が可能なことが望ましい。

d．機器の信頼性の高さ

コンピュータは機械であるので必ず故障するものである。しかし，故障は少なければ少ないにこしたことはなく，機器の信頼性の高いものであることが望ましい。

5. ソフトウェアの開発

ソフトウェアの開発にあたり，自己開発と既存のソフトウェアの導入の両方を検討した。しかし，適した既存のソフトウェアがないので，既存のソフトウェアの導入をあきらめ，自己開発を採用した。従って，プログラミングは図書館員が行った。開発に要した期間は約３か月である。

6. システムの稼働

ソフトウェアの開発の後期に，並行して，システム・テスト，運用テスト，トレーニングを行った。また，同時に運用マニュアルを作成した。充分な準備を行ったので，オンライン閲覧システムは三田祭明けの11月25日に，スムース

に本番稼働を迎えた。幸いなことに，オンライン閲覧システムが稼働して，約1年が過ぎたが，ハードウェアのダウンもないし，ソフトウェアのダウンもなく，順調にシステムは作動している。和装本，貴重書など1部オンライン閲覧システムの対象としていない図書がある。

7. 閲覧システムの今後

閲覧システムは，一応の完成を見たわけであるが，さらに，今後もシステムを拡充していくつもりである。現在，閲覧システム開発の第二期として，M360とK280を回線で結び，分散処理システムを実現する計画を進めている。

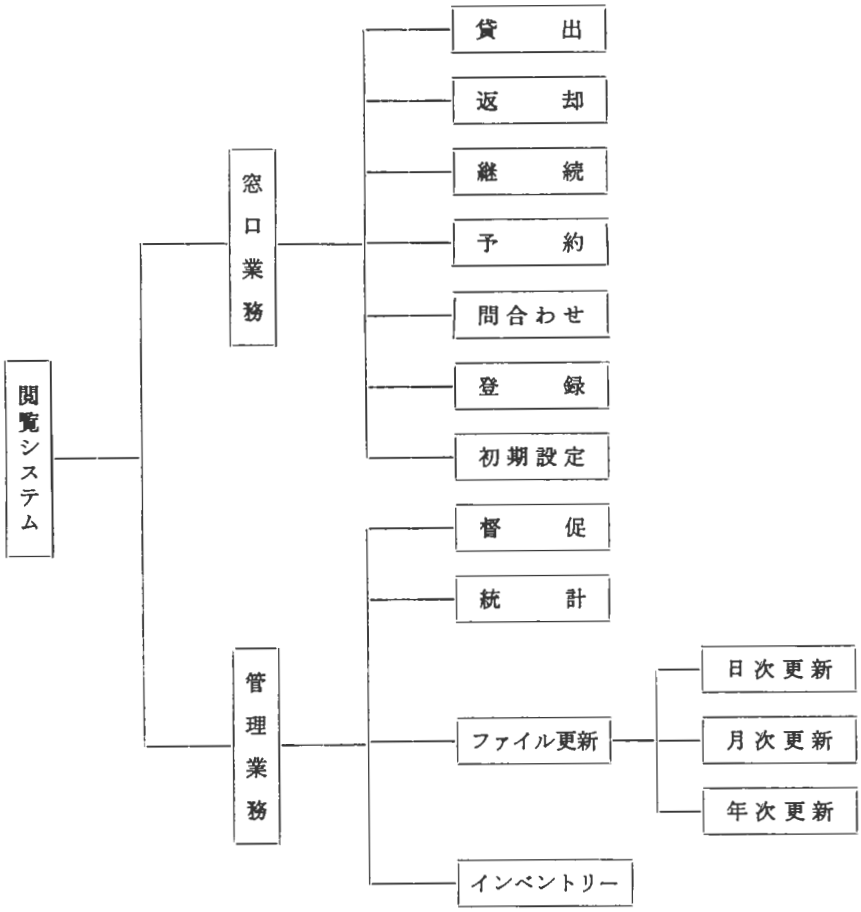


図　閲覧システム構成図

学術情報センター「オンライン目録システム」について

高谷康子
(三田情報センター整理課係主任)

1. 「オンライン目録システム」

情報の氾濫，図書館資料の増大，それによって引き起される業務量の増大，total system としての機械化への移行の必要，利用者の方々にかけている不便，こうした問題に図書館はもはや一館のみでは対処し得ないこと，その解決の道は図書館間の相互協力にあること，そして現今考えられる最良の方法が文献情報センターを中心とするネットワークへの参加であるとして，当誌で大江前研究・教育情報センター所長によって，その意義と内容が語られたのは二年前のことであった。文献情報センターは，学術研究の発展の為に研究情報の円滑化が必要であるとして，文部省が昭和55年に表わした「学術情報システム」構想に基づいて，昭和58年4月東京大学に設立されたが，本年4月発展的廃止という形でその仕事は新たに国立大学の共同利用機関として発足した学術情報センターに引き継がれた。研究・教育情報センターは業務機械化計画の中で，慶應義塾大学の研究・教育の発展には文献情報センターに早期に加盟することが必要不可欠であるとして，その機械化計画の課題としていたが，今般，この4月に三田情報センターが学術情報センターと接続し，その「オンライン目録システム」の利用を開始する運びとなった。

「オンライン目録システム」は学術情報センターが学術情報の流通促進のための中枢機関としての役割を果すべく行う中心的事業の1つである。「オンライン目録システム」では図書や雑誌などの記録であるいわゆる一次情報を扱うものであるが，学術情報センターでは索引や抄録などの二次情報の「データベース検索システム」も明年4月公開を目途に開発中である。

「オンライン目録システム」は学術情報センターを中心に全国の大学図書館をコンピュータとデータ通信網によって結合したネットワークの中で展開される。その仕組は次のようなものである。多くの図書館が各々の図書館に設置された学術情報センターの端末を通じ目録作業をオンラインで行い，目録情報を学術情報センターのコンピュータに集積する。この目録作業は又，共同・分担という形をとる。それはいくつかの大学図書館が同じ資料を所蔵した場合，その資料の書誌情報は，いずれかの図書館が1回だけ入力する。ここで書誌情報という言葉を使用したのは目録情報といわれるものの中から所蔵の情報を切り離していることを意味している。同じ資料を所蔵する他の図書館は，既に入力されている書誌情報に自館の所在情報を付加しさえすればよいというものである。1つの文献名のもとに所蔵館が列記されている『学術雑誌総合目録』などのいわゆる総合目録が想起されようが，このシステムでは共同・分担で目録作業を行うことがすなわち総合目録データベースを形成することになり，両者は表裏一体の関係となって進行する。このようにして各図書館が資料を受入れの都度目録所在情報を追加していくことによって，総合目録データベースは各館の最新の所蔵状況を示しつつ形成・拡大されていく。この形成・拡大されていく総合目録データベースを通じて図書館間の相互貸借（ＩＬＬ）が推進されることになる。又，オンライン目録システムと結合して「ＩＬＬシステム」が運用されるので，このシステムによってＩＬＬの為の手続きである申込みから受付，そして複写等の料金決裁までをオンラインで処理することが可能となるということである。目録作業は又，国立国会図書館作成の Japan MARC（機械可読目録）やアメリカ議会図書館作成の LC MARC，その他イギリスやカナダの MARC，日本の民間作成の TRC MARC 等が配備されているので，これらを参照しながら総合目録データベータに取り込むコピーカタロギングも行なわれ，共同・分担で行うことと相俟って整理業務の改善が計られることと，ＩＬＬを円滑に行うことによって資料の共有が促進されるこ

とを目的としている。そしてその根底には人的・物的資源の共有という理念が基調としてあり，この理念によって支えられているシステムとも言える。この理念が正しく理解されないと「オンライン目録システム」は充分機能しないし，情報や資料の提供を迅速・的確に行うことを旨とする図書館サービスの真の向上につながらない。「オンライン目録システム」のようなサービスを提供する機関はアメリカでは10年以上も前から出現しており，今後は国際的ネットワークの時代が予想される。図書館のサービスも世界的広がりを持つものになろう。

文献情報センターが発足して後，昭和59年11月に東京工業大学が接続校となった。以来，本年5月までに学術情報センターとの接続校は国立13，私立3の合わせて16大学であるが，61年度中に30数校を数えるものとみられている。今後このネットワークに国立大学は全面的に参加することが予定されているようであるし，私立大学の参加も徐々に増えるであろう。全国460に達する大学の参加を見れば，各々の大学の図書館が所蔵する図書約1億4千万冊，及び190万点の雑誌の目録・所在情報(注)が総合目録データベースに収録されることになる。雑誌については既に全国の大学図書館等が所蔵する雑誌の目録・所在情報『学術雑誌総合目録』がデータベース化されており，これが初期データとして導入されることによって総合目録データベースとしての形が整えられたが，一方図書については基礎となるデータベースの存在がなく無の状態からの出発となっている。よって総合目録データベース形成が目的とする整理業務の軽減や資料の共用が本格的に実現するまでにはもう少し時間がかかる。「オンライン目録システム」を早期にそして真に有用なものとする為には，そのかなりの部分が個々の図書館の努力にかかっている。新規に受入れる図書や雑誌の目録・所在情報が確実に加えられるのみならず過去に遡って各図書館が所蔵する図書の目録・所在情報が含まれることによって初めて総合目録データベースと呼べるものが存在することになるだろう。学術情報センターの接続館は「利用者」であるのだが，このような相互協力，相互依存のシステムにあっては共通の目的に向って行動を共にする参加者となる必要がある。又，総合目録データベースの形成に努力する一方，資料共用の制度的な面での整備も全国的視野のもとで見直されることになろう。課金の問題，参加館の間にバランスを欠いた関係が生じた場合の調整など今後の課題として残されている。「オンライン目録システム」を支える資源共有の理念は当然資料収集の段階においても持たれよう。既に国立大学の間では，使用頻度の低い雑誌や大型コレクションの収集にあたって調整が行なわれている。私立大学の間ではそうしたことがどのような形でどの程度可能か今後の検討に待たれる。

2. 総合目録データベースの目録

「オンライン目録システム」が本来の機能を発揮する為には，総合目録データベースにその名にふさわしい量の目録所在情報のデータが蓄積されることにあるが，もう1つは収録されるデータの中味の問題がある。すでに見たように，総合目録データベースが収録の対象としている目録情報の量は膨大なものである。それは図書では1億4千万冊にのぼり，三田情報センターの現在の蔵書数の140万冊と比較してみればその膨大さが容易に想像できよう。目録を作成するのに使用される目録規則は近年国際レベルでも標準化が進み，我が国の大学図書館の多くが最新の標準化された目録規則を採用している。ところが採用の仕方はそれぞれの図書館の蔵書の規模や種類，あるいは目録に対する考え方などローカルな事情を反映し，個々の大学図書館の目録の内容は必ずしも一様なものとはなっていないであろう。所蔵図書の1冊1冊の記録である目録は，例えば三田情報センターの場合を例にとると，それは140万冊の中から必要とする1冊を取り出す為の道具であり，そうした検索が効果的に行われるような精度が維持されるべきものである。総合目録データベースにおいてはその規模において必要とされる精度が選択されるのみならず，460もの大学図書館が共有出来る内容のものであること，そしてそれが資料の相

互利用の為の手段となるものだということが考慮されねばならない。さらにこの目録はコンピュータの持つ可能性を生かした内容のものとなっているはずである。学術情報センターでは目録データ作成の原則や考え方をまとめて「目録情報の基準」に示している。目録規則に関する部分では原則として標準的目録規則によるとしながらも，その適用にあたっては従来の慣行や考え方を変更しなければならないものもある。例えば，今まで1枚の目録カードの作成単位は何かということが明確化されていなかったということがある。というよりも，1つの「本」に対して目録カードを作成していたのだが，その「本」に対する識別基準が明確でなかったと言い替えることも出来る。『新釈漢文大系』という「本」がある。その第26巻の『書経』も「本」である。そしてその『書経』は上，下に分かれていてそれぞれも「本」である。この時目録カードはどの「本」に対して作成するのかという問題である。複数の図書館が目録情報を共有するにはこの点が整理されていないと共有に困難をきたすことになる。それは同時に書誌情報に付加する所蔵情報の分散の恐れもあり総合目録の機能が損われることにもなる。「目録情報の基準」では「固有の標題」をもって書誌情報を収める記録の1単位とした。上記の例の場合は『新釈漢文大系』と『書経』を「本」と認定することにし，それぞれに対し書誌記録を作成することになっている。上，下は『書経』の部分として扱うことになった。『新釈漢文大系』と『書経』は親子の関係にあると見なされる。この関係を階層というが，階層は3階層以上にもなることがあるが，それぞれの階層の書誌記録は互にリンク付けされる形になっている。そして所蔵情報は常にその最下位の階層の書誌記録に付加される。その他の問題で「後刷り」の扱いがある。かつてはこれは「出版年」として扱われていたが，今や二次的な情報でしかなく，共有の情報の出版年として扱われるのは「初刷り」の年であり，その資料が後刷りであるということはローカルな情報としてのみ所蔵の情報と共に記録される。つまり刷りの相異は同一「本」のヴァリアントであるということが明確にされている。この点に関しては目録規則の間でも合意をみつつあるが，稀覯本には適用しない。書誌記録のファイルは，図書と雑誌に分かれさらにそれぞれが和書と洋書に分けて維持されるが，著者に関する記録は和・洋の区別なく1つのファイルに収められ，1人の著者に対する記録は只1つ作成される。著者の記録を収めたファイルも共有ファイルで典拠ファイルというが，これが書誌ファイルとリンク付けられている結果，1人の著者の著作は和書・洋書の区別なく全て1つの名前のもとに集中的に見い出されることになる。

「目録情報の基準」の中で目録規則の解釈に関連するものとして，さらに図書と雑誌の区分の基準がある。これについては三田情報センターの資料管理の現状と必ずしも同じでない。今後は図書館サービスの現場において全国的な目録の基準に対し，個々の図書館の独自の要求をどう保持あるいは調整するかなどの問題が出てこよう。

さて三田情報センターでは総合目録データベースから慶大（三田）データを逐次三田の計算機センターのファイルに取込んでいる。やがてこのデータが核となって展開されるであろう図書館業務の全過程をオンライン処理する KULAS total system に向けて検討が続けられている。ここ当分の間カード目録は全面的というわけでないにしても維持される。「オンライン目録システム」には今後の課題として様々なものがあるが，目録作業を行いながらオンライン目録の可能性を実感し，カード目録の限界を痛感する。それはオンライン目録の場合の，目録作成から検索可能となるまでの即時性，目録情報の多面的アクセスの提供，ファイリング作業が不要であること，端末さえあればどこでも検索出来る広域性，目録カード箱用の場所の節約，様々なアウトプットの提供等々。その他，カード目録の制約故に制限せざるを得ない目録の修正や変更等，オンライン目録を一刻も早くと願う理由である。1館のカード目録のイメージにとらわれ過ぎたが，ネットワークの中でのオンライン目録の意義は既にみた通りである。

注）学術情報センター要覧 1986

医学情報センターを御存知ですか？

南　野　典　子

慶應義塾には，四つの情報センターがあります。大学に入学して教養課程の時期に利用する，日吉情報センター。人文・社会系の専門課程になると，あの立派な三田情報センターの利用者となります。又，理工学部に進んだ人達は，日吉のすぐ隣の矢上にある理工学情報センターを利用するようになります。これらの三つの情報センターは，ここ数年のうちに，新館となったり，日吉・三田といった主なキャンパス内にあったり，その近くだったりして，多くの人々に知られていますが，四谷にある医学情報センターのことは，意外と知られていません。そこで医学情報センターの実情をお話ししようと思います。

医学情報センターは，昭和12年に北里柴三郎を記念して建てられたものだそうです。そのため，入口を入るとすぐ，北里柴三郎の胸像が据えられていて，まことに由緒正しい風情をかもしだしています。図書館内に一歩足を踏み入れると，四つの情報センター共通のB・D装置が行手を阻んでいるため，出口のバーを押して入ろうとする利用者が，一日に数人はいらっしゃいます。一階には，貸出し，複写，レファレンスの三つのカウンターが並び，13人の情報サービス担当係員が働いています。医学情報センターは，医学部の教職員・学生には雑誌の貸出しも行なっています。未製本雑誌も貸出しますから，蔵書数や利用者数の割に，貸出し冊数が多いと思います。又，他の三センターのようにセルフ・サービスコピーがないので複写係は大忙しです。おまけにインスタント・スライドの作成もいたしますから，学会シーズンが近づくと，複写に，スライドに，返本にと，休む暇がありません。ここでは，三田の旧館時代の雑誌室のように，返本は全て係員が行なっているのです。レファレンスでは，主題や著者で必要な文献を探す機械検索を行なっています。9月からは検索の利用時間も拡がりますから，どんどん利用していただきたいものです。これらの業務を行なっているカウンターの他に，一階には，閲覧席，単行本の書架，雑誌の展示架などがあります。医学情報センターのカレント誌は約2,700タイトルですが，そのほとんどがこの展示架に並べられています。又，受入れした号数と日付を記入したボードも一緒に並べてあるので，利用者の方たちは，このボードを見て受入状況が分るようになっています。単行本の書架は，ささやかながら積層書架となっていますが，この書架だけでは配架しきれず，1979年以前発行のものは地下の集密書庫に収納されています。これも近々1980年発行のものも地下書庫へ収められる予定となっています。閲覧席は4人掛けの大きな机が16卓置いてあります。これも書架の増設に伴い，年々減っている有様です。三田や日吉のように洒落たキャレルなどはありません。雑誌書庫にわずかながら一人用の机もありますが，夏は蒸し風呂と化すので，利用する気にはなれないでしょう。この雑誌書庫も単行書の書架と同様に，満杯の状態です。昨年，無理に増設した書架のため，人がすれ違うことなどできない場所もあります。この増設も焼け石に水，程度だったようで，今では床に本を積まなければならない状況に陥っています。このため，大々的な書架移動が行なわれつつあります。夏は暑く，冬は寒い雑誌書庫ですが，ここにはとても素敵なエレベーターがあります。歴史のあるヨーロッパで見かけるような手動式扉のエレベーターです。医学情報センターへいらしたら，ぜひ御覧下さい。

いろいろ書き並べましたが，医学情報センターのことを少しは分っていただけましたか？　医学部では新棟の完成が間近に迫り，人々の関心はそちらに集まっているようですが，情報センターは深刻な書架不足に悩んでいます。年間330日以上も開館しているのですから，勤勉な四谷の職員にも余裕のある建物で働ける日が遠くないことを祈ってやまない今日この頃です。

（医学情報センター情報サービス担当）

日吉図書館のAVサービスの現況

風間茂彦
（三田情報センター資料課係主任
前日吉情報センター
パブリック・サービス課係主任）

はじめに

KULIC No. 19（1985）誌上に，「新しいサービス：AVサービス」というタイトルで，昨年4月にオープンした日吉図書館のAV施設について紹介してから，早いもので一年の歳月が流れた。日吉図書館としては，経験的にはゼロからの出発であったこのサービスではあるが，若干の三田の図書館（新館）での経験を生かしつつ，さらに加えて，ヴィジュアルな面での一層の発展をも考慮しながら用意された施設やコレクションは，総じて好評のうちに迎えられたように思われる。この間，日吉図書館としては，利用者増に対応したCDプレーヤーの増設やコレクションの新分野への展開等，利用者のニーズ・オリエンティドな方向を示しつつ，このコーナーを発展的に運用してきた。そこで，ここでは，この新しいサービスの一年半を振り返りつつ，現在の運用状況や利用状況について報告してみたい。

コレクションについて

このAudio-visualコレクションは，図書館オープンと同時に，日吉図書館を特徴づけるコレクションの一つとして設けられたものである。それらはおもに，1F AVコーナーでの利用を目的とし，その内容も，語学・音楽・教養・ドキュメンタリー・映画と幅広く，またメディアとしても，カセット・テープ，コンパクト・ディスクといったオーディオ・メディアから，VHS，LD，VHD，といったヴィジュアルなメディアまでを広く網羅している。それらの収集の主題分野は，カセット・テープでは，語学，コンパクト・ディスクでは，西洋古典・近代音楽が中心である一方，ヴィデオ・メディアでは，第1表に示すように，より広くに及んでいる。総じて，このコレクションの幅および深さは，日吉の教養課程キャンパスとしての性格を反映させようとしたものであった。これらは当初，学生諸君の様々な利用を予測し，図書館が独自に用意したものであったが，一年余の間に，利用動向や学生・教職員からの購入希望等を参考にしながら，積極的かつ継続的な収集活動を行なった結果，第2表のように，登録数では，当初の約3倍に成長した。この中でもとりわけ特徴的なのは，ビデオの中の映画の分野である。これは，当初は用意されていなかった分野であったが，オープン後8ケ月を経た昨年の12月以降，二度にわたり，84タイトルを購入した。この分野は，選択にあたっては，個人の趣味性が強く反映される分野でもあり，タイトルの選定にあたっては，いかなる基準に照らすべきかが，議論の別れるところであったが，結局，広義の語学学習用教材と解釈し，邦画を除き，国際的に権威のある映画賞を受賞していたり，標準的なガイド・ブックに載っている作品を中心に予算的に妥当な範囲で慎重に選択されたのが現在のコレクションである。

第1表　主題別のビデオ所蔵数
（1986年7月18日現在閲覧に供しているもの）

主題分野	巻数
語学	40
自然科学	26
地理	95
社会科学	12
美術・芸術	10
音楽	22
映画	84
スポーツ	40
その他	11
合計	340

AVコーナーの利用

AVコーナーは，VTR 12台，CDプレーヤー4台，カセット・デッキ6台，LD・VHDプレーヤー各1台を備えた個人用のAVメディア閲覧施設であるが，オープン以来，今年の6月までの延べ利用件数は，17,814件におよび，そのうち

の62%の11,156件が，ビデオ・メディア，33%の5,861件がコンパクト・ディスク，5%の797件がカセットの利用である。さらに，最近の利用統計を見ながら，それらを，昨年同期と比較すると(第3表参照)，今年度になって，著るしく利用が増えていることがわかる。これは，おそらく，第2表に示されている，コレクションの強化の反映であろうと考えられる。第4表は，同時期のメディア別の利用件数を示しているが，メディア別の割合は，上記の1年半をトータルした割合とほぼ近似である。しかし，この数字は，現在のコレクションを前提とした利用者の要求を純粋に示しているとは言い難い。むしろ，それは，施設自体のメディア別キャパシティから大きな影響をうけているといえよう。すなわち，上記のメディア毎の機械の設置台数が大きく効いていると考えられる。日頃の利用実態を見る限りでは，少なくとも，ビデオ・メディアに関しては，設置台数を増やすことにより，さらに利用が増えることが予想できる。一方，カセット・テープに関しては，増設は，利用増には直接つながらないと考えられる。さて，利用が比較的多いビデオの中でも，とりわけ利用が集中するのが，映画の分野である。今年6月の統計では，全ビデオ利用件数1,694件のうち，94%にあたる1,590件は，映画の利用であった。この映画の中での利用の詳細，および，映画以外のビデオの利用の詳細については，第5表，第6表を参照していただきたい。

第2表　年度別AVメディア登録数
(1985・86年とも6月1日現在)

年度＼メディア	ビデオ	CD	カセット	合計
1985	75	161	77	313
1986	371	391	163	925

第3表　年度別AVコーナー利用件数

月＼件	利用件数 1985年度	利用件数 1986年度
4月	625	1,920
5月	1,406	2,449
6月	1,181	2,436

第4表　メディア別利用件数

月＼メディア	1985年度 ビデオ	1985年度 CD	1985年度 カセット	1986年度 ビデオ	1986年度 CD	1986年度 カセット
4月	—	—	—	1,323	560	37
5月	1,002	343	61	1,645	731	73
6月	711	405	65	1,694	671	71

第5表　1986年5・6月映画利用ベスト5

順位	映画タイトル	件
1	ディアハンター	118
2	アマデウス	112
3	愛と青春の旅たち	107
4	スティング	81
5	天国から来たチャンピオン	78

第6表　1986年6月ビデオ利用ベスト5
(映画以外)

順位	ビデオタイトル	件
1	人工知能入門	16
2	勝つためのテニス	13
3	新しい世界旅行	8
4	スイム／小沢征爾	6
5	シルクロード／ペレのサッカー	5

AVホールの利用

AVホールは，様々なAVメディアを利用して，授業や発表をするのに適したスペースであるが，その様な貸ホール的な使用法に加えて，この間，情報センター所蔵のAV資料を利用した当館独自の企画による催しを幾度か行なった。まず最初に，昨年12月に，この月からAVコーナーで利用に供することになった映画ビデオのうちの何本かを，6日間にわたり上映する「シネマフェスティバル'85」を催した。これは，映画の初登場であった為か，連日大好評で，ほとんど満席の活況を呈した。次に，モーツアルトのオペラ「ドン・ジョバンニ」のビデオ・コンサート，そして，年

末恒例の「第九」のCDコンサートと続いて85年を終えた。86年には，新学期を迎え，新入生のオリエンテーションが企画された。従来より，「図書館ツアー」は行なっていたが，この4月からは，AVホールの施設を効果的に利用し，当館作成のオリジナル・スライドをも加えて，60分のプログラムが用意され，新入生諸君に対し，より幅の広いオリエンテーションを与えられるようになった。5月には，新規に受入れた映画を中心に，5日間にわたり，2回目の「シネマ・フェスティバル」を催したが，これは，観客動員数では，前回にはおよばなかった。それに続き，オペラ映画「カルメン」（ロージ監督）を上演した。さらに，研究室資料の貴重な16mmフィルムを用いた，3日間にわたる「前衛映画上映会」（ダダイズム，シュールレアリズムの色彩の強い，1920年代のフランス映画の特集）や，上記フィルムとCDを用いた，フィルム・コンサート「エリック・サティの世界」といった，かなりオリジナリティの強い企画も出してみたが，これらは，思いの外好評で，AVホールは，連日，多くの学生諸君の熱気に包まれた。

さいごに

さて，前述のように，この日吉のAVサービスは，現在のところ順調に運営され，総じて好評を得ているということができる。しかし，今後に目を向けてみると，いくつかの問題があるといえよう。まず，AVコーナーに於てのサービスは，現在のキャパシティを前提とすると，すでに利用件数の上で，ピークに達していよう。更なる発展を考えると，施設面での抜本的対策が必要であろう。また，利用面での映画への偏向も，再考の余地がある問題ではなかろうか。またAVホールの企画については，今後も，決しておざなりでない，良く考えられた，オリジナリティのある企画を，継続的に出すことが必要であるように思われる。

三田図書館・情報学会月例研究会

第44回（61年5月31日）
「CD-ROMの現状と展望」
発表者　村本　俊雄（日外アソシエーツ）

第45回（61年7月26日）
「図書館におけるR＆D機能：国立国会図書館における図書館学研究所構想について」
発表者　丸山昭二郎（国立国会図書館）

第46回（62年1月24日予定）
「英国における図書館・情報学の研究と教育の現状」（仮題）
発表者　田村　俊作（慶應義塾大学）

第47回（62年3月28日予定）
「学術情報センター目録システム利用の現状と問題点：慶應義塾大学三田情報センターを例に」（仮題）
発表者　長島　敏樹（慶應義塾大学三田情報センター整理課）

これらの研究会は，非会員にも公開している。また，年刊の機関誌 Library and information science は，個人会費（年額 ¥3,000），機関会費（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。

学会への入会，機関誌等に関する問い合わせは，慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（電話 03-453-4511 内線 3147）で受け付けている。

英国の医学図書館を訪問して

舘　　田鶴子
（医学情報センター資料サービス担当）

はじめに

このたび，我が国のブリティッシュ・カウンシルと(財)国際医学情報センターから援助を受けて，英国を訪問する機会を幸運にも得ました。この出張の主目的は，6月15日から27日に渡りロンドンで開かれたブリティッシュ・カウンシル主催の医学図書館員のための国際セミナーに参加することであり，日本からは私一人が出席致しました。

6，7月は英国の夏にあたり，バラの花も一斉に咲き，一年中で最も美しく過ごしやすい季節です。その上，天気までセミナー参加者を歓迎してくれたように，太陽のサンサンと照る夏らしい日が続き，英国名物のどんよりした曇りや雨の日は数える程という，実に5年ぶりの上天気でした。

ブリティッシュ・カウンシル国際セミナー

セミナーのテーマは「医学図書館の管理―資源の有効利用」で，主会場となったのはブリティッシュ・ミュージアム裏手にあたる静かな一角を占めるロンドン大学衛生・熱帯医学部校舎でした。このコースに集まった図書館員は，インド，マレーシア，ギリシア，ポルトガル，イタリア，イラク，ユーゴスラビア，ナイジェリア，南アフリカ，ジンバブエ，ガーナ，日本の12か国から計16人です。人種，民族の異なる者の集まりでしたが，少人数だったためすぐに打ちとけた雰囲気となりました。セミナー参加者，コース指導者である二人の英国医学図書館員，コースオフィサーとして参加者の面倒をみてくれたブリティッシュ・カウンシルの女性職員の間には，二週間を共に過ごしたことから深い友情が生まれました。さらに，セミナー講師や見学先で知り合った多数の英国図書館員との交流も，参加者にとって大変貴重な経験でした。

折しも，セミナー開始直後に南アフリカで激しさを増した人種問題が連日トップニュースに報じられましたが，我々にとってはそうした国際状勢に関りなく，各自が働いている環境の違いを越えて，図書館員としての共通の話題を語り，時には共感を時には驚きや新しい発見を得ることができました。

セミナー内容は，図書館の管理，運営を柱に組まれていて，初歩的な管理技術概論とその方法論，図書館学教育，スタッフ・トレーニング，利用者教育，図書館の将来，図書館協力とネットワーク等について，講義やグループ討議形式で進められました。講師陣も図書館員に限らず，多方面から選ばれていたため，内容に幅がでて，飽きずに聞くことができました。2日目の講義では1分間スピーチの時間があるなど，我が国の図書館研修ではおよそ考えられないような実際的な練習があったり，またグループ討議における課題の選び方も実践的で，大変新鮮に感じました。

セミナーの対象が，中間あるいは上級管理者であったため，参加者の多くは経験も長く，管理的業務に携わっている図書館員でした。私にとっては図書館の先輩から，仕事に対する情熱や，物事の捉え方を，また話しの端々から各国の図書館事情をと教わることの多い研修となりました。セミナーに適宜含まれていた見学は，慣れない英語の授業で疲れぎみだった私にとって，ちょっとした息抜きになっただけではなく，そこで触れた英国図書館界の現状には，大変興味深いものがありました。こうした内容については，すでに医学情報センター広報誌「きたさとニュース」(99号，1986年8月）で簡単に報告しましたので，これ以上の重複は避けて，残された紙面はセミナー後に訪れた見学先と，英国図書館協会の部会にあたる医学・保健・福祉図書館グループの年次研究大会の様子を，滞在順に振り返りたいと思います。

シェフィールドへ

国際都市ロンドンを離れてInter Cityと呼ばれる急行列車に乗りシェフィールドへ向かいます。シェフィールドでは，ちょうど留学中でいらした図書館・情報学科の田村先生とご一緒しました。日曜日に移動したため，普段の倍の時間，つまり半日がかりでようやく到着。伝統の国，英国では今でも日曜日は宗教上安息日のため，鉄道にもその影響が出るとのことですが，若い人達はこういう旧態依然とした体制には不満を持っていました。急がぬ旅ゆえ，車窓から見えるのどかな田舎の景色を十二分に堪能することができました。英国土は広大な台地の広がるなだらかな地形で，正に遊牧に適したところであるのがよくわかります。

さて，シェフィールドは坂の多い静かな田舎町です。シェフィールド大学図書館本館では，利用者サービスのチーフである女性図書館員に館内を丁寧に案内してもらった上，若い館長さん自らが大学内の見晴らしのよい食堂で昼食を招待して下さいました。ここの図書館の特徴は，地域の図書館ネットワークにあります。公共図書館の歴史が古いことで知られるだけあって，地域の大学，Polytechnic（日本の高等専門学校のようなところ）公共，カレッジの図書館が共同で雑誌の総合目録を編集し，COM（フィッシュ）で提供しています。この地域協力は，英国でも草分け的存在のようでした。一方，大学はキャンパスがいくつかに分かれ，図書館も分散しているため，単行書の学内総合目録が同様にCOM（フィッシュ）で作られていました。受入や貸出もBLCMP（Birmingham Libraries Cooperative Mechanisation Project）の一貫でシステム化されています。バーミンガムのホストコンピュータを，いくつかの図書館が共同使用しているそのプロジェクトには，開発過程で各館から図書館員も派遣されて加わり，大変有益だったということです。そういった共同事業を推進していく統率力の基礎には，古くからの地域的な強いつながりがあったのだと思います。

続いて訪れた医学・歯学図書館では，ちょうど新館長が赴任直前ということでした。ここでは男性図書館員が案内してくれました。小規模ながら，機能的にはよく整い，医学図書館には不可欠の情報検索サービスもBLAISE-LINKやDATASTARを使ってMEDLINE等を検索しています。テレビとビデオ再生装置の置いてあるやや広めのＡＶルームでは，これから充実させていくというＡＶ資料・機器の今後の活用計画を熱っぽく話してくれました。

ヨークにて

次の訪問地ヨークは，旧市街が壁で囲まれた小じんまりした町でした。どこを歩いても色とりどりに咲く花が美しく，城下町を訪れたような落ち着いた気分にさせてくれます。ここでは，世界的に有名な資料保存・提供館，BLDSC（British Library Document Supply Centre）を見学致しました。ヨーク郊外の片田舎にあるため，市内のホテルまで迎えの車が来てくれます。飛ばすこと約30分，広大な大自然の中にポツンと建っています。案内は，10年間日本に住んでいたという日本語で冗談まで通じる男性でした。ここに勤める700名を越す職員の大部分は図書館員ではないそうです。Urgent Action Service, ARTTel，ここで作成している雑誌や会議録のオンライン・データベースなど，我が国でもその活動はよく知られていますが，現場を目の当たりにしたのは一つの感動でした。また，資料を保存，再生，変換するための最先端技術がここには揃っています。この巨大な資料の蓄積を，国内のバックアップ図書館との協力のもとに，全世界に開放して，その要求に答えようとする姿勢には，英国の心意気のようなものを感じました。ここでコピー件数の最も多い分野は医学という話しでした。

医学図書館員である私のために，医学情報サービスのセクションへも案内されて，英国の医学雑誌の索引作業（MEDLINEデータベースの一部

となる）の実際や，情報検索サービスで行なっている独自のデータベース等，実演付で説明を受けました。ブリティッシュ・ライブラリーは，最近，内部が改組され，色々な分野で，英国図書館界をリードする新しい成果が期待されています。ここBLDSCでも，技術的進展と平行した，今後のネットワーク作りのためのソフトウエアの開発が進められていました。

医学図書館グループ年次大会

場所はさらに北上して，医学・保健・福祉図書館グループの年次研究大会開催地，ニューカスルです。夏期休暇中の大学寮が会場でした。大きな集会室と食堂がいくつもあるりっぱな施設です。ここでは，ロンドンのセミナーで一緒だったナイジェリアとガーナ（ただし彼は英国留学中）の二人の図書館員とも再会しました。金曜の夕食に始まり日曜の夜解散する週末カンファレンスでしたが，土曜日の午後には自由時間があり，私は三人の英国女性と一緒に，近くの海岸まで地下鉄で出て，こちらへ来て初めて海を間近に見ました。このあたりの海岸線は昔からのリゾート地で，遺跡にも事欠きません。

さて，カンファレンスでの講演内容から，現在英国医学図書館にとってニューテクノロジーの導入が，いかに問題になっているかがわかります。ロンドンで見学したLibrary Technology Centre（ブリティッシュ・ライブラリーのR＆D課が援助して1982年にできた組織）では，図書館向の様々なソフトウエアを実演し，その普及を計っていました。ただし，そこでは米国製のソフトウエアが大勢を占めていました。実際，英国では見学先の図書館に見る限り，コンピュータを利用した統合的システム化を目指して既製あるいは独自のシステムを導入，開発過程にあり，目録に関しては大部分がマイクロ・フィッシュで維持し，OPACへの移行は端末を揃えるための予算次第という状況でした。

さて，各種ニューテクノロジーの発展と図書館，図書館員との関りを述べた講演は色々ありましたが，“Teaching old dogs new tricks: training librarians in the new technologies”という面白い題の講義では，聴衆が集まりすぎて，教室を変更した程でした。さらに，BLDSCの動きにも，皆が注目していました。日曜日の夜には，もっと身近なスピーチ，つまり病院図書館員が共同で開発したマイクロコンピュータを使った図書館システムの紹介があり，フロアーとの間に熱心なやりとりがありました。

参加者名簿を見ると，図書館員の所属する組織や彼らの肩書から，英国の医学・医療情報サービス体制の多様性を垣間見る思いがします。病院や看護学校の図書館で働く人が多数参加していました。一方で地域医療情報サービス機構に勤めるregional librarianやdistrict librarianといった肩書の図書館員も多数見受けられました。英国は独自の保健サービス体制をもち，その枠組みの中で働く，そうした図書館員を雇っていますが，彼らは，各地域の小規模な病院等の図書館の仕事を援助する役目を担っています。大学医学部図書館も例外ではなく，その体制に組み込まれ，補助金を受ける代りに地域の医師，医療従事者に対してもサービスを開放する義務があります。ただし，彼らの受けられるサービスには，内部利用者と差があるようでした。

カンファレンスあけの月曜日に訪れたニューカスル大学医学・歯学図書館は，OCLCシステムを採用していました。ここでも閲覧目録はCOM（フィッシュ）が主体で，貸出はOCLCサブシステムを使ってまもなく稼働予定ということでした。面白い試みと思ったのは，利用者が緊急に必要となった本を購入できるように，図書館の一部に本屋のための展示室が作ってあることで，地方都市の生活の知恵を感じました。

エジンバラにて

最後の訪問地はスコットランドのエジンバラです。さすがに夜の冷え込みは，マフラーと手袋が

恋しくなる程でした。予約されていたホテルは，町の中心をなすプリンセス通りに面し，ちょうど私の部屋の窓からは目前にエジンバラ・カスルが眺められる，素晴しい場所にありました。この当りまで北上すると，夜は10時頃まで明るく，ついつい夜更しをしてしまいます。

ここではスコットランド国立図書館とエジンバラ大学医学図書館を訪問しました。医学図書館はErskine Medical Libraryといい，1980年に新しい建物に移ったばかりで，伝統好きの英国にはめずらしく，内部デザインが斬新なことに驚きました。2時間半にわたって，各セクションの責任者が代わる代わる案内してくれました。その間，スタッフルームで英国人の大好きなお茶の時間を一緒に過ごし，談笑するうちに，我が医学情報センターの同様の光景を，なつかしく想い出しました。

さて，この図書館ではGEACと呼ばれるカナダ製のシステムを採用していました。単行書はオンライン・ターミナルによって比較的新しい蔵書は探せますが，端末台数が足りないので，一般にはCOM（フィッシュ）とカード目録の併用でした。現在，本館と共同で雑誌のデータベースを完成させて，チェック・インの機械化とOPACをめざして進行中のプロジェクトがあるそうです。貸出についても，GEACを使って今秋には新システムの稼動を望んでいる，という話しでした。

いよいよ最後の見学先となったスコットランド国立図書館は，英国に5つある納本図書館のうちのひとつで，国内出版物が必ず納められるため収納場所が不足して苦労していると聞き，やっと同じ悩みをもつ図書館に出会った気が致しました。スコットランドの人々は，イングランドとは異なる彼ら自身の歴史に非常に誇りを持っていますが，この国立図書館では，スコットランドに関する資料は特によく収集されていました。外国出版物は，英語で書かれた出版物を数名のビブリオグラファーが選定しています。目録はここでもCOM（フィッシュ），新聞はマイクロ・フィルムに納められていました。国立図書館も歴史的な古い建物でしたが，エジンバラは，まさに大自然に囲まれた歴史の息吹を感じさせる町でした。

おわりに

医学図書館をいくつか見学して気付いたことは，英国では小規模館が多いことです。エジンバラ大学医学図書館は，スコットランドで有数の図書館ですが，蔵書数，雑誌のタイトル数は我が医学情報センターと比べてかなり少なく，私が持参した図書館案内をみて，こんなに大きな医学図書館は英国内にはない，と話してくれました。裏を返せば，それだけにBLDSCの存在や，図書館ネットワークの発達は，意義深いものだといえます。

一方，蔵書の配架方法をみると，どこの図書館でもReserve Book CollectionとGeneral Book Collectionに大別して貸出期間を変えてありました。さらに，図書館独自の判断で，必要度に応じてより細かく蔵書を区別し，貸出条件を変えることも普通に見られました。こういった，利用者に対するきめの細かい配慮には，感心すると同時に，それを我が国の環境に合わせてとり入れることができる点もあるように思いました。

さらに，英国滞在中に様々な人々と知り合いましたが，どの集まりでも女性図書館員が大勢を占めていました。ニューカスルのカンファレンスで親しくなった一人の女性図書館員が，特に医学分野ではそれが顕著であると教えてくれました。

英国の人々は，何をするにも容易に伝統を崩さない頑固さをもっていますが，図書館の世界をみると，新しい技術が積極的に導入されつつあり，図書館は高度情報化社会に対応しうる機能を備えた組織へと着実に動いています。

一方，常に新しいもの，便利なものを求めて止まない技術大国に帰ってきて今思うことは，私達図書館員のできること，すべきことは何かを，置かれた環境のなかで再考したいということです。図書館が，情報化社会の中にあって孤立しないた

めにも，決して静的システムであってはならないという思いを新たにしました。

最後に，この貴重な機会を私に与えて下さったブリティッシュ・カウンシル，研究教育情報センター本部事務室，(財)国際医学情報センター，医学情報センターの関係各位に紙面を借りて深く感謝致します。また，英国各地のブリティッシュ・カウンシルには，見学先の予約を始め，大変親切にしていただきましたことに，心より謝意を表したいと思います。

シカゴ大学図書館における研修報告

廣　田　とし子
(三田情報センター資料課)

1985年8月から約1年間，研修生として渡米する機会が与えられた。1986年6月までの11ケ月間はシカゴ大学図書館で研修を受け，最後の1ケ月間は全米各地の図書館を見学して回った。ここでは，シカゴ大学図書館における研修について報告しようと思う。

1.　シカゴ大学について

アメリカ合衆国第3の都市，シカゴは五大湖の1つであるミシガン湖の南端近くに接する，古くからプレーリーで収穫される小麦・とうもろこしなどの集散地として栄えてきた中西部を代表する都市である。シカゴ大学はシカゴのダウンタウンから10マイル程南下したところに位置するハイドパークという街の中にある。かつては高級住宅街だったハイドパークも現在ではすっかり黒人街に包囲されてしまい，1970年代黒人街の浸食を憂慮した大学当局による土地の買取り政策によって，かろうじてシカゴ大学の大学街として存続している。

シカゴ大学は全米でも有数の私立総合大学である。1892年にJohn Rockfellerによって創設され，ゴシック建築の美しいキャンパスを持つ。カレッジ，大学院4学部，プロフェッショナル・スクール（大学院レベル）6校から成る大学院大学である。学生総数約8,000人のうち約5,000人が大学院レベルの学生であり，従って学生の平均年齢は高く大学全体の雰意気も落ち着いている。

2.　シカゴ大学図書館について

シカゴ大学には人文社会科学分野の研究図書館であるジョセフ・レーゲンシュタイン図書館をはじめとしてカレッジレベルの学習図書館であるハーパー図書館，医学・科学技術分野のジョン・クレラー図書館，法律図書館等，全部で8つの図書館があり，レーゲンシュタイン図書館の中に設置された本部のもとに統括運営されている。蔵書数約480万冊，雑誌96,000タイトル，図書予算2,725,000ドル（約4億4,000万円）スタッフ322名（プロフェッショナル・ライブラリアン75名）蔵書規模から見ると全米第12位の図書館である。学生と研究者あわせて10,000人足らずの利用者にこれだけの規模の蔵書，スタッフが用意され，かつ全く図書館が閉ってしまう日は1年のうちでも数日しかないという研究者にとって実に恵まれた体制でサービスに臨んでいる。また，シカゴ大学図書館には自館の業務機械化のために独自で開発したLDMS(Library Data Management System)というシステムがある。現在，館内には72台の端末機が設置され，受入・目録業務，選書業務，貸出業務，レファレンス業務，パブリック目録用（カード体目録と併用）に使われている。アメリカにはOCLC, RLINなどの大規模な図書館機械化ネットワークがあるが，シカゴ大学はいずれのネットワークにも参加しておらず，独自路線を歩んでいる。（尤も相互貸借のためのOCLC利用や後で述べる極東図書館のRLIN-CJKプロジェクト参加など部分的な参加はしている）

3. 研修について

研修は3つのプログラムに分けられており，月曜日から金曜日まで週37.5時間（これは専任のプロフェッショナル・ライブラリアンの勤務時間に相当する）の研修時間のうち5時間がライブラリー・スクールの授業聴講，10時間がレーゲンシュタイン図書館での実習にあてられ，残りの時間は極東図書館でスタッフとして業務に就いた。

a．極東図書館における業務

極東図書館はレーゲンシュタイン図書館の5階にある東アジア地域研究のためのセクションで中国語・日本語・韓国語など，現地語で書かれた資料を中心に収集している。単行書約418,000冊，継続受入雑誌約3,000タイトルのコレクションを所蔵し，レーゲンシュタイン図書館の中にありながらそのシステムとは全く独立したサービス機能を持っている。スタッフも専任15名のうち，中国人8名，日本人4名，韓国人1名，アメリカ人2名というまるでアメリカとは思えない陣容であった。研修中，ここで過ごした時間が最も長く，また事実上私の受入先となったのもこの極東図書館だった。

ここでの私の主業務は日本語図書目録の記述作成であった。RLIN-CJKの端末機で目録情報を検索し，ヒットしない時は独自で作成する。私の作成した記述に日本担当のアメリカ人カタロガーが分類番号を付与し，ヘッドが点検した後また別の担当者が清書してカード目録を作成すると同時にデータベースにレコードを入力する。極東図書館は中国語・日本語・韓国語図書の現地語によるMARCデータベース構築の試みであるRLIN-CJKプロジェクトに参加しており，目録業務は機械化される方向にある。しかし，まだ目録データ入力は全体の作業量の50%程度でカード体目録も維持しているため，かなり作業が重複し機械化の恩恵を受けるまでには至っていない様子であった。

目録業務の他にも様々なスペシャル・プロジェクトにかかわり，中西部大学アジア図書館における主要高額図書受入速報やレーゲンシュタイン図書館及び極東図書館の利用案内日本語版，極東図書館学術雑誌目録などを作成した。

b．レーゲンシュタイン図書館における実習

レファレンス・セクション及び経済学・経営学担当のセクションで週10時間，3ケ月ずつ実習した。購入資料の重複調査，雑誌の欠号調査，利用統計のまとめなど，仕事自体は学生アシスタントに毛のはえた程度のもので大してむずかしくも目新しくもなかったが（図書館の基本的業務はどこでも同じようなものだ）仕事の合い間にスタッフの人たちとする雑談はアメリカのライブラリアン気質を学ぶ良い機会となった。

c．ライブラリー・スクールの授業聴講

1学期に1コースの割で年に3コースの授業を聴講した。Financial Management for Libraries, Collection Management, Law Libraries の3コースである。1コース12週のうち1週は中間試験，1週は期末試験，正味10週間だからものすごいペースで授業は進んでいく。毎週配布されるReading List，レポート，宿題，常に追いまくられているような気分だった。しかし，その中で印象に残っているのは学生が非常に積極的で実務を知っているということであった。ライブラリー・スクールに入学するのには学士号が必要だが，日本の大学院とは違いプロフェッショナル・スクールという位置付けで（専門職育成のためのスクールで他には法律家養成のためのロー・スクール，医者養成のためのメディカル・スクール等がある）卒業生はまず例外なく図書館もしくは情報サービス関係の職業に就く。また逆に，既に図書館に務めているがライブラリー・スクールを出ると待遇がよくなるからという理由で，働きながら通っている学生も多い。従って学生にとって授業は実務に密着したものなのである。誰かが問題提起すると各自が職場の状況を披露し始めるという場面にも，しばしば出くわした。

d．その他

研修の中で特にノルマは課せられなかったので

以上の3プログラムの他にも自分でアレンジすれば，IFLA, ALAの大会や，ASIS, SLAなど各図書館協会が主催する研究部会など，外のプログラムに参加することができた。また関を見つけては，ノースウエスタン大学，イリノイ大学，シカゴ公共図書館，ニューベリー図書館等，シカゴ近辺の図書館見学にも出かけた。

4. 感　　想

1つの図書館にスタッフとして在籍し，働きながら1年間研修するというプログラムは随分久しいと聞いている。

1年もの間，全く別の図書館で働くということは何らかの点で必ず勉強になることは間違いない。それがアメリカのしかもトップ10に数えられる大学の図書館であれば尚さらである。しかも研修生というのはある意味ではお客様だから，かなり時間の自由もあり，積極的に外部のプログラムにも参加できる。また留学とは違って図書館の実務の中にも入っていける。しかし一方，このプログラムはあくまでも極東図書館での業務を軸にした研修であり，極東図書館というところは本館のシステムからはずれた非常に特殊な立場にある。アメリカの図書館について学ぶなら，やはり本館システムの中で研修することが望ましい。だが，言葉のハンディもあり，アメリカ人のプロフェッショナル・ライブラリアンと対等にやっていくのはかなりむずかしい。

今後，このプログラムを続けるにあたって研修側は「何をしたいのか」受入れ側は「何をさせたいのか」，相方の当事者の間で事前に充分話し合ってほしいと思う。

小展示ニュース

昭和60年

12月6日～昭和61年1月30日（新聞閲覧コーナー棚展示）

カナダ政府刊行物とカナダ関係図書

昭和61年

3月11日～4月30日

江戸時代の名所遊覧絵図

5月1日～5月24日

小泉信三先生没後二十周年記念小展示

5月27日～8月27日

George S. Bonn 明治錦絵コレクション小展示

9月3日～9月30日

浮世絵—刷次の違いによる変りよう小展示

10月4日～10月11日

アーサー王伝説小展示

10月13日～

太田道灌と江戸城—没後500年—

特別研修を終了して

酒　井　明　夫
（医学情報センター
資料サービス担当係主任）

昭和57年４月，情報センター本部より委託研究生として本塾職員を対象とした図書館・情報学研修課程（大学院修士課程）に参加する機会を与えられ，本年３月をもってその課程をどうにか無事終了した。

課程における単位取得はさておき，いちばんの心の重荷はやはり論文の提出であった。在籍１年めは三田情報センター資料課勤務であり，当時は新館がオープンし，また卒論で図書館建築をとりあげた経緯からその方面のテーマを選ぼうと考えていたが，２年めの６月に医学情報センター資料サービス担当に異動になり，テーマもいつしか医学関係へと変更になった。医学関連のテーマを選ぶことによって自分が担当してまだ日の浅い業務への理解が深まるであろうし，授業の間，多少なりともスタッフにかかるであろう負担を考えれば，その成果を少しでも現場に環元すべきではないかという思いがその背景にあった。

さてそのテーマであるが，「基礎医学研究者と臨床医の医学雑誌利用の比較」に落ち着いたものの，気がつけば３年めも終了し，委託最終期限の４年めに入っていた。振り返れば「論文の準備に早すぎるということはありません。」という指導教授の言葉はまこと真実であった。

医学において雑誌が重要な情報源であることは言うまでもないが，医学情報センターにおいても雑誌は受入・収集・管理ならびに予算の面で，他の資料に比べて大きな位置を占めている。医学の専門分化，学際的傾向が強まるなかで，そうした雑誌が慶應の医師によってどう利用されているのか，そしてセンターはどう位置づけされ，また何をサービスすべきなのか。このことを論文を進めていくうえの大きな前提とし，そのため利用の実態を把握する一方法としてアンケート調査を実施し，結果を基礎・臨床に大きく分けて分析することになった。アンケートは慶應大学医学部の基礎・臨床教室に所属する専任教員485名に配布，258名から有効回答を得ることができた。その結果，(1)雑誌の利用度は基礎医学研究者，臨床医とも非常に高い。(2)雑誌を利用する目的は両者とも「最新情報の維持」が１位である。(3)雑誌への依存度は総じて基礎医学研究者の方が高い。(4)基礎・臨床とも外国雑誌をよく利用する。基礎医学研究者の国内雑誌の利用は最新のものが中心である。(5)基礎教室の上位誌に総合科学誌があがる傾向は過去の調査と変わらないが，癌や遺伝子研究の雑誌もよく利用されている。一方臨床教室でも癌の雑誌が上位にランクされ，以前に比べて神経科学の雑誌も増えている。(6)基礎では特定の雑誌が多くの教室で読まれているのに対し，臨床では専門誌が個々の教室で集中的に読まれている。(7)基礎でよく利用される外国雑誌を Journal Citation Reports のインパクト・ファクターの順位でみるとほとんどが500位以内であるが，臨床の場合は基礎と共通であげられた上位誌を除き，その順位は様々である，といったことが明らかになった。

アンケートで得られたこうした結果はあくまでも利用の一側面をとらえたにすぎない。利用動向を総合的にとらえるには図書館や各教室における利用記録の分析，引用分析，user study などの多面的なアプローチが必要になろう。

ところで今回の調査では副産物として情報センターに対する意見・要望が多数寄せられた。調査結果と合せて資料収集の充実と，今後の図書館サービスの展開に役立てていきたいと思っている。

最後になりましたが今回の特別研修の機会を与えていただいた本部をはじめ，図書館・情報学科ならびに医学部の先生方，そして研修中ご理解・ご協力をいただいた情報センターの皆様に感謝の意を表します。

特別研修を終了して

加　藤　好　郎
（三田情報センター閲覧課係主任）

『学問のすすめ』の中に次の様な件りがある。“そこで今は，そんな暇つぶしの学問は棚上げしてまず勉強しなければならぬのは，万人に共通の日常生活に密接な実学である。……わが身近な所に自然の法則を発見してそれを現実生活に活用することこそ，最も肝要である”私が，図書館・情報学科の修士課程の委託研究生になる事が決定した時，この件りを思い出した。私は，学部時代から図書館学は実学以外の何ものでもないと思ってきた。実際に図書館で仕事をする様になってその気持は更に強くなり，仕事をしながらの学問となれば，図書館学を現実生活に活用することこそ最も肝要なことであるとし，使命であると考えた。

私が大学院で一番最初に驚かされたのは課目名であった。因に私が取得した課目名の一部をあげると，「情報学特殊講義」「情報メディア特殊講義」「情報検索特殊講義」「情報システム特殊講義」等，特殊のオンパレードである。知らない人が聞けば特殊な情報を特殊な人が特殊な方法で分析していると思うのではなかろうか。又，図書館学がどこにも見あたらないのも特殊だなと思えた。授業内容は，特殊でなくごく平凡なものであった。

私が授業を受ける様になった58年４月は，新図書館がオープンして１年たち閲覧課の新体制がどうにか確立された時期であり，まだまだ多くの事柄を決定しなければならず，又，パブリック・サービスの仕事は利用者へ直接サービスを行うので自分のスケジュールをコントロールしにくい為に授業を休まなければならない事もあった。

１年目は課目をかなり履修したので授業の準備が大変であった。日曜日に予習の為に近くの公共図書館へ出掛けていった事もあった。２年目は，１年目よりも授業数が減り楽になった。しかし，そろそろ修論の事を考えると頭の一部が痒くなった。２年目の後期にこれはと思えるあるモデルに遭遇しそれを基本として修論を書こうと決めてみた。しかしながら具体的には，なんにも進まず，３年目を迎えた時は，修論の事を考えると頭の一部が痛くなってきた。３年目の60年は，閲覧業務の機械化が愈々具体的になってきており年度内に実施する事が決定された。その準備として画面設計の為のミーティング，端末を使ってのシュミレーション，機械後のマニュアル作成，Book-ID 貼付の事故処理等，閲覧課は一致団結して機械化の準備に取り組んでいた。忙しい時こそかえってできると訳のわからぬ事を考え３年目に修論を書こうと決心した。その時期，機械化の事と修論の事を考えると頭全体が痛くなる様になった。今考えると３年目の夏休みが修論を書き上げられるかどうかの分岐点であった。11月の三田祭後，ついに機械化が実現しひと安心。その前後修論はピタリとストップ。修論の事を考えると頭がしびれる様になった。61年１月末までに提出なので，暮れから正月にかけて最後の追い込みをかけるが思う様にはすすまない。結局，休みが明け学期末試験に突入し，閲覧課は一年で一番忙しい時期を迎える。１月27日清書完成。２月26日合格決定。

非常に忙しい仕事の中でややもすれば，仕事に没頭してしまいルーティン・ワークをこなすことで精一杯になってしまうことがある。日進月歩の学術情報である。業務の中に改善，改革をもち込む為には自らが情報を取り入れる事が必要となる。大学院はその意味ではインパクトがあった。又，研究者の立場で図書館を見る事ができるのもメリットと思われる。大学院を修了してからの自由研究こそが，実学としての図書館学そして図書館業務の改善につながると考えている。

専門分野のコア・ドキュメント

斎藤泰則
（三田情報センター整理課）

研究者によってよく利用される文献を把握することは，図書館サービスにとって重要な関心事である。文献量の増加が著しい今日においては尚更である。

特定の専門分野にはコア・ジャーナル（core journal）やキー・ペーパー（key paper）と呼ばれるコア・ドキュメント（core document）が存在するとされている。これらの文献は専門分野の研究を進める上で，研究者によってよく参照され，利用されるものである。

この研究者による文献利用の1つに，引用がある。これまで，この引用の分析を通してコア・ドキュメントを把握する方法が幾つか提案されている。雑誌についてはE. Garfieldのimpact factorという指標を用いた方法があげられる（"Citation analysis as a tool in journal evaluation." Science, v. 178, p. 471-479, 1972)。文献のレベルについてはH. Smallの共引用（"Co-citation in the scientific papers." JASIS, v. 24, p. 265-269, 1973）やM. M. Kesslerの書誌結合（"Bibliographic coupling between scientific papers." American Documentation, v. 14, p. 10-25, 1963）がある。

Smallの共引用は1つの文献の中で引用されている2文献に着目したものである。2文献を一緒に引用している文献数が多ければ多いほど，2文献の主題上の関係はより密接なものと考えられる。このような方法と考え方に基づいて，専門分野の多数の文献の中からよく参照され，かつ相互に密接な関係をもった文献を選び出すことができる。

ところで，最近人工知能や認知科学の分野では，専門分野の専門知識を分析し，研究者の問題解決に役立つようなエキスパート・システムの構築が進められている。大学図書館のサービス対象が学生と共に専門分野の研究者である以上，このような専門知識の研究に関心を払はざるをえない。

専門知識の研究は図書館サービスの領域においても可能である。専門分野で生産された多数の文献の中から選び出されたコア・ドキュメントは，その分野の研究者が利用している専門知識を含んでいると考えられる。そこで引用を通してコア・ドキュメントから実際に利用されている内容を調査することにより，専門知識を把握する方法が考えられる。

コア・ドキュメントは大抵は複数の文献からなる。そしてこの複数の文献は互いに何らかの主題上の関係をもっているのが普通である。Smallの研究ではコア・ドキュメント間の主題内容の相互関係として次の5つのカテゴリーが示されている（"The synthesis of specialty narratives from co-citation clusters." JASIS, v. 37, p. 97-110, 1986)。

第1は並列的な関係である。第2は類似あるいは相似の関係である。第3は比較対象の関係である。第4は一方が他方の特徴・特性を表わす関係である。第5は原因と結果の関係である。以上の関係カテゴリーを用いて主題内容の間をネットワークの形で結びつけていくことによって，専門知識を構造化して把えようとしている。この方法は人工知能や認知科学で用いられている意味ネットワーク（semantic network）やR. Schankの概念依存構造のやり方と似ている。

こうしたコア・ドキュメントに関する一連の調査を通して，人工知能や認知科学の分野とは異なった方法で専門知識を分析することができると同時に，専門分野の特質や方法論上の特徴の一端を明らかにすることができるかもしれない。

コア・ドキュメントの研究は研究者に対するより特定化したサービスを提供するための一助となろう。

ヘイ・オン・ワイの古本屋

—本を量り売りする店のことなど—

田　村　俊　作

古本屋の町として知られるウェールズのヘイ・オン・ワイを訪れてみた。以前から一度は行ってみたいと思っていたのだが，何せ留学先のシェフィールドから 300 km 以上離れた土地のことでもあり，思い切って出かける気になかなかなれないでいた。この８月に偶々カーディフに用事ができたのを良い口実に，寄り道をすることにしたのだった。

シェフィールドから高速道路に乗り，「スパデッティ・ジャンフション」と呼ばれる迷路のようなバーミンガムの高速道路網を敬遠して下に降りた他は，ウェールズとの国境付近までそのまま走った。高速道路はウェールズの手前で消え，それもヘイに通じる道に左折して入った後は，車がやっとすれ違える程度の細い道が牧場の中をうねうねと続く。小集落をいくつか過ぎて20～30分走った頃，やや大きな町に出たと思ったら，それがヘイの町だった。シェフィールドからは車で４時間足らず，ブレコン・ビーコン国立公園の中にある小さな美しい町である。

好天で，夏休み中のためか，眼につくのは旅行客，ないしハイカーである。丁度市の日で，城の前の広場には市がたち，近在から来たらしい客が集まっていた。町で見かけるのはほとんどがこういった人々で，古本を目当てに来ているのは少ないような印象だった。もっとも短ズボンにハイカー・シューズ，リュックを背負って，どこから見てもハイカーとしか思えない人が，古本屋の店先で本をリュックに詰め込んだりしているのだから，私の観察もあてにはならない。

最初に行ったのは，リチャード・ブースの古本屋「ザ・リミテッド」だった。

リチャード・ブースとその古本屋のことは，わが国でも何度か紹介されている。1961年にヘイに開いた小さな店を，彼は遂には４つの店舗と蔵書量百万冊を持つ，ギネス公認の「世界一の古本屋」にまで育て上げた。彼の「奇行」も有名で，中央集権の幣を説いてヘイの独立を唱え，ヘイ城に住んで独立を宣言，自ら国王に就いたという。

しかし，こういったことも昔の話で，城は焼け落ち，店も次々と人手に渡って，いまでは主な店舗は「ザ・リミテッド」を残すだけとなった。

その「ザ・リミテッド」は町の中心部にあって，さすがに大きい。内部は床も本棚も皆黒ずんだ木で，古びた印象を与えている。書誌類は一階，学術書は二階にあり，探していた本が見つかったのはうれしかった。

さて，「ザ・リミテッド」と並ぶのは，レオン・モレリーの「シネマ」書店である。ブースが昔の映画館を改装して開いた古本屋を買い取ったもので，モレリーは他にも老舗の古書店「フランシス・エドワーズ」を始め数軒の古本屋を買収し，またリチャード王の「退位」を迫るなど，ブースのライバルとして事業を拡大しているらしい。

「シネマ」は町の中心から少しはずれたところにあり，正面に人の背丈の倍程はある本のピラミッド（本を積み上げて，それに透明の覆いをかけたもの）を置いているので，すぐにそれとわかる。外壁の一部にも本が使われており，私には悪趣味としか思えないのだが，確かに人目は惹くだろう。内部は二層に分かれ，人がすれ違えない程びっしりと並べられた本棚には本が隙間なく並んでいる。

千人余りの町なのに，「ザ・リミテッド」と「シネマ」以外にも，ヘイには小さな古本屋が10軒以上ある。児童書専門店や美術書と版画の店等々，それぞれが特色を出しているのだが，中でも驚いたのは本を量り売りしている店だった。レジに秤を置いて目方で値段を決めている。私が買った本も，正確な値段は覚えていないが，見返しに２ポンドいくらとあった（どこかの古本屋からでも流れて来たのだろうか）のが，結局40ペンスだった。リチャード・ブースがかつて屑本を薪用に売りに出したと聞いたが，これもその伝なのだろうか。

私が持って行った1982年のヘイの古本屋地図とは今ではずい分様子が変ってしまっている。こんな小さな町でも古本屋の世界の変化は激しいのだろうか。本のピラミッドといい，量り売りといい，少々毒気を抜かれた思いで町を後にした。

（文学部助教授）

IFLA 東京大会雑感

原　田　いづみ
（日吉情報センター
パブリック・サービス課）

第52回国際図書館連盟東京大会は，‘21世紀への図書館’をメインテーマに，８月24日から29日まで開催された。

同時開催のホテルニューオータニでの展示会は，出版社と並んで情報関連機器会社がずらりと顔をそろえた，情報産業の見本市である。磁気方式と電波方式のブックディテクションシステムを実際に見比べることもできた。また，ただの新着雑誌の書棚にみえたものが，微妙に工夫がこらされていたり，逆に実際に使用して不便を感じているシステムも，美々しく，スマートに紹介されていたり，虚実様々なのも興味深い。情報総合展示会の名称どおり，和紙から機械検索まで一堂に会する様は，今後図書館の対応していかねばならない多種多様な側面を垣間みせてくれた。この展示会は，新聞・ＴＶでも紹介され，広く一般からも注目を集めたようだ。

さて，主会場青山学院へすすもう。

各テーマ毎に教室に分かれて発表がされる。聴衆は世界各国の図書館関係者，様々な背景を持つ人々である。発表の内容は問題提起が多く，一般的なレベルでディスカッションしやすくまとめられている。私が出席した中で印象に残っているのは《図書館学校分科会Ｉ》である。「21世紀に向けての図書館員養成：教育への挑戦」をテーマに２つの発表があった。

初めの発表はオーストラリアの方で，開発途上国から先進国へ留学する意義と問題点を述べたものである。問題が比較的身近で，しかもそれぞれのレベルで捉えることのできるものだったため，その後に活発に意見の交換がされた。英米の大学の方は，留学生は自国の問題に関連する勉強をすべきであり，受け入れ側として，そのためのカリキュラムを用意したい，又，教師の留学の必要性を補足した。ドイツの方は，留学が失業や昇進の遅れにつながる恐れがある状況をのべた上で，先進国から開発途上国に留学生を送ることの意義を主張。うんうんとうなづきながら聞いていた，自身も留学経験をもつベネズエラの婦人も続いて立ちあがり，理想論が現実のカリキュラム，職場においていかに難かしいものであるかを語った。キューバの女性は，ユネスコ主催の教師のためのプログラムに第三世界から15ケ国の参加があり，大変貴重な体験だったと語った。適切な英単語がでてこないでつっかえると，すかさず助け舟がでる。

活発な，高揚した雰囲気の中で，次の発表者が席についた。「21世紀に何が起こるか，誰もわかりません」と楽し気に言うなり，「ケ・セラ・セラ」の一節を歌いはじめた。聴衆も声をあわせて合唱したのである。時間の関係で質疑は省略されたが，聴衆の気持ちが一つにまとまったのを感じた。黙ってすわっているだけでない，“参加意識”があった。

この時間，地方都市の公共図書館の方と隣あわせになった。あらゆる面が異なる図書館である。わずかな時間話しただけだが，問題意識，興味の方向が随分違うことを感じた。自分がそれしか知らない世界を，いつのまにか当然と思ってしまっていたのだ。もっといろいろな人と話をしたかったと思う。どんな人が参加しているのか，どんな図書館に勤めてどんな問題を抱えているのか…。

また，私にとって初めての国際大会だったが，２日間参加して帰る間際にやっと話した英語が，六本木までの道案内だった。なんとか伝え，ほっとして別れた後，自分も何かに加担したという単純な喜びと，これだけでは情ないなあという気持ちとで複雑な思いをした。会場のそこここで，生き生きとコミュニケーションをかわす若い人達の姿が思い出された。

東京大会のメインテーマについて，21世紀への

図書館員は，抽象的にいうならば，旺盛な好奇心，積極性，1つの職場に慣れ切ってしまわずに，外側から見ることを忘れないことだと，反省をまじえて考えた。しかし，これは，21世紀に限らず，また図書館員に限らず，人間としての永遠のテーマかもしれない。

IFLA 東京大会の印象

関　口　素　子
（三田情報センター資料課）

昭和61年8月24日～29日にかけて開催された第52回 IFLA 東京大会に於いて，幸運にも二つの分科会に参加する機会が与えられた。図書館員となってから三年と経たないうちに，“世界の図書館人がやってくる”といわれる IFLA 大会が東京で開かれ，しかも自分が参加出来るとは，まさに千載一遇。逃してなるものか。

勿論のこと，国際会議と名の付くものも始めての経験で，服装は何が相応しいかと，前日は鏡の前で時間を費した。一般的に国際会議というのは人的交流を目指したお祭り色が濃く，さほど学術的で堅苦しいものではない，と聞いてはいたが，頭の片隅では国連本会議場を想像していた。

翌日，青山学院大学の分科会会場に入った途端，私の妄想は簡単に崩れ去った。ザッと眺め回して海外からの参加者は二割程度であるが，装いは皆思い思いで，おしゃれをしているのは若干の日本人であった。良かった，地味にしてきて…。

さて分科会であるが，「図書館理論及び研究Ⅰ」と「逐次刊行物Ⅰ」の二つに参加した。いずれも発表者が日本人なのが残念に思われたが，情報社会の中での今後の図書館の行方，といった内容に興味を感じ選択した。ここで発表の要約をするつもりはないが，どれも日本に於ける現状，或いは展望であり，既に課題としてあちこちで採り上げられている事項が多かったせいか，特に目新しい印象は受けなかった。更に日本民族の持つ消極性も手伝って，質疑応答の際に海外からの参加者の発言の方が圧倒的に多かったのには，自分も含めて情けなかった。日本人の国際会議での態度を皮肉って，3S と描写する。silence, smile, sleep の頭文字で3S だそうだが，そのうちの silence に関しては実証を得た思いである。

開催地は日本，しかも発表者は日本人で，聴集も日本人の方が断然多いにも関わらず，発表が英語でなされたのは，国際会議では通常なのかも知れないが，私にとってはちょっとした驚きであった。しかしその事実は私の認識を変えれば済む事であるから問題はない。実際，手元のメモを見る程度で手振りも加え自分の英語を使いこなしていた発表者もおり，この人に対する拍手は一段と大きかったし，私も非常に感心した。ところが，私の聴いた限りの他の発表者は，参加者に配布されるペーパーの英語版を読み上げているだけなのである。これでは感情を移入することも，チャールズ皇太子以来流行のユーモアを折り込むことも望めず，無味乾燥な発表となってしまう。棒読みを聞いているだけなら，自分でペーパーを読む方がまだましかも知れない。これでは，ペーパー執筆者，即ち意見の持ち主を目の前にしているメリットが半減するというものである。

それならば，と言って発表を全て日本語にしてしまっては，質の高い通訳が必要とされる等の問題が出るのは確かであるから，英語で行うのは結構である。但しそれならば，発表者としての資格を与える際，充分に英語力をも加味するべきだと提案したい。

次も又日本人への批判ともなり兼ねないが，司会役であった二人のアメリカ人女性の臨機応変な態度，当意即妙な発言には敬服させられた。発表者への賛辞や質問を喚起する言葉を実にうまく折り混ぜ，スムースに事を運ばせていくのである。これも個人の資質に加え，国民性に依る所が大きいと思われるだけに，是非共ネイティブスピーカーによる英語の発表も聴いてみたかったと残念で

ならない。

この大会に対する私の期待が大きかった為か，折角貴重な機会を与えられたというのに，随分と批判めいてしまい申し訳けない。しかし，IFLA大会とは何か，が自分なりに理解できたのは収穫であった。但しこれは日本でのはなし。他国でのIFLA大会は又どの様なものであろうか。

和装本その他の移動

研究者の書斎というのは，多分，書籍が乱雑に置かれているのが通り相場である。しかし，彼らには彼らなりの布石がなされている。従って，他人がこれに加工を施すと忽ちのうちに混乱する。このことは彼らが利用する図書館でも同じである。特に，塾の図書館のように蔵書の大半に自由に接架できる所では，研究者は自分のめざす図書はその架蔵されている場所によって記憶している。故に，彼らは図書の配架場所を絶対に動かして欲しくないと思っている。なぜなら，望む図書を探せずに忽ちのうちに混乱するから。

しかし，殆どすべての学問領域の図書を大学が存続する限り，収集，保存を義務ずけられている大学図書館では書庫移動は肉体を酷使する宿命的な，不可避の業務である。

*　　*　　*

新館Ｂ４Ｆの集密書架に架蔵されていた和装本1817棚を夏期休暇中に旧館第一書庫，第二書庫のＢ１Ｆに書庫移動をおこなった。この和装本は昭和57年の新館開館と同時に旧館屋根裏に架蔵されていたものを新館に移動し，今回再び準貴重書および文学部国文学科和装本（準貴重書）と共に旧館に移動した。その経緯は以下に述べる通りである。

まず旧館から新館Ｂ４Ｆへの移動であるが，旧館屋根裏は温度，湿度，塵埃，利用の便等の点から和装本の保存管理には適当な書庫とは言い難かった。そこで，空調の完備した新館に移動した方がよいという決定がなされ，開館と期を一にしてＢ４Ｆに移架された。しかし，実際に運用して見ると，いくつかの不都合が生じた。

一つは，和装本の保存管理に欠かせない燻蒸が新館Ｂ４Ｆでは不可能であること。第二は，新館Ｂ４Ｆ，Ｂ５Ｆは保存書庫ということで，利用に一定の制限を設けているが，建物の構造上，紛失を完全には防止できないこと。第三に，自由に接架できる文学部国文学科の和装本に別置が望ましい準貴があること。

これらの弱点を克服するための方途として，必ずしも完璧ではないが，旧館第一書庫，第二書庫のＢ１Ｆ移動しかないという結論になった。しかし，旧館第二書庫には既に図書が架蔵されており，これの移動から行わなければならなかった。

一方，旧館第三書庫２Ｆの経済学部，商学部の洋書，新館Ｂ３Ｆの教育学専攻図書の書架に余裕がないため，空をつくらなければならない。また，法学部法律学科の図書が新館Ｂ３Ｆにあるのは，利用の点から和装本のあった新館Ｂ４Ｆが適当と判断された。

以上の理由から総計11,689棚の書架移動が盛夏のさなかに行われた。しばらく利用者にご不便をおかけするが，ご理解いただきたい。また移動にあたって直接ご迷惑をおかけした関場先生をはじめ，各学部図書委員の先生にこの場をお借りしてお詫びとお礼を申しあげます。

ちょっと前まで学生だった

和田幸一

最近，年をとったのかな，と思うことがある。学生を何か冷めた目で見てしまうことが多いのだ。特に，酒を飲む場でその事を強く感じる。隣りで学生が騒いでいるのに出会うと，半ば，うらやましいな，と感じつつ，ああ，今の自分にはできないと思い込んでしまう。

図書館のカウンターでも，学生を，つくづく学生なんだなあと思って，見ることが多くなり，学生と一歩間を置いて応対する様になった。

前期試験の最中，こんな事があった。図書館のセルフコピーでノートをコピーしている学生にやめる様，私は注意した。「今まではノートのコピーはできていた」「やめさせたいのなら，人をつけて監視しろ」「ともかく，俺はコピーできないと不便なんだ」彼はそう反論したが，私は数分の話し合いの後，お引き取り頂いた。

その頃，セルフコピーはほとんどいつもノートコピーで満員だった。また，一部の閲覧室はグループ学習室同様，「友達と一緒に勉強する場」と化していた。入退館時の声もうるさく，図書館中が蜂の巣をつついた様な騒ぎの毎日だった。私はこんなことを思った。

ここは図書館だ。

待ち合わせをすることがあるかもしれぬ。友達と会って「ヤアー」ということがあるかもしれない。しかし，ここは飽くまで図書館だ。待ち合わせをするための場所でも，おしゃべりをするための場所でもない。まず第一に，図書館の資料を使って勉強するための場所だ。そのための利用者が第一優先されるべきだ。図書館でのノートコピーが便利だからといって，図書館の資料をコピーしたい人間が迷惑するというのでは話が違う。

そして，図書館では静かにすべきだ。「俺はうるさくても勉強ができる」「自分は大丈夫だ」そんな理論はやめてくれ。図書館は静かにする所だ。そう頭に叩き込んでおいてほしい。

図書館で，おしゃべりをしている時，待ち合わせをしている時，ノートをコピーしている時，君達はやくざな人間だ。注意されたら，黙って引き下がらなくてはいけない。

「サークルで集まる場所がない」「待ち合わせに都合がよい」という君達の気持ちもわかる。しかし，それを図書館に求めるのは間違いだ。少なくとも，図書館のみに求めるのは間違いだ。考えるとしたら，塾全体の問題としてであろう。

そして，何らかの意見があるならば，はっきり堂々と言ってほしい。そのためのシステムについては，何らかの手段を構じたい。今までそのシステムがなかったことについては謝る。

こうは思うのだが，その中にも多少ぐらつく点がある。図書館内でノートをコピーしたりおしゃべりをする学生と，そうでない学生を分けて考えた。しかし，実際にはほとんどの学生がその二面性を持っていることは疑いない。そして，例えば，自分が静かに勉強している時，他人がうるさくても，「自分が騒ぐこともあるから他人に偉そうなことも言えないし，お互い様だ。」また，それ以前に「自分は自分，他人は他人，面倒はいやだ」という考えもあろう。かつての自分もそうだった。

昔，私が高校生の頃，クラブ活動の帰りの電車の中でだった。マンガを読もうとした僕をＯＢが止めたのだ。「電車の中で読むものではない。」今私はほとんど何の抵抗もなく電車の中で堂々とマンガを読んでいる。誰かに注意されれば，少なくともその場はやめるだろう。私には，どちらかと言えばやめた方がいいだろう，程度の意識でしかないのだ。私が学生に対して思ったことも，学生にはその程度にしか考えられないのかもしれない。立場の違いはもちろん大きな要因であろうが，それ以外にも，世代の違い，根本の考え方の違いを感じざるを得ないのだ。自分も年をとったということだろうか。こう考えてくると，利用者である学生をよく知らないことを痛感する。反省。

（日吉情報センターパブリック・サービス課）

早慶相互協力について

加　藤　好　郎
（三田情報センター閲覧課係主任）

1. はじめに

学術情報は年々生産量が増大してきており，利用者の要求も多様化してきている。この様な状況の中で，ひとつの大学でその情報のすべてを収集する事は不可能になってきている。早稲田大学と慶應義塾大学は，研究・教育の一層の充実・発展を図るために互恵の原則に基づきながら，協力し合い，足りない情報を補い合う相互利用が，昭和60年10月1日から61年3月31日の試行期間を経て，61年4月1日より本実施された。

2. 実施要綱

大学の専任教職員ならば，互いの大学の専任教職員と同等の資格で図書館を利用することができる。例えば，早大の教員が慶大で登録すれば貸出冊数30冊，期間1ケ月で図書を貸出することができる。慶大の教員も早大で登録すれば同様の条件で貸出を受けることができる。入館に関しては，早大は特別入庫閲覧証，慶大では図書利用券を携帯していれば自由に入館できる。

直接図書館に出向かなくても，図書館の資料を利用する方法もある。機関貸出と称するもので図書館同士で貸借を行うことである。ファクシミリで図書の問合せを行い，所蔵が確認できれば水曜日の塾内便で図書が送り届けられる。早大の図書は3時半頃三田に着く。届けられた図書は，水曜日から2週間図書館に保管される。その間，毎日館内閲覧をする事ができる。機関貸出で借り出された図書は，館内閲覧が原則とされているが専任の教職員の場合は，必要が認められれば館外へ帯出することもできる。機関貸出は，大学院生，学部生も利用する事ができ，申し込みは，メインカウンターで受け付けている。

この他，複写による相互貸借も今まで通り行われており非常によく利用されている。

3. 利用状況

試行期間の利用状況を表1・2に示す。

表1　早大から慶大に依頼したもの

照　会	34件	所蔵有6件　所蔵無28件
複　写	137件	複写可130件　複写不可7件
借　用	55件	借用可54件　借用不可1件
登　録	5人	貸出冊数10冊

表2　慶大から早大に依頼したもの

照　会	110件	所蔵有22件　所蔵無88件
複　写	99件	複写可93件　複写不可6件
借　用	51件	借用可48件　借用不可3件
登　録	0人	貸出冊数0冊

早大から慶大への依頼は，全部で233件，慶大から早大へは264件であった。照会件数は，大幅に慶大が上回っており，複写依頼は，早大が多く図書の借用は，ほぼ同数となっている。照会のヒット率は，ほぼ20%前後とほとんど同率で，複写可能率も94%とほぼ同率となっている。図書の借用の可能性も早・慶とも95%とほぼ同率である。以上の数字から互恵の原則は守られているといえよう。

次に利用者別にみると表3・4の様になる。

表3　早大から慶大に依頼したもの

複　写	教員66件　大学院生33件　学部生14件 校友1件　職員16件
借　用	教員3件　大学院生39件　学部生8件 職員4件

表4　慶大から早大に依頼したもの

複　写	教員54件　大学院生23件　学部生0件 職員・その他16件
借　用	教員8件　大学院生25件　学部生4件 職員・その他11件

利用者別に見てみると複写については，早大は教員50%，大学院生25%，学部生10%，職員（事務用，含）12%となっている。慶大は，教員58%，大学院生24%，職員（事務用，含）17%となっている。借用を比較してみると，早大は教員5%，大学院生72%，学部生14%，職員7%で，大学院生の利用が際立っている。慶大は，教員16%，大学院生52%，学部生8%，職員（事務用，含）22%を占めている。慶大も大学院生の利用率が一番高い。早慶とも複写は教員，図書の借用は大学院生が相互協力の恩恵を受けているといえる。

慶大から早大へ貸し出した図書のうち88%が洋書であったのに対し，早大から慶大へ貸し出した図書のうち洋書は58%であった。この数値及び，全蔵書に占める洋書の率（早大35%，慶大48%）から蔵書の特徴をみると，慶大は洋書にその特徴が見い出されると言えるかもしれない。

個人貸出の登録者数をみると，慶大で登録した早大の教員が11人（86年7月31日現在）であるのに対し，早大で登録した慶大の教員はゼロである。この事は，教員の図書の利用は洋書が多いが，早大は現在洋書が使いにくい状態にある事と，早・慶の研究者のタイプの相違も原因と考えられる。

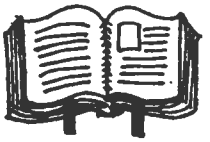
相互利用が始まる前後の紹介状の件数を比較してみると，早大から慶大に出された紹介状は，59年102件，60年123件，61年31件（7月31日現在）である。一方，慶大から早大に出された紹介状は，59年45件，60年33件，61年20件（7月31日現在）となっている。紹介状件数は，相互利用が始まってもほとんど変化していない。これはひとつには，相互協力がまだ浸透していない点と，自ら入館して関連文献をも容易に検索できる慶大の図書館の使い易さからと考えられる。

本実施（61年4月）からの利用状況をみると，図書の貸借は，慶大から早大に依頼したのが和書23件，洋書24件，早大から慶大に依頼されたのが和書7件，洋書69件となっている。複写件数は，早大から慶大が106件，慶大から早大が114件となっている。

4. むすび

利用者にとって相互協力が有効であることは勿論であるが，図書館の業務にも非常に役立っている。例えば，雑誌の欠号補充や切り取り本の補充の仕事が今までよりスムーズに行われる様になった。現在のところ相互協力を実施したことでの利用者からのクレームや借用図書の紛失，延滞，学内の利用者と利用がダブルケースなどはなく，順調に行われている。

図書館サービスの形態がとかく異なる早慶が歩み寄って始まったこの相互協力も，まだまだ細かい点で煮詰めなければならない点が生じるかもしれないが，大筋では互恵の原則に基づいて早慶の図書館サービスの拡大・充実が図られていると言える。慶大からみれば，200万冊の蔵書が相互協力により470万冊になったと言えるからである。この相互協力が定着する事によって，将来は分担収集，分担購入，分担保存によって財政面，スペース面の確保も考えられるだろう。早大以外にも，互恵の原則をはじめ，いくつかの条件が満たされる大学図書館ならば，今後も大いに相互協力の輪を拡げられる可能性もあると考えている。



私の図書館回想（1）

笠野　滋
（研究・教育情報センター本部事務室室長付）

はしがき

私の図書館キャリアの原稿を編集子から求められたとき，所謂キャリアに値する著作一つ残してないこと，また何ら顕著な業績を挙げてないのにも関らず，この依頼を私は迂闊にも受けてしまった。そして定年を迎える心境を初めて実感した。昭和27年5月に始まった塾の図書館での勤務は昭和63年3月で閉じることになる。情報センターの機関誌に勝手な独りよがりを書いて，後々まで内外に迷惑を掛けるのではと内心悩んでいたら，編集子から軽く読みもの風にという救け舟も出されたので三期に分けて辿ることにする。

1. 藤山工業図書館，三田の慶應義塾図書館に勤務した昭和27年5月から昭和39年10月までの12年有余
2. 三田研究室主事を振り出しに新研究室建設工事を始め，第一次棟の完成をみて，又図書館に戻り昭和46年の情報センター組織となり，副所長付で過した昭和52年5月までの12年有余
3. 矢上台に移り，理工学情報センターの副所長を昭和61年5月まで9年間勤め，三田の情報センター本部事務室長付となって定年を迎えるまでの10年有余

何分にも30数年も以前のことから始まるので当時の上司で，先輩に当る伊東弥之助主任司書編纂の『慶應義塾図書館史』昭和47年刊（以下『館史』として引用）と，最近刊行された福沢研究センター編『創立百二十五年慶應義塾年表』昭和60年刊（以下『慶應年表』として引用）等によって記憶を蘇がえらせつつ，この乏しい回想を記すことができたので一言お礼を申し上げ，予めお断りしておきたい。

なお社中のことなので事務系列の方々には，君付で，先輩，後輩を問わず使わせて頂いた。また教員系列の方も事務系列の時代のものは君付となっていたり，教授，助教授等の昇格職名がその時のと不一致のことも多々あると思われるが，寛恕をお願いいたしたい。学外の館界の方々には氏を原則として用い，教官，教員の方々には教育職名を一応付してあるが，本編登場時の不一致については，ご寛恕を乞いたい。

I

1. 藤山工業図書館に就職

藤山工業図書館とは現存しない慶應義塾図書館の分館で，港区芝白金台町の日吉坂上左手にあって三田からは目黒，等々力ゆきのバスの清正公前で降りて，今では都ホテルとなってしまった藤山邸のつづきにあった図書館である。つい先頃その跡にはいま流行のＳＰＡ（アスレチックス　スポーツ・センター）が出来て，鉄筋コンクリート4階建（一部5階建）約700坪（約2,300m²）の旧施設はもうバスからも眺められなくなっている。昭和2年3月大日本製糖社長の藤山雷太氏の創設になったこの図書館は，太平洋戦争の末期昭和18年12月嗣子藤山愛一郎氏から塾に寄贈された。

しかし，戦後の工学部が，その戦禍から小金井キャンパスで着々と復興すると，藤山はその維持すらが困難となり，昭和32年7月には千代田生命保険相互会社に，その敷地，建物が売却譲渡された。そして蔵書は極く一部が小金井の工学部図書

館に移され，残余の大半は日吉旧寄宿舎の南寮と日吉記念館地下倉庫へと分散保管された。売却代金を主とし昭和33年８月には日吉に図書館が落成，10月には慶應義塾藤山記念日吉図書館として再生したが，今や歴史的な存在となってしまった。

昭和27年は，何んでも物がある現在とちがって，太平洋戦争後の喰うや喰はずの時代から，講和条約（昭和26年９月）が発効し，国民総生産（ＧＮＰ）は戦前に復帰したものの，図書館では飯が喰えないと転職を申し出た職員があったため，欠員が生じるというので急拠詮衡が行われ，幸いにも私は応募者５名のうちの一人となる機会に恵まれた。

面接は三田の本館の八角塔の館長室で，野村兼太郎館長によって行われた。野村館長は藤山の館長も兼ねていた。後手に伊東，石川博道の両本館主任司書（以下主任と略す）と藤山の安食高武主任の三人が控えていた。提出されていた書類を眺め，成績表を片手に野村館長は度のきつい眼鏡の奥からギョロとした鋭い眼差しを私にくれて，一寸微笑んだ。質問は「書誌学をとったことがあるか」という簡単なものであった。「ありません」「これからやってみます」と答えるのが精一杯だった。経済学部の専門課程の必修科目４ケのうち原論，学説史，政策は良かったが，野村教授の西洋経済史だけがＢであった。しまったと思ったが，おそかった。二三日して体格検査があり，採用通知に接した。そして前任者が証券会社へ転職した翌日の５月16日から勤めることになった。

藤山は安食主任ほか12名で司書には大鐘誠一（後に工学部図書室司書，工学部会計課長），司書補に若松徳三郎，島原落穂（後に北里記念医学図書館），吉岡進の３名，書記には小林広（工学部図書室を経て，現理工学部基礎教室），三村京子，藤井澄子の３名，出納手に小沢圭介，大橋敏男の２名，ほかに用務員が２名という構成だった。毎月19日になると安食主任が三田に出かけ給料を運んできた。まだ戦後の住宅事情が悪かったので，館員のうち４名が図書館の施設内に住居を構えていた。その他藤山には，三田の文学部の考古学標本室や戦争中に海軍省法務局に使われたという拘置所の残骸のような施設もあった。

2.　第３回図書館専門職講習へ

藤山での仕事は和書受入兼分類係ということで見習を始めた。安食主任が選書し，購入を決めたものを，受入伝票と称するワーキングシートに書誌事項，購入先，価格等を記入し，受入台帳（図書原簿）に記入するまでが私の仕事であった。基本記入のカードは手馴れた島原落穂君が作成していて藤井君が助手で，私は分類に気を配ればよかった。

翌昭和28年７月，幸いにも東京大学での教育学部主催の２ケ月間の第３回「図書館専門職講習」（以下司書講習）に館から派遣されるというチャンスに恵まれ，17科目の単位を修得することができた。塾は文学部の中に日本図書館学校（ＪＬＳ）を設けていて，昭和27年３月には第一回卒業生を送り出していた。慶應義塾図書館にも新進気鋭として既に井出翁（いで・さかり）君を迎えてはいたが，その当時は知る由もなかった。藤山は離れ小島だった。日本の図書館界を一新するため，折から来塾していた米国図書館界の教授団はまず本邦の館界の指導者達を集め指導者講習会を開き，そこで米国流の新しい図書館学，図書館運営を最初に伝授し，つぎに新しく教育された人々が中心となって第１回，第２回と司書養成の講習が開かれるようになった。この機会に乗り遅れまいと，館界の既成人にも，この講習は仲々の人気があった。

第３回の講習は全国から国，公，私立，公共・大学・学校など各種の図書館員200名を集めて行われた。塾からは阿部隆一，青木安勝（現体育会主事）の両君と私が派遣された。私は56番に受付されていた。講師陣には東大の土井重義（図書館通論，和漢書目録），青野伊豫児（図書館実務，図書選択法），裏田武夫（成人教育，レファレンス・ワーク），国会の岡田温（図書館史），中村初雄（洋書目録法），もり・きよし（図書分類法），公共図書館からは，廿日出逸暁（対外活動）等の諸先輩が顔を列ねていた。講習中阿部隆一君は馳せ参じた講習生の中では，誠に生々と古書や書誌学，図書館運営等について論談の花を咲かせ既に

一家をなしていて，頼もしかった。

素人から館界に入った私は，この講習では，講師だけではなく，国立，私立を問わず，良き先輩と友を得ようと努め，館界への手掛りがつかめて嬉しかった。

図書館では利用者を優先する考え方，合理的な整理技術，レファレンス・サービスの積極的な採用，国の図書館行政の在り方等，どれをとっても私には新鮮で，生々しく頭に焼きついた。しかし講師の中には「図書館では一業十年」つまり一つの仕事も十年しないと，ベテランにはなれないと繰返し強調された講師もいて感銘深かった。暑い夏とはいえ，最高学府の赤門を潜り，法文系教室で汗を流しながら聞いた講義，三四郎池での新しい友との語らいは，どれをとっても満足感があった。

3. 藤山時代に経験したこと

瓏げなものを拾ってみるとつぎのようなものを挙げることができる。

1) 藤山の施設が工学部のキャンパス（昭和24年小金井移転）から離れていて，図書館活動には年と共に不利となっていった。学部の研究者や学生の利用に貢献することが少かった。

2) そのため工学部側からは新着図書や雑誌の受入後の一部小金井借り上げの噂さが伝えられた程であった。昭和29年5月刊の『慶應義塾図書館月報』に特集された各館の備付の雑誌の種類数では藤山が邦文雑誌149種，欧文雑誌164種であるのに対し，工学部図書室は邦文141種，欧文109種で藤山に比し劣勢であった。

3) 財団法人時代からの伝統を受けついで日曜開館をしていた。館の性質上利用の主体は工科系の学部のある早大，東大，東工大の学生が多かった。企業の研究所に所属する研究者や，偶には街の発明家も来館していた。大学受験浪人では工科系の受験生が目立っていた。閲覧者は平日より日曜が多く，在館中の最高は百数十名を超えていたように思う。入館料は10円だった。

4) 工業図書館では図書より雑誌の利用の方が多く，安食主任が主な国内雑誌の論文の中から適当なものを拾い上げ，件名を付け，小林広君が克明にカード化して閲覧に提供していた。この館内の雑誌記事件名目録は仲々閲覧者には好評だった。

5) 当時特許公報の寄贈をうけていたが，135の主題から207主題に拡充改訂された頃で，特許庁の担当官が視察にきて，我々が細かく主題に『特許明細書第10類水力原動機』等と明記して分類目録に繰込み，閲覧に提供していたのに感心し，実用新案，意匠登録等関連種目の刊行物の寄贈を始めてくれた。

6) 或る日私は館内の未整理資料の中から『最新工学文献摘録通信』の未受入の2冊を発見した。これは昭和の初期から財団法人の藤山の外郭団体，最新工学普及会が，工業図書館のシンボルとして外国理工学雑誌記事の抄録を発行して配布していたことを物語る証しであった。その冊子にはカードスタイルの抄録10枚分が，B4版で片面刷されていて，切り離しカードに貼りつけても使用できるようになっていた。

7) 藤山の図書分類には極めてユニークな図書の十進分類法が採用されていた。その分類法は図書の内容の使用国語によって100番台は邦文，200番台は英語の図書，300番台は独語，以下400番台仏語，500番台にはロシヤ語，600番台オランダ語にそれぞれ割当られていて，それ以下の二桁が各主題に充当されていた。即ち00工学一般，01が土木・建築，02電気，03機械，07運輸という具合である。従って203は英語の機械工学を意味した。なお雑誌は受入順番号に0（ゼロ）がつけられ203・05機械工学の雑誌を意味した。詳しくは『財団法人藤山工業図書館年報』昭和4年刊に記されているので省略する。

8) 企業の研究所等の図書室に当時ぽつぽつ採用されつつあった国際十進分類法（UDC）による図書資料の分類の可否について，第二校舎にあった図書館学科の事務室にギトラー主任を訪れ，訊ねたことがあった。すると教授は一週間程したら来るように指示された。約束の日に出頭すると一枚の謄写刷のシートが手渡された。それには十進分類法を図書・資料の分類に使用する場合の利害得失が，列挙してあって，UDCは資料や雑誌

記事等の分類には適するが，数字の外に各種の符号を使用するので，図書の請求記号として，ラベルに貼布して使用するのに不適であること。桁数も長くなり易いこと，高度の工学，技術，自然科学の専門知識が必要とされるということが，英文と和文で記されていたのを幽かに覚えている。暑い夏の日のことで西日を受けた木造建の事務室で教授は顔を汗で一杯にしながら「判りますか」と問うたので，私は「イエス」と答え，家路についた。

9） 見学に来訪した川崎工業地帯の確か東京芝浦電気(株)であったか，総務部長ご一行を安食主任と共に案内して，雑誌の質のよいを褒められて気をよくしていると，図書予算はいくらですかと質問があり，安食主任の云十万円の答えに，総務部長は部下を振りかえり，「うちと2桁ちがうなー」と一言つぶやくと，そそくさと立去ってしまった。天下に通用しない予算規模だったのだ。

II

1. 慶應義塾図書館への転出　教職員貸出係

昭和24年の工学部の小金井移転以来藤山は早晩閉館の運命にあったが，私は昭和31年7月第一番に，三田の本館に転出することになった。新入りの私の仕事は教職員貸出係ということで，前任者は堀田信夫君（現斯道文庫事務主任）で懇切叮嚀に申継をしてくれ，彼自身は和漢書の受入，整理の仕事に移ることになっていて私の着任を歓迎してくれた。係の位置は現在の旧図書館入口を入って左側の福沢研究センターの部屋で書庫からの出口の所に席があった。席の右手からの第三事務室の北半分は図書館学科のリファレンス・ルームとなっていた。学科の教員の方や図書室の職員の人々にも，自然と顔を覚えて頂けた。

戦前は本館では学生，一般外来の閲覧者は地下一階の受付から入館する方式が行われていたが，教職員の方は正面から入館する仕組である。入館すると左右の目録を検索して必要な図書の請求記号をメモし，入庫して本を探し当て，貸し出し係の私の所で手続を済まし，図書を借り出して行った。そこで無言の場合もあれば，短い対話を交して，求める図書が請求記号の位置に所在しなかったりすると，誰が借り出しているのか，欠本であるのか調べて欲しいと依頼されることもあった。借用期限が切れている場合には借り出している人に返却の督促をした。

ここで気が付いたことは，若い研究者が或る日勢い込んで，真剣な眼差しで，顔をこわばらせ書庫に飛び込んで行き，やがて書庫から出てきてその図書が貸出されていたのか，不在だった場合や行方不明の場合，がっかりし大きな嘆息をついている姿をみることが，しばしばあり同情した。つまり彼自身の研究のため，読みたいと思った図書や，研究のため不可欠な原典，解説書の類いが，もう先人により借り出されていたか，既に行方不明のため欠本扱いとなってしまった場合である。

行方不明，欠本の場合も結構多かったが，借り出し先が，大先輩の場合や他学部の場合は，必ずしも返却，取戻し方を依頼するとは限らなかった。或は直接話し合うか，教員同士のお互の慣行のようなものがあって，それによって決めていたのかもしれなかった。この仕事の間色々なタイプの借り出し方があることも判り，借出し図書が100冊を超えた人もいて，利用者と貸出係との相互の便宜のため年度末に一括リストを提出して頂き，継続借出しの手続に代えることを提案して試みてみた。中には聖域が若干あって督促を絶対してはいけない方があったのには驚かされた。貸出係は日々の貸出記録を残し，週計，月計，年度等の統計作成が，仲々面倒であった。貸出係は，9ケ月ばかりの短期間であったが，教員のお顔と名前を覚え，対話を交したお蔭でつぎの業務に移っても色々とご教示を得ることが多く有難かった。

2. 洋書受入兼分類係見習

昭和32年3月末になると前任者が図書館を辞めて他の大学の教員になるため退職するということで洋書の受入兼分類係に廻された。仕事の場所は図書館の入口を入った右手の現在福沢研究センターの展示室になっている場所が，第一事務室で和漢書，洋書の整理室になっていた。その奥が第二事務室（現展示室控室）で仕切のドアは無く，そこには大きい黒いガラス戸棚を背にして伊東主任

が両者に睨みをきかせていた。その右手が洋書受入係の席で，前には落合喜久子君が和洋請求書の処理を担当していた。佐藤次郎君（現総合企画室部長心得）も確か4月からこの第二事務室に加わり，庶務会計の仕事を伊東主任の下でとっていた。その外，太田臨一郎常勤嘱託の席もあった。第一事務室は石川主任の指揮下にあって，和漢書と洋書の整理の機能の他，函架廻りの仕事もあり又閲覧出納係への指示等を含め，石川主任は司書補，書記，出納手達をてきぱきとさばかれていた。藤山からは私の後で就任した田中正之君が二番手として，和漢書係の方に席を得たが，残りの人の消息については，本務が忙しくそれどころではなかった。

前任者の伊東晨君は担当していた仕事を手短かに要領よく説明してくれた。それによると，購入，寄贈，見計らい等搬入されてくるすべての洋書を館長に月に一回か二回，見せて取捨選定をして頂くこと。それに引続く，受入と分類の記入をワーキング・シート（伝票）に記録し，図書に付けて，第二事務室の目録係，小林完太郎君（現商学部教授）に廻す。その後はタイピストの金森恭子君（旧姓小田）を経て，図書とカードは石川主任の点検を受け，書庫や目録ケースに収まってゆき月報にも掲載されるという整理の流れであった。

伊東君の申継は当然知っている，判ると思われることには一切触れなかった。私は彼の説明を聞き洩らすまいと懸命だった。トタン製の継続図書控（双書，シリーズ物等）の卓上ケースにはＡＢＣ順にタイプ打ちされたシートが，100枚程入っていて，目下整備中ですから後を宜敷くということであった。

洋書の分類は当館独自（十二門分類）のもので16記号の英字であり，分類の項目名辞はこの通りですと一枚のシートを受取った。私は目録の採り方について聞くと，それは次の係ですということで打切られてしまった。私は昭和28年の司書講習で受けた洋書目録法の講義のノートを取り出し，目録法の解説書を一，二冊通読しなければならなかった。

4. 4cm 角（一寸五分）の蔵書印にどっぷり朱肉を含ませ，一寸息を呑んでから下腹に力を入れて位置をタイトル・ページの対角線の交叉するところから幾らか下った所に蔵書印を構え，無念無想の境地で押し付けて息きを吐き，押し終えると，つぎに座布団と称するザラ紙を挿んで，反対側の頁に朱肉の型が写らないようにする受入係の日課が始まった。

3. 選　書

館長室での選書は直径約180cmの円いテーブルの上に，文学，歴史，政治，経済，哲学といった粗い区別をした洋書の山を一杯に築き，それぞれの図書には重複調査をした結果をメモ用紙に記入して挾んで用意し，野村館長の裁断を仰ぐという次第であった。館長の登館は週一回位で，和漢書の選書の方の回数が多く伊東主任が取り仕切り，館長と選書をされていた。洋書は月一回位で，野村館長は図書の山に叮嚀に目を通されるらしく，終るのが待ち遠しかった。何分にもドアの向うの出来事なので，私には何も判らなかった。終了すると呼ばれていくつかの駄目を出される。これはないと思った本が「この初版はある」，「調べましたが」と答えると，冊子体の洋書目録1929年刊 “Catalog of The KEIO GIJUKU LIBRARY, Classified.” はみたかの第2の注意がくる。これを見落していたわけである。この目録に収録された図書は順次，閲覧用の著者名目録からカードが抜き去られたので冊子体目録とカードの両者を検索しなくてはならないので不便なこと極まりなかった。この方法の欠点が途中で判ったため中止になったという経緯があり，経済学のパートは既に抜き去られた後の祭りであった。

野村館長始め歴代の館長の収書方針等については『館史』に詳しいのでそれに譲りたい。本稿作成中には図書館商議会記録や必要な参考資料に当って記憶を呼び起すまでには至らなかったので，ここではエピソードを記すに止める。

野村館長に洋書を選んで頂いたのは昭和32年4月から高村館長就任の昭和33年3月までの一年間の極く短い期間で，僅かに丸善から見計らいできた『ギリシャ史断簡』“Fragmenta Historicorum. C. Müller. 1848—1938.” を選書テーブルの目の

付く所に展示したら，終ってから君もこんな本が選べるのかと御機嫌だった。

管理貿易下で昭和25年頃から再開された洋書の輸入は当時の書店側の資力も限られ，外貨枠の確保もままならなかった時代である。昭和32年頃はその名残がいくらかあってまだ書店側が強く，洋書は売手市場がつづいていた。野村館長時代特に紀伊国屋書店からの見計い図書にはフランス語の図書が多く，文学，思想，社会等あらゆる分野のものに富んでいて粒揃いだったのは，仏文の佐藤朔教授が若手の教員方の協力を得て新宿の書店の店頭や仕入部で，海外から入荷したばかりの図書を選定し，三田の研究室，日吉の研究室，本塾図書館へと送られていた結果粒揃いであったことが判った。これを知ったのは後に三田の研究室に私が廻ってからのことである。このことは野村館長が諒承されていたといわれ，こと洋書のフランス文学等の見計らい図書に関しては心強い選書の蔭の援軍をもっていて，若手の教員の推薦されたものを吟味されていたのかもしれなかった。

昭和33年4月に就任された高村象平館長はドイツ経済史，特に中世から近世へかけてのハンザ同盟の研究者として著名だったので経済関係は総てをお任せし教へて頂く気持でいた。高村館長は助手時代図書館員がもて余した史料の整理をやられたということで英国史関係にも詳しかった。館長の注文の時代がやってきた。館長は E. Semmel と L. Röhrscheid の自宅に海外から送ってきたカタログを丹念にチェックして，まだ受入られてないものを注文するように指示された。多い時には一冊に100点近いチェックがあって著者名目録や書冊体の目録と首引きで発注した。そして発注ファイルはみるみるうちにふくれ上った。ドイツ書の発注は極東書店が多かった，これは注文の混交を避けるためであった。入手率は良くて3割乃至4割位であったように思う。馴れるに従って，教員の方々の推薦も大物は，伊東主任に話を通したり，館内の各係からの注文も予算の許す限り受付ける方針にしていった。特に参考図書の不足を喞っていたレファレンス係の丸山信君からは各主題の分野をカバーする専門事典や一部しか図書館になくてレファレンスに備付られなかった図書を推薦してもらった。またヨーロッパの嘗つての一流国であったとされる諸大国の大百科位は備付けるべきであるという教員の方々の意見にも支えられて，つぎつぎと発注の裁可を仰いだ。それらの発注は丸善，紀伊国屋といった大手業者の他に，その主題や国語に強い書店を積極的に活用してみた。

或る日東独の二，三枚ものの古書カタログが到着した。ふとみると M. G. h. “Monumenta Germania historica.” とあるので継続図書控をのぞくとその一部の受入しか記入がなく，この売り物を拾うと双書の大半が揃うことが判った。館長に相談すると「直ちに押えるように」ということで極東書店の担当者に電報で押えるよう発注した。旨く入手できればと祈ったが，二三日して無事押えたという連絡があって入手できた。まだこの時代には海外古書購入の競争相手が少く，東独の古書は比較的廉く約二ケ月位で到着し受入られた。ただ大型本の史家部（Scriptores.）は半分位欠巻があって後に覆刻ものや，何かで補完するのに三年以上を要した。“M. G. h.” は現在も継続発展中である。この双書は配架するのにも手古摺った。何分，大型本と小型本の混在するシリーズなので当時屋根裏に大型本が配架されていて，一括した方が何かと便利なためこのシリーズに限り，特例として屋根裏に配架することになったが，階段の昇り降りに苦労をさせられた。

野村館長時代の終り頃から始められた収書に法学部の図書委員長から推薦された英国，米国判例集，法令集の収書がある。野村館長は顔をしかめられ当初一時には無理だ，順番を考えて受入れたらどうだとの意見で英法の部分と米法の既収部分との洗い直しから始めた。法学部の平良教授の指導を受け，連絡をとりながら，そして研究室とは重複しないようにという高村館長の指示に従い，毎年一定の予算の枠内で，必要なものから何年もかけて補充に努めた。

昭和35年6月に高村館長は塾長に推薦された。法学部の前原光雄教授がつづいて館長に就任された。館長は私には，教員の推薦してくる図書は良

いものであれば，学部の枠などに拘らず購入して欲しいということであった。洋書受入係を始めた私は野村館長時代が，行儀見習，高村館長の時が修業の最中で，こんどは逆に責任が，重くなってきていた。前原館長に特にご希望の図書はありませんかと伺いを立てたら，学生諸君にも利用できるように "Prize Cases." (Lloyd's Reports of...) の 2nd. Series. 1939～57. を購入してやってくれといわれたのを覚えている。これは館長が国際法の専攻で，戦時や国際的な紛争時に第三国の船舶等を当事国の一国が捕獲，拿捕した場合に各国の司法裁判所で起された訴訟の判例解説（Lloyd's 社出版）であると教示を受けその戦後の部分をという注文であった。古書なので，入手は遅れて昭和40年となってしまった。

＜学徒出陣の巡回文庫＞

古い歴史を持つ図書館で働くことの楽しみの一つは，仕事を通じてその古さを実感することであるかもしれない。その実感のしかたは部署によって様々であろうが，図書の貸出し，返却を主な任務とする閲覧課でのそれは生身の人間が間に介在するだけになかなか味わいがある。

先日も昭和19年に貸し出された本20冊近くが42年ぶりに返還されてきた。大きな宅急便の包みが突然何の前ぶれもなくいくつも届けられたのである。後続のご家族からの手紙によって委細は判明したが，借受人は表向きは慶應義塾とは無縁の人である。だからその限りでは借り出す資格のない人であった。図書はどれも大型の美術本で当時であっても禁帯出であった筈。一体どんなルートでこんなに大量の禁制本を借り出すことができたのだろう。42年間のこの図書の辿った流転の運命は如何だったのか。

そんな歴史の重みの感傷が支配している頃，柄沢日出雄さんの訃報が届いた。柄沢さんは戦前・戦後の激動の時代に慶應義塾図書館の主事，副館長を務められた人である。数週間後，ご遺族から数冊の図書が返還されてきた。そのどれもが戦前の図書で，古色蒼然たるものであったが，その中に「巡」の文字を打った見馴れぬラベルつきの本が１冊あった。図書は昭和18年刊行の西洋経済史（高村象平著）という教科書である。「巡」という文字の意味やこの本の役割は一体何だったのか。

その時代は戦前・戦後の混乱期には違いないと推定できても，今のスタッフには往時を知る人はいない。そこで退職した先輩にアプローチして調べた結果，終戦直前に巡回文庫というコレクションが作られたこと，「巡」の文字はこの文庫を意味していることなどがわかった。

戦争末期の日本では学生は学問どころではなく，戦地への動員は免れても，軍需物資の生産のため各地に勤労動員された。巡回文庫は，動員された慶應義塾の学生が勤労の相間に少しでも読書をして学問から遠ざからないようにとの願いから，柄沢主事が発案し，自ら選定，運搬した図書だったのである。しかし残念ながらその願いは叶わなかった。慶應義塾図書館史には巡回文庫に触れて次の記述がある(178ページ)。

「…柄沢主事は高等部学生八十名が愛知県豊川海軍工廠に勤労動員されていたのを，監督するため出張していた。図書館の重複図書をリュックにつめて「巡回文庫」と名付け運搬し，休憩中の学生に読ませようとしたが，仕事は閑暇であっても工廠長清水中将は本を読ませる許可をしなかった…。」

戦時一色の中にあってもなお，学生と学問のつながりを求め，おのが使命を全うしようとした柄沢さんの人柄がそこには偲ばれる。柄沢さんは硬骨の教育者であり，図書館人であった。

けだし，巡回文庫は今の移動図書館のはしりといえなくはない。リュックと汽車が自動車には代っても，その意図するところは同じなのだから。

資料 I

研究・教育情報センターに関する書誌 1985.8～1986.7

〔三　田〕

"江戸末期・切絵図31枚，本に" **毎日新聞** 1985.9.20 朝

"慶大図書館，置き引き出没—席取りバッグから現金" **毎日新聞** 1985.9.26 夕

"三田新図書館で盗難急増，4月以降53件67万円の被害" **慶應塾生新聞** No.183, p.9 (1985.9.10)

"図書館AV施設が充実" **慶應塾生新聞** No.180, p.2 (1986.4.10)

〔医　学〕

"Medical Library and Information Center (Kitasato Memorial Medical Library) Keio University" **医学図書館** Vol.31, Supplement, p.104 (1985)

〔日　吉〕

Kitadai, Nozomu "Theft at Hiyoshi Library" **The Mita Campus** Vol.40, No.5 (205), p.2 (1985)

Mangeot-Kunzer, Anette "Visit to Keio Hiyoshi Library" Association of Professional Librarian Newsletter Vol.4, No.1, p.2-3 (1986)

杉本貴志 "再び図書館について" **創世**（慶應義塾大学経済学部白井厚研究会）No.17, p.12-22 (1986)

"日吉新図書館AVホールで映画会" **慶應義塾塾生新聞** No.187, p.3 (1986.1.10)

"日吉新図書館AVホール夏休み上映会を予定" **慶應塾生新聞** No.192, p.2 (1986.7.10)

"日吉新図書館で上映会『アマデウス』が好評" **慶應塾生新聞** No.191, p.8 (1986.6.10)

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1985.8～1986.7

〔論文発表〕

〔三　田〕

東田全義 "地方在住者の図書館利用" **卒業論文の手引** 通信教育部編 慶應通信 p.66-74 (1986)

東田全義 "『国富論』（パリ一七八一年）" **塾** No.2, 表紙 p.〔3〕(1986)

東田全義 "書誌の社会的体系" **第5回西洋社会学古典資料講習会講演レジメ** p.20-22(1985)

広田とし子 "国際図書館協会連盟（IFLA）シカゴ大会に参加して" **ミッド・アメリカ** Vol.3, No.28, p.10 (1985)

市古健次 “授業と図書館の有機的結合の一手段としてのライブラリー・インストラクション—卒業論文を中心に” **大学図書館研究** No. 28, p. 71-78 (1986)

斎藤泰則 “専門領域における知識の伝播過程” **Library and Information Science** No. 23, p. 1-6 (1985)

斎藤泰則 “我が国の大規模大学図書館の蔵書数と各図書館指標との関係” **大学図書館研究** No. 28, p. 46-53 (1986)

渋川雅俊 “Future and Problems of Japan-U. S. University Library Cooperation” (日米大学図書館協力の将来と問題) **日米大学図書館セミナー予稿集** 大学図書館国際連絡委員会 p. 47-61, p. 119-126 (1986. 8. 24)

渋川雅俊 「目録の歴史」 勁草書房 212p. (1985)

白石克 “江戸時代の“江の島絵図”(絵図屋善兵衛版)” **古地図研究** No. 189, p. 2-3 附付図1枚 (1985)

白石克 “『御成敗式目(貞永式目)』享禄2(1529)版” **塾** No. 3 (貴重書紹介) (1986)

渡部満彦 “大学図書館業務とコンピュータ利用” **日本私立大学連盟業務別研修(図書館関係)テキスト** p. 37-43 (1985)

渡部満彦 「ヘルスサイエンス図書館員の基礎知識」(共訳) 日外アソシェーツ p. 23-91 (1986)

渡部満彦 “《資料紹介》目録の歴史” **医学図書館** Vol. 33, No. 1, p. 90-91 (1986)

〔医　学〕

天野善雄 “文献データベース” **からだの科学臨時増刊—医療とコンピューター** p. 98-102 (1985)

後藤敬治 “オンライン文献情報検索についての一実験—ジステンパー・口蹄疫ウィルス・犬系状虫症をテーマに” **獣医畜産新報** 772, p. 715-718 (1985)

後藤敬治 “1986年度 MEDLINE ファイル” **医学図書館** Vol. 33, No. 1, p. 48-57 (1986)

後藤敬治 “1986年度 MEDLINE ファイルと MeSH” **JOIS ニュース** No. 35, p. 1-3 (1985)

加藤孝明 “複写による図書の劣化” **論集・図書館学研究の歩み** 第5集図書館資料の保存とその対策 日外アソシエーツ p. 96-116 (1985)

酒井明夫 “雑誌の利用に関するアンケート—その集計報告(1)” **きたさとニュース** No. 97, p. 2-6 (1986)

酒井明夫 “雑誌の利用に関するアンケート—その集計報告(2)” **きたさとニュース** No. 98, p. 3-10 (1986)

〔日　吉〕

樋口恵子 “日吉新図書館とレファレンス・サービス” **三色旗** No. 458, p. 27-30 (1986)

樋口恵子 “書誌評価に関する文献解題” (共著) **書誌索引展望** Vol. 9, No. 3, p. 20-25 (1985)

樋口恵子 “書誌の評価基準—評価項目調査結果報告” (共著) **書誌索引展望** Vol. 10, No. 1, p. 24 (1986)

小川治之・斎藤憲一郎・吉川智江(他) “引用文献から見た理工学分野における文献利用の特徴” **Library and Information Science** No. 23, p. 125-135 (1985)

小川治之 “慶應義塾大学日吉情報センター慶應義塾日吉図書館〈新刊紹介〉” **大学図書館研究** No. 27, p. 111-122 (1985)

〔研究発表〕

〔三　田〕

川上清子 “EC に関する文献紹介及び書誌リスト作成” 第7回EDCセミナー 1986. 6. 26～27 於 東京大学附属図書館

中島紘一 “閲覧利用サービスの理念” 私立大学図書館協会東地区部会パブリックサービス分科会 1986. 1. 8 於 慶應義塾大学

渋川雅俊 “大学図書館と大学出版部” 大学出版部協会研修会 1985. 9. 5 於 高萩市

渋川雅俊 “大学図書館の利用教育—オリエンテーションからビブリオグラフィックインストラクションまで” 東京大学附属図書館専門研修会 1986. 1. 29 於 東京大学附属図書館

渋川雅俊 "Future and Problems of Japan-U. S. University Library Cooperation" (日米大学図書館協力の将来と問題) U. S. Japan Seminar on Library Technology in Higher Education (日米大学図書館セミナー) 1986.8.24 於 学士会館

〔医 学〕

Amano, Yoshio "International cooperation in biomedical information service in Japan" 5th International Congress on Medical Librarianship 1985.10.3. 於 日大会館

Goto, Keiji "The development of medical terminology in Japan" 5th International Congress on Medical Librarianship 1985.10.3 於 日大会館

加藤孝明 "複写による図書の劣化" 第33回日本図書館学会研究大会 1985.11.10 於 椙山女学園大学

Matsui, Akira. Kato, Komei. Miyazaki, Sadaharu "Document deliverly capability for medical grey literature in Japan: a case studies" 5th International Congress on Medical Librarianship 1985.10.3 於 日大会館

Sakai, Akio "The international exchange of publications in Japan" 52nd IFLA Tokyo Conference 1986.8.26 於 青山学院大学

〔日 吉〕

樋口恵子 "レファレンス・サービスを変えるもの一最近のニューメディア" 私立大学図書館協会東地区部会レファレンス分科会 1986.6.6

小川治之・吉川智江・斎藤憲一郎(他) "理工学分野における会議資料の二次資料への収録率" 三田図書館・情報学会1985年度 1985.11.16 於 慶應義塾大学

三田図書館・情報学会関係出版物(勁草書房刊)

図書館・情報学概論 津田良成編 1983 239p. ¥2,600

図書館・情報学シリーズ

第5巻 図書館・情報学のための調査研究法 緑川信之他 1986 202p. ¥3,000

第7巻 大学図書館の運営 高鳥正夫 1985 193p. ¥2,300

第9巻 目録の歴史 渋川雅俊 1985 212p. ¥2,500

公共図書館のサービス計画 パーマー他著 田村俊作・糸賀雅児訳 1985 308p. ¥3,600

図書館業務の基本原則 D. アーカート著 高山正也訳 1985 ¥2,100

資料 III

年次統計要覧 <昭和60年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <60年度実績及び61年度予算>

内訳 / 支部センター	59年度実績 <単位：円>			60年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田情報センター	603,787,498	2,123,563	605,911,061	615,591	2,130	617,721
図書館	322,868,500	2,123,563	324,992,063	326,052	2,130	328,182
学部*	280,918,998	—	280,918,998	289,539	—	289,539
(私大研究設備相当額)	(20,638,000)	—	**	(21,257)	—	**
日吉情報センター	135,323,566	2,016,805	137,340,371	143,464	2,078	145,542
図書館	49,990,395	2,016,805	52,007,200	54,990	2,078	57,068
学部*	85,333,171	—	85,333,171	88,474	—	88,474
(私大研究設備相当額)	(7,001,240)	—	**	(7,214)	—	**
医学情報センター	132,473,750	2,462,420	134,936,170	132,174	2,584	134,758
〃	132,173,750	2,462,420	134,636,170	132,174	2,584	134,758
指定寄付金	300,000	—	300,000	—	—	—
理工学情報センター	117,376,542	1,408,970	118,785,512	120,894	1,449	122,343
〃	117,376,542	1,408,970	118,785,512	120,894	1,449	122,343
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**	(1,300)	—	**
合計	988,961,356	8,011,758	996,973,114	1,012,123	8,241	1,020,364

注) * 特別図書費は含まず。

** (　) 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したもの。

II—1 蔵 書 統 計 <年間受入及び所蔵冊数>

	内訳 / 支部センター	単行本 和	単行本 洋	単行本 計	製本雑誌 和	製本雑誌 洋	製本雑誌 計	合計
年間受入冊数	三田情報センター	17,722	44,554	62,276	7,071	15,434	22,505	84,781
	図書館	(10,963)	(32,988)	(43,951)	(3,187)	(9,058)	(12,245)	(56,196)
	学部	(6,759)	(11,566)	(18,325)	(3,884)	(6,376)	(10,260)	(28,585)
	日吉情報センター	14,419	4,551	18,970	1,829	3,407	5,236	24,206
	図書館	(11,904)	(629)	(12,533)	(1,192)	(81)	(1,273)	(13,806)
	学部	(2,515)	(3,922)	(6,437)	(637)	(3,326)	(3,963)	(10,400)
	医学情報センター	1,556	1,525	3,081	980	2,886	3,866	6,947
	理工学情報センター	1,935	1,243	3,178	1,838	3,399	5,237	8,415
合計		35,632	51,873	87,505	11,718	25,126	36,844	124,349
所蔵冊数(累計)	三田情報センター	564,275	563,605	1,127,880	140,359	134,746	275,105	1,402,985
	図書館	(411,798)	(330,820)	(742,618)	(85,510)	(57,764)	(143,274)	(885,892)
	学部	(152,477)	(232,785)	(385,262)	(54,849)	(76,982)	(131,831)	(517,093)
	日吉情報センター	211,714	103,048	314,762	22,303	31,453	53,756	368,518
	図書館	(152,483)	(16,675)	(169,158)	(14,433)	(393)	(14,826)	(183,984)
	学部	(59,231)	(86,373)	(145,604)	(7,870)	(31,060)	(38,930)	(184,534)
	医学情報センター	27,281	29,425	56,706	40,993	80,713	121,706	178,412
	理工学情報センター	32,876	21,981	54,857	30,322	85,665	115,987	170,844
合計		836,146	718,059	1,554,205	233,977	332,577	566,554	2,120,759

注1） 所蔵冊数（累計）は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。
2） 三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

II—2 蔵 書 統 計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 / 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター	5,058	3,385	8,443	4,961	2,347	7,308	15,751
図書館	(1,967)	(901)	(2,868)	(3,079)	(1,287)	(4,366)	(7,234)
学部	(3,091)	(2,484)	(5,575)	(1,882)	(1,060)	(2,942)	(8,517)
日吉情報センター	839	619	1,458	362	913	1,275	2,733
図書館	(534)	(41)	(575)	(133)	(4)	(137)	(712)
学部	(305)	(578)	(883)	(229)	(909)	(1,138)	(2,021)
医学情報センター	1,231	1,570	2,801	733	1,141	1,874	4,675
理工学情報センター	958	1,327	2,285	2,611	4,781	7,392	9,677
合計	8,086	6,901	14,987	8,667	9,182	17,849	32,836

III—1 利 用 統 計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 / 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比
	教職員	学生	計	一般図書	貴重書	館外貸出(計)
三田情報センター	12,284	127,667	139,951	*	1,215	1.02
日吉情報センター	2,088	84,314	86,402	*	—	1.30
医学情報センター	—	—	60,392	*	—	1.05
理工学情報センター	—	—	49,385	*	—	1.17
合計	—	—	336,130	*	1,215	1.11

* 開架のため実数不明。

III—2 利 用 統 計 <相互貸借（複写依頼を含む）>

内訳 / 支部センター	依頼をうけた（貸）			依頼した（借）			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	1,936	4	1,940	942	507	1,449	3,389
日吉情報センター	359	0	359	383	41	424	783
医学情報センター	10,232	167	10,399	2,809	48	2,857	13,256
理工学情報センター	37,721	4	37,725	998	50	1,048	38,773
合計	50,248	175	50,423	5,132	646	5,778	56,201

Ⅲ—3 利 用 統 計 <複写サービス>

内訳 / 支部センター	種別	学内 件数	学内 枚数	学外 件数	学外 枚数	合計 件数	合計 枚数
三田情報センター	MF	16	4,301	24	2,431	40	6,732
	ゼロックス	9,176	213,330	1,855	53,787	11,031	267,117
	オフセット	110	217,833	—	—	110	217,833
	PPC	—	—	—	—	—	1,298,586
	OHP	36	230	—	—	36	230
	ファクシミリ	12	123	—	—	12	123
日吉情報センター	ゼロックス PPC	862	243,507	14	266	876	243,773
医学情報センター	MF	—	5,026	—	—	—	5,026
	ゼロックス	56,450	380,932	127,423	696,359	183,873	1,077,291
理工学情報センター	MF	24	680	1	39	25	719
	ゼロックス	14,899	179,295	37,721	380,645	52,620	559,940
	OHP	175	1,038	—	—	175	1,038

注） PPCはコイン方式のため内訳は不明。

Ⅲ—4 利 用 統 計 <レファレンス・サービス>

利用者別

内訳 / 支部センター	学内者 教職員	学内者 学生	学外者	合計
三田情報センター	1,944	6,910	3,688	12,542
日吉情報センター	2,109	4,160	194	6,463
医学情報センター	2,887	197	4,091	7,175
理工学情報センター	1,329	3,451	1,764	6,544
合計	8,269	14,718	9,737	32,724

業務内容別

内訳 / 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田情報センター	6,421	487	5,558	76	12,542
日吉情報センター	2,061	720	3,628	54	6,463
医学情報センター	2,387	1,411	799	2,578	7,175
理工学情報センター	4,357	448	1,575	164	6,544
合計	15,226	3,066	11,560	2,872	32,724

八角塔・KULIC記事索引

凡　例

1. 本索引は八角塔No.1～6とKULIC No.1～20に掲載された記事に対する主題索引と著者名索引である。
2. 主題索引は日本十進分類法（8版）をもとに作成し，“新所長の抱負”“ティールーム”“スタッフルーム”“刊行物案内”は別項目として，索引末尾にまとめた。同一分類番号内は著者名，記事名のアルファベット順になっている。（ローマ字はヘボン式）
3. 著者名索引は著者名のアルファベット順とした。
4. KULIC巻末資料（年次統計資料等）は省略した。
5. 記入事項は，著者：タイトル　号，ページの順になっている。但し，八角塔については号の前に“八”と記した。

KULIC特集テーマ一覧

1. 情報センターのビジョン　No.1
2. 情報センター発足二年目を迎えて　No.2
3. 政府刊行物の収集・整備　No.3
4. 公害―環境・社会・人間　No.5
5. 大学教育と大学図書館　No.5
6. 研究活動と事務サービス　No.6
7. 私の研究とライブラリー　No.9
8. 続・私の研究とライブラリー　No.10
9. 三田の新図書館建設計画　No.12
10. 情報センター10年の歩み　No.13
11. 三田の新図書館建設計画　No.14
12. 慶應義塾図書館（新館）の開館　No.16
13. 日吉新図書館建設計画　No.17
14. 情報センター機械化計画　No.17
15. 慶應義塾日吉図書館の開館　No.19

主　題　索　引

007　情報科学

安西修一郎：アイデアとインフォーメーション　No.10，p.7-10

藤川正信：研究・教育と情報管理　八No.1，p.2-7

福川忠昭：研究室における文献収集と管理　No.12，p.22-24

福島義久：共同研究プロジェクトにおける文献収集について　No.3，p.18-19

始まった医学文献オンライン検索サービス（トピックス）　No.11，p.16-17

浜田裕一郎：統計資料の新しいメディアについて――利用者の立場から　No.19，p.52-53

JAPAN MARC利用システム　No.15，p.20

丸山信：文献情報サービス　八No.1，p.9-10

三田に実現したMARCデータのオンライン検索　No.12，p.20-21

中野博司：J.ハイドン研究所の情報処理　No.11，p.6-8

奥泉栄三郎：逐次刊行物の利田パターンに関する調査研究―引用文献にみる法学研究者の情報・資料要求調査　No.5，p.22-24

斎藤泰則：専門分野のコア・ドキュメント　No.20，p.28

010　図書館

原田いづみ：IFLA東京大会雑感　No.20，p.30-31

関口素子：IFLA東京大会の印象　No.20，p.31-32

010.7　研究・指導法，図書館学教育，職員の養成

広田とし子：シカゴ大学図書館における研修報告　No.20，p.23-25

細野公男：新図書館と図書館・情報学教育　No.

15，p. 26-28
情報センター職員の教育・研修（ニュース） No. 4，p. 31
加藤好郎：特別研修を終了して No. 20，p. 27
慶應義塾大学文学部図書館・情報学科創立30年 No. 16，p. 42
研究・教育情報センターの職員研修計画 No. 10，p. 22
KULAS 研究会 No. 18，p. 3
三田図書館・情報学会月例研究会 No. 14，p. 35 No. 16，p. 34 No. 18，p. 52 No. 19，p. 33
中島紘一：情報センター職員の養成と図書館・情報学科 No. 7，p. 16-19
岡田隆：慶應義塾大学図書館・情報学への国内留学 No. 18，p. 29-31
酒井明夫：特別研修を終了して No. 20，p. 26
図書館・情報学科に博士課程開設（トピックス） No. 8，p. 23-24

012 図書館建築・設備

槇文彦：慶應義塾大学日吉新図書館・事務棟設計メモ No. 17，p. 9-16／設計者のねらい No. 12，p. 4-10

013.1 図書館職員・人事管理

天野善雄：図書館員の専門性とは何か No. 7，p. 20-23
福留孝夫：大学職員と専門職性—ライブラリアンの例を中心として No. 3，p. 28-32
五藤良子・宮木さえみ・永井季子・中村久子・並木和子・武井恵子・司会 中島紘一・記録 酒井明夫：女性職員の就業意識（座談会） No. 14，p. 20-25
池田久子・石黒敦子・並木和子・宮入暁子：女性図書館員就業意識調査 No. 12，p. 26-28
笠野滋：私の図書館回想（1） No. 20，p. 36-42
小林胖：大学図書館の「機能」としてのライブラリアン No. 4，p. 28-31
《抄訳》 Wilder, D. "Management attitudes; team relationships" Lib. J.: 498-502, Feb. '69 八 No. 5，p. 14
田中栄一：大学事務職員の未来像とライブラリアン No. 2，p. 17-20
図書館の女性職員 No. 9，p. 27

013.4 図書館の予算，経理

渋川雅俊：図書の値上りと義塾の図書費—統計資料 No. 6，p. 26-30

013.8 図書館事務の機械化

安西郁夫：情報センターの機械化—過去から現在まで No. 13，p. 10-13／機械化計画の展望 No. 17，p. 24-25／図書館とコンピュータ No. 10，p. 32
藤井裕子・西山和子：Circulation System の機械化 No. 16，p. 39-42
細野公男：図書館とコンピュータ No. 8，p. 13-15
情報センターの機械化システム No. 9，p. 21
貸出しの機械化（三田情報センター） No. 19，p. 42
長島敏樹：研究・教育情報センターの業務機械化 No. 17，p. 26-31
中島紘一：慶應義塾図書館の新しい閲覧システム—計画の全容 No. 20，p. 6-8
渡部満彦：わが国大学図書館における機械化の現状 No. 17，p. 32-37
安田博：慶應義塾図書館の新しい閲覧システム—システムの設計 No. 20，p. 9-11

014.1 図書館資料，図書の選択，蔵書構成

天野善雄：新しい選書体制—蔵書再編成の問題を中心にして No. 19，p. 2-6
東田全義：選書課の誕生と今後の展望 No. 16，p. 25-26
選書・収書・サービス，三田情報センターの選書方式 No. 3，p. 22
渋川雅俊：全国の大学図書館における資料収集 No. 14，p. 32-35
高鳥正夫：大学図書館の収書計画と慶應義塾図書館 No. 1，p. 23-24
鳥居泰彦：三田情報センターの情報収集について No. 1，p. 4-5
上田修一・会田真由美：三田情報センターにおける教員の選書行動 No. 19，p. 39-42
柳屋良博：収書方針に影響を及ぼす諸要因 No. 1，p. 24-33

014.2 受入と払出

石黒敦子：指定出版社による一括購入方式のその後　No. 17，p. 41-43

森園繁：図書の収集と目録サービス　No. 16，p. 27-30

OP Books の入手（メモランダム）　八 No. 3，p. 4

田中芙美子：指定出版社制度による一括購入方式—昭和59年納品率調査結果 No. 19，p. 55-62

014.3　目録法　÷→014.2

高谷康子：学術情報センター「オンライン目録システム」について No. 20，p. 12-14／目録利用案内　No. 17，p. 43-45

三田情報センター目録体系　No. 10，p. 30-31

中村初雄：塾内洋書目録法の統一・標準化について　八 No. 3，p. 9-11

斎藤泰則：図書館・研究室合同目録の冊子体目録作成について　No. 15，p. 26-35

佐藤朔：総合目録編纂をめざして　八 No. 3，p. 1

渋川雅俊：目録の将来　No. 13，p. 26-35

武正恒：日吉情報センターにおける目録サービスについて　No. 19，p. 23-27

柳屋良博：学術情報流通体制の整備と三田情報センターにおける資料組織上の問題　No. 10，p. 27-29

014.4　分類法，件名標目法，主題分析

渋川雅俊：図書分類の原理とその基本技法—研究室図書の NDC 分類に関連して　No. 15，p. 4-16

高鳥正夫：三田情報センターにおける分類表の現状と将来　No. 7，p. 10-14

014.6　蔵書管理と図書の保護

加藤孝明：Deposit Library—共同保存書庫のアイデア　No. 8，p. 19-21

上田修一・奥沢美佐：慶應義塾図書館蔵書劣化調査計画　No. 18，p. 23-24

014.7　特殊資料

阿部隆一：フィルム・ライブラリー充実の急務—特に古典学に於ける　八 No. 3，p. 5-8

中鉢正美：研究者の立場からの提言　No. 3，p. 1-2

浜田敏郎：ミニミニ図書館（ライブラリー）—文献のマイクロ化　八 No. 2，p. 8-10

石川博道：政府刊行物収集・整備の現状と今後の構想・計画　No. 3，p. 4-7

百溪浩：研究者側からみた政府刊行物の利用価値　No. 3，p. 2-3

長沢雅男：政府刊行物の意義と問題点　No. 3，p. 8-12

015　図書館奉仕・図書館活動

東田全義：情報サービスの課題 No. 16，p. 23-25

市古健次：レファレンス・サービスとライブラリー・インストラクション—スライドの試作　No. 18，p. 16-22

加藤和子・五十嵐優子：医学情報センターにおける文献分析サービス—「失語症」関係の例について　No. 3，p. 20-22

風間茂彦：新しいサービス，AVサービス　No. 19，p. 14-16／日吉図書館のAVサービスの現況　No. 20，p. 16-18

慶應義塾図書館の一般公開サービス　No. 14，p. 28

木村敏康：館内ツアーに参加して　No. 19，p. 29

松浦恵子：教養課程日吉における利用者教育の模索　No. 19，p. 16-20

三田・日吉間にファクシミリを設置（トピックス）　No. 14，p. 14

中島紘一：現代アメリカの図書館情報サービスの動向　No. 1，p. 34-38／雑誌・資料の利用サービス　No. 16，p. 20-22

小川治之：日吉新図書館におけるサービスの概要　No. 17，p. 17-22／利用サービスの概要と展望　No. 19，p. 6-8

大沢充：医学情報センターの学外のサービスについて　No. 12，p. 30-33

関口操：新図書館利用サービスにのぞむ　No. 14，p. 9-10

渋川雅俊：ライブラリー・インストラクション—知識への一つの接近法　No. 11，p. 10-15

スライドによるオリエンテーションの実施とアンケート集計結果　No. 19，p. 45

寺尾誠：図書館におけるソフト・サービス—東西ドイツにおける私の体験　No. 14，p. 6-7

015.1　閲覧方式，館内奉仕　÷→013.8
医学，日吉の両センターに無断帯出防止装置を設置　No.14，p.29
加藤好郎：BDS（Book Detection System）とインベントリー　No.17，p.39-40
宮崎貞治：医学情報センターにおける無断帯出防止装置の導入成績　No.16，p.37-39
中島紘一：閲覧・利用サービスとその展望　No.16，p.17-20
025.2　レファレンスサービス
東田全義：『萬国政表』の原書の行方　No.18，p.27-28／レファレンス・サービスから情報サービスへ　No.8，p.16-18
中島昭：文献時代と複写　八No.3，p.2-4
佐藤朔：文献複写のこと　八No.2，p.1
図書館の複写センター　八No.2，p.7
土屋健三郎：医学図書館文献複写サーヴィス　八No.2，p.4-7
渡辺國広：文献複写と私　八No.2，p.2-4
015.38　図書館相互貸借
樋口恵子：三田情報センターのILL—海外との相互貸借を中心として　No.18，p.31-33
加藤好郎：早慶相互協力について　No.20，p.34-35
松井朗：医学情報センターにおける Interlibrary Loan—現状と課題　No.18，p.33-34
大江晃：相互協力時代の塾図書館　No.18，p.4-8
早稲田大学図書館との相互利用の開始　No.19，p.62
吉川智江：理工学情報センターにおける Interlibrary Loan—文献取寄せ（依頼）の現状と展望　No.18，p.35-36
017　学校図書館
斎藤憲一郎：新しい高等学校図書室（日吉）のサービス　No.19，p.43-45
幼稚舎の“図書室を中心とする新しい学校施設（トピックス）　No.12，p.34-35
017.7　大学図書館
赤星隆子：大学図書館と子供の本　No.15，p.30-32
井関利明：諸科学関連アプローチと情報センター　No.1，p.5-7
伊東弥之助：慶應義塾図書館史その1—ゾーフ部屋の流れ　No.2，p.12-15／慶應義塾図書館史その2—新銭座から三田へ　No.3，p.23-27
経営管理研究科図書館の現状と将来像　No.13，p.25
Moore, Everret T.・佐藤朔：これからの大学図書館—対談　八No.4，p.1-16
森園繁：アメリカの大学図書館での経験　No.2，p.22-26
中島紘一：コインの裏表　No.5，p.14-15
日米大学図書館比較表　No.18，p.53-62
高橋吉之助：工学図書館の将来像　No.1，p.18-21
高山正也：米国の大学図書館—カリフォルニア大学バークレー校の図書館活動を中心にして　No.18，p.41-52／企業体研究者の情報利用の実態と大学図書館への期待　No.9，p.23-27
図書館略史　八No.1，p.18-19
渡部満彦：むかしの慶應義塾図書館　No.18，p.9-14
研究教育情報センター
藤川正信：研究・教育情報センターの機能と業務　八No.5，p.5-9
本部（ニュース）　No.1，p.33
本部事務室（ニュース）　No.4，p.24
〈本部事務室〉メモ　No.7，p.2，5　No.8，p.2
印東太郎：情報科学研究所の活動と研究教育情報センター　八No.6，p.3-5
情報センターニュース　八No.3，p.11
情報センター設立準備業務の現況　八No.5，p.16
情セ本部メモ　No.9，p.2，3　No.15，p.28
慶應義塾研究・教育情報センター委員会報　八No.1，p.7
慶應義塾研究・教育情報センター計画（抄）　八No.5，p.9-13
研究・教育情報センター協議会委員　No.10，p.36

大江所長国公私立大学図書館協力委員会委員長に就任　No. 16，p. 7
Q & A　No. 2，p. 16
佐藤朔：生きている図書館　八 No. 1，p. 1／図書館の新幹線　八 No. 5，p. 1
昭和53年6月現在研究・教育情報センター協議会委員　No. 11，p. 32
高鳥正夫：新しい門出に　八 No. 6，p. 1-2／情報センター発足からの10年間　No. 13，p. 1-9／情報センター二年目を迎えて　No. 2，p. 1-3
図書館ニュース　八 No. 2，p. 10　八 No. 4，p. 16　八 No. 5，p. 15-16
三田情報センター　÷→012，013. 8，014. 1，014. 3，014. 4，015，015. 1，519
安西郁夫：学生の図書館利用の一断面—図書館(三田)における学部学生利用の調査を中心に　No. 2，p. 4-6
石川博道：三田文学ライブラリー——その生いたちから今日まで　No. 12，p. 36-38／三田情報センターの小展示　No. 12，p. 46-48／三田情報センターの展覧会　No. 11，p. 30-32／三田情報センターの特殊コレクションについて　No. 9，p. 28
加藤好郎：学生アシスタント導入の成果と問題点　No. 15，p. 33-35
風間茂彦：慶應義塾図書館（新館）利用者アンケート調査　No. 16，p. 31-34
松原秀一：歩を休めて眺める時　No. 13，p. 13-15
三田情報センター（ニュース）　No. 1，p. 13　No. 2，p. 6　No. 4，p. 27
三田情報センター課係案内　八 No. 6，p. 7
三田情報センター協議会　No. 1，p. 7
〈三田情報センター〉メモ　No. 7，p. 23　No. 8，p. 5
中島紘一：三田の新館，この3年間の変化　No. 19，p. 48-50／新図書館のプランニング—準備段階から実施まで　No. 12，p. 11-18
中村洸：新図書館にのぞむ法学部図書委員長の見解　No. 14，p. 7-9
大島通義：三田情報センターへの提言　No. 9，p. 5-7
ルーマニア図書の寄贈　八 No. 4，p. 3
新図書館・研究棟（三田）建設調査委員会の答申について（トピックス）　No. 10，p. 13
新図書館の利用について　No. 15，p. 1-3
新図書館と見学　No. 16，p. 10　No. 17，p. 31　No. 18，p. 8
小展示ニュース　No. 16，p. 22，p. 26　No. 17，p. 53　No. 18，p. 24　No. 19，p. 50
高宮利行：文学部の考え方　No. 14，p. 5
高鳥正夫：三田情報センター発足後の問題と将来への展望　No. 1，p. 1-4／新図書館への期待　No. 12，p. 1-3
武井恵子：新図書館準備とPR　No. 16，p. 12-17
田村茂：新図書館総合資料室について—経商資料室の立場から　No. 14，p. 11-12
田中正之：福澤展と義塾図書館の資料　No. 19，p. 46-47
図書・資料の再配置について　No. 14，p. 2-4
医学情報センター　÷→015，015. 1，015. 2，519
浅井昌弘：医学情報センターと文献探索について　No. 11，p. 19-21
芦沢哲夫：医学情報センターに望む　No. 5，p. 15-16
医学情報センター（ニュース）　No. 2，p. 3
〈医学情報センター〉メモ　No. 7，p. 30　No. 8，p. 2　No. 11，p. 21
医学図書館（ニュース）　No. 1，p. 17
入久巳：医学情報センターに望む　No. 1，p. 16-17
佐藤和貴：医学情報センター最初の10年　No. 13，p. 18-20
嶋井所長日本医学図書館協会会長に就任　No. 16，p. 7
高野利也：医学情報センターに託す夢と現実—基礎医学研究における立場から　No. 14，p. 27-28
外山敏夫・天野善雄：医学情報センター計画とその実現　八 No. 6，p. 13-17／医学情報センターの立場　No. 1，p. 14-16
牛場大蔵：医学教育と医学情報センター——その現状と問題点　No. 5，p. 16-18

日吉情報センター ÷→012，013.8，014.3，015，015.1
天野善雄：日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の改装計画 No.11，p.23-28
荒木良治：日吉情報センターの設立を二年後にひかえて No.1，p.10-12
衛藤駿：日吉新図書館への期待—図書館＝新書斎・文房論 No.17，p.1-2
五藤良子：研究者用フロア No.19，p.20-23
長谷川茂樹：日吉キャンパスにおける大学図書館の利用 No.5，p.12
〈日吉情報センター〉メモ No.7，p.23 No.8，p.32
日吉情報センターの発足（トピックス） No.4，p.18
日吉新図書館に関する書誌 No.19，p.32-33
除幕式を終えた藤山雷太胸像の由来(トピックス) No.9，p.17
加藤弘和：新日吉図書館の印象 No.19，p.28-29
風間茂彦：慶應義塾日吉図書館のイメージ—利用者アンケートから No.19，p.9-13
三沢進：日吉情報センターの構成と運営 No.3，p.13-14
宮入暁子：内部からみた日吉情報センターの変遷 No.13，p.15-17
村瀬旻：日吉図書館への期待 No.19，p.27-28
村田碩男：日吉図書館と情報サービス No.1，p.8-10
関洋：日吉情報センター藤山記念図書館利用の一断面—学部学生館外貸出記録の調査から No.10，p.20-22／蔵書の年代別配架の背景—日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の方向 No.12，p.43-45
髙鳥正夫：慶應義塾日吉図書館の印象と期待 No.19，p.30-32
田辺真一郎：日吉新図書館を利用して No.19，p.29-30
上田保：感想 No.1，p.12-13
柳屋良博：日吉キャンパスにおける図書館のあり方について No.15，p.22-24／日吉の騒音問題を考える—施設の抜本的改善に向けて No.14，p.30-31／日吉新図書館建設計画の経緯 No.17，p.3-8／慶應義塾日吉図書館特集の序に代えて No.19，p.1-2
理工学情報センター ÷→015，027
橋本芳一：理工学情報センターに期待する No.1，p.22
岩丸良明：理工学情報センターの一利用者として No.5，p.13-14
工学図書館（ニュース） No.1，p.33 No.2，p.26
松下記念図書館の完成（トピックス） No.3，p.16-17
水島三知：理工学情報センターに望む No.1，p.21
中島紘一・村越瑞枝：理工学情報センターにおける現状 No.4，p.16-17
小川治之：理工学情報センターの一つの役割 No.10，p.14-18
理工学情報センター計画の概要（案） 八 No.6，p.6-12
〈理工学情報センター〉メモ No.7，p.33 No.8，p.18 No.11，p.4
理工学情報センターの発足（トピックス） No.4，p.19
下郷太郎：理工学情報センター寸感 No.13，p.21-22
018 専門図書館
大沢充：第5回国際医学図書館会議の開催 No.19，p.51
舘田鶴子：英国の医学図書館を訪問して No.20，p.19-23
高田宜美：IMIC 10周年雑感 No.16，p.45-48
財団法人「国際医学情報センター」の発足にあたって No.4，p.7
022 写本・刊本・造本
太田臨一郎：インクナブラ 八 No.1，p.8
023 出版
出版資料情報センターと出版資料情報システム構想 No.15，p.32
024 図書の販売
岡本正二：洋書取次業に従事して No.9，p.19-

21

渋川雅俊：信頼性の高い書籍販売サービスの確立 No.9, p.13-17／洋書は安くなる!?—円切り上げと洋書価格問題の推移 No.4, p.21-24

027 特殊目録

斎藤憲一郎：理工学情報センター雑誌目録 No.18, p.37-39

029 蔵書目録・総合目録

伊東弥之助：図書館の特殊資料紹介（1）書簡 No.6, p.19-21

三田文学ライブラリー目録 八 No.1, p.12-18

050 逐次刊行物

安西郁夫：「三田学会雑誌」の刊行状況調査（資料） No.8, p.25-27

鷲見成正：専門雑誌との出合い No.10, p.3-5

200 歴史

重要文化財に指定された相良家文書(トピックス) No.10, p.12-13

清水潤三：国宝"秋草文壺"の思い出 No.8, p.3-5

白石克：明石屋六兵衛版『鎌倉絵図』(江戸中期刊本館幸田文庫所蔵) No.10, p.23-25

山岸健：レオナルド・ダ・ヴィンチの地図 No.8, p.7-11

330 経済

小池基之：Adam Smith 書簡雑感 No.11, p.9

黒田昌裕：政策シミュレーションのための多部門成長モデル No.4, p.25-27

377 大学・高等・専門教育・学術行政

古川智昭・小槻辰夫・石谷一郎・渥美恒二・中島紘一・小沢恒二・宮本昭司・坂本昭雄・福留孝夫・佐藤和貴・森園繁・渋川雅俊・奥泉栄三郎・宮森清行：大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6, p.1-12

石川忠雄・高山隆三・松本三郎・鈴木一江・奥泉栄三郎：情報化社会と研究・教育機関 八 No.5, p.2-4

石川武：私学における教員と職員 No.6, p.13-15

神谷不二・三宅まり子・小川恒夫・伊藤靖宏・吉田和宏・後藤順一・板垣美笛・高鳥正夫・安西郁夫・渋川雅俊・福留孝夫・森園繁：大学教育と図書館の利用—或るゼミ・グループの例（座談会） No.5, p.1-11

笠谷博之：語学視聴覚教育研究室の事務組織における現状と展望 No.7, p.29-30

孫福弘：研究環境改善のための一提案 No.6, p.16-18

松原秀一：迷路彷徨 No.9, p.9-11

文部省科学研究費補助金 No.2, p.7-10

最近の大学問題にかんする雑誌記事の紹介 八 No.5, p.17

私大研究設備補助金の復活要求について No.9, p.31

田中正之：図書館側からみた日吉学生気質 No.2, p.11

山田邦博：研究活動雑感 No.3, p.15

山崎照雄：大学—その顔と表情 No.11, p.1

400 自然科学

木下光博："Beilstein"について No.12, p.40-42

久保亮五：物理学研究者と文献 No.15, p.18-20

斎藤利弥：数学者と文献 No.11, p.2-4

吉田哲郎：Gmelins Handbuch の利用を望む No.14, p.15-19

490 医学

上釜喬：大学病院における病歴管理業務について No.7, p.26-28

外山敏夫：医学研究と関連諸科学 No.4, p.9-10

519 公害・環境学

金子芳雄：法律と公害問題 No.4, p.2-4

笠野滋：三田情報センターの公害関係文献 No.4, p.11-13

公害関係文献情報サービスと資料展(トピックス) No.5, p.21

小松隆二：足尾鉱毒事件覚書 No.5, p.19-21

庭田範秋：公害の経済的保障 No.4, p.4-5

佐藤和貴：医学情報センターにおける公害情報サービス No.4, p.13-15

沢田允茂：哲学的問題としての環境問題 No.4, p.1-2

高橋潤二郎：公害と学際的研究　No.4，p.8-9
柳沢三郎：公害研究と分析化学　No.4，p.5-7
760　音楽
中野博司：慶應義塾図書館遠山音楽文庫 No.19，p.36-37
900　文学
文学におけるコンコーダンス　八 No.6，p.18-21
“キャクストンとアーサー王伝説”展 No.19，p.65
本井英：虚子文庫について　No.12，p.29
リルケ・コレクション　No.14，p.10
鷲見洋一：ランボー詩の『コンコルダンス』をめぐって　No.7，p.6-8
新所長の抱負
阿部芳郎：理工学情報センター所長に就任(重任)して　No.7，p.2-3
天野弘：理工学情報センター所長に就任して　No.18，p.1-3
有賀一郎：利用者の立場で　No.10，p.1
術藤駿：日吉新図書館への期待　No.16，p.4-5
速水融：この一年を振り返って　No.20，p.1-2
堀内敏夫：三つの課題　No.9，p.2-3
保崎秀夫：少しでもパイプの役割を　No.9，p.1-2
北川節：理工学情報センター所長就任に当たって　No.20，p.3-4
三沢進：日吉情報センター所長就任（重任）に際して　No.7，p.4-5
大江晃：サービスの向上を目指して　No.16，p.1-3
嶋井和世：医学情報センター所長に就任して　No.8，p.1-2　No.16，p.6-7
高鳥正夫：情報センター所長就任（重任）に際して　No.7，p.1-2／所長・館長13年を顧みて　No.16，p.8-10
鷲尾泰俊：着実な問題解決を目指して　No.14，p.1
横山哲朗：医学情報センター所長就任にあたって　No.19，p.35
ティールーム
永戸多喜雄：パリに行く詩人の手紙―横部記念「山中散生コレクション」　No.20，p.5
江野沢一嘉：大学図書館・研究室・教室の一体化　No.12，p.19
藤沼貞弘：スイス・ホリディズ　No.11，p.22
石田哲治：本との出会い　No.17，p.23
伊藤行雄：原風景としての図書館　No.17，p.46
岩野節夫：図書館，そして本の選択　No.10，p.26
金田進：スタンフォード寸描　No.7，p.9
金文京：書痴・書債・売書　No.18，p.25
小林節：ロー・ライブラリアンの必要 No.9，p.12
松本隆信：奈良絵本について　No.11，p.18
松村高夫：Dr. フレッド・リードのこと　No.16，p.35
松下智之：某日寸信　No.15，p.29
松浦保：SCIENTIFIC ELITE　No.10，p.2，18
中村治雄：文献収集によせて　No.8，p.6
大橋優美子：看護学生と読書　No.19，p.34
坂本勉：アジアの言語とライブラリアン　No.9，p.8
佐野陽子：NLS 磁気テープについて No.13，p.23
佐野孝：ニューヨーク大学図書館　No.9，p.18
関場武：書き入れのある本についての落書　No.4，p.20
仙名保：語り合う人々　No.8，p.12
鷲見誠一：入るは易く出るは難し　No.7，p.15
立花香代子：生みの苦しみ　No.16，p.36
高宮利行：ケンブリッジ大学図書館　No.15，p.21
田村俊作：ヘイ・オン・ワイの古本屋―本を量り売りする店のことなど　No.20，p.29
富沢英治：ある出会い　No.14，p.26
有働勤吉：Padova 雑感　No.10，p.11，18
渡辺彰：情報の量と質　No.18，p.15
矢島和男：図書館とともに10年　No.16，p.44
スタッフルーム
安西郁夫：日本娘オケイと紅毛侍シュネル　No.7，p.24-25

原田いづみ　新図書館閲覧課にて　No.16，p.43
平尾行蔵：ミュージック・ライブラリアン　No.19，p.38
市古健次：レファレンス500日　No.13，p.24
池田久子：対話ということ　No.11，p.5
井上加代子：雑誌業務を担当して　No.8，p.24
石黒敦子：日々憂うること　No.9，p.4
加藤孝明：インフォマット　No.7，p.8
川上清子：ビジネス・スクールと経商資料室　No.18，p.40
木村八重子：雑談　No.5，p.18
高谷康子：ハワイ大学マノアキャンパスから　No.14，p.13
宮木さえみ：新図書館総合資料室への期待　No.15，p.17
南野典子：医学情報センターを御存知ですか？　No.20，p.15
落合啓一：頭痛の種“テクニカル・レポート”　No.19，p.54
奥泉栄三郎：田口卯吉と『東京経済雑誌』No.6，p.22
酒井明夫：よく働きよく学び　No.18，p.26
佐藤和貴：合同研究会　No.8，p.22
渋川雅俊：福沢諭吉の読書論　No.18，p.63／IFLA余滴　No.17，p.38／専門職の問題と図書館員の心情　No.5，p.25
清水和夫：おいしいケーキのはなし　No.9，p.22
須田昭五郎：米国西海岸の大学図書館を視察して　No.12，p.25
鈴木富弥夫：外国人利用者と図書館　No.11，p.29
武田るい：私の見たアメリカ　No.3，p.27
玉井裕子：インベントリー雑感　No.17，p.47
田中芙美子：図書館・情報学科図書室に移って　No.10，p.6
和田幸一：ちょっと前まで学生だった　No.20，p.33
渡部満彦：OCLCの半年間　No.12，p.39／視聴覚メディアと図書館の接点　No.10，p.19
安田博：スタンフォードにて　No.16，p.11
吉川智江：カウンターの片隅から　No.15，p.25

刊行物案内

情報センター出版物　八No.6，p.5　No.1，p.38
刊行物の御案内　No.5，p.11
「慶應義塾図書館史」の刊行　No.4，p.17
研究・教育情報センター刊行物の御案内　No.3，p.7　No.6，p.12，18　No.10，p.10　No.12，p.24　No.14，p.12
図書館・情報学科出版物（勁草書房刊）　No.18，p.39　No.19，p.33

著　者　名　索　引

— A —

阿部隆一：フィルム・ライブラリー充実の急務　八No.3，p.5-8
阿部芳郎：理工学情報センター所長に就任(重任)して　No.7，p.2-3
会田真由美：三田情報センターにおける教員の選書行動（共著）　No.19，p.39-42
赤星隆子：大学図書館と子供の本　No.15，p.30-32
天野弘：理工学情報センター所長に就任して　No.18，p.1-3
天野善雄：新しい選書体制　No.19，p.2-6／日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の改装計画　No.11，p.23-28／医学情報センター計画とその実現（共著）　八No.6，p.13-17／図書館員の専門性とは何か　No.7，p.20-23
安西郁夫：大学教育と図書館の利用(座談会)No.5，p.1-11／学生の図書館利用の一断面　No.2，p.4-6／情報センターの機械化　No.13，p.10-13／機械化計画の展望　No.17，p.24-25／「三田学会雑誌」の刊行状況調査　No.8，p.25-27／日本娘オケイと紅毛侍シュネル　No.7，p.24-25／図書館とコンピュータ　No.10，p.32
安西修一郎：アイデアとインフォーメーション　No.10，p.7-10
荒木良治：日吉情報センターの設立を二年後にひ

かえて　No.1，p.10-12
有賀一郎：利用者の立場で　No.10，p.1
浅井昌弘：医学情報センターと文献探索について　No.11，p.19-21
芦沢哲夫：医学情報センターに望む　No.5，p.15-16
渥美恒二：大学における研究活動と事務サービス（座談会）　No.6，p.1-12

— C —

中鉢正美：研究者の立場からの提言　No.3，p.1-2

— E —

永戸多喜雄：パリに行く詩人の手紙　No.20，p.5
江野沢一嘉：大学図書館・研究室・教室の一体化　No.12，p.19
衛藤駿：日吉新図書館への期待　No.16，p.4-5，No.17，p.1-2

— F —

藤井裕子：Circulation System の機械化（共著）　No.16，p.39-42
藤川正信：研究・教育情報センターの機能と業務　八 No.5，p.5-9／研究・教育と情報管理　八 No.1，p.2-7
藤沼貞弘：スイス・ホリディズ　No.11，p.22
福川忠昭：研究室における文献収集と管理　No.12，p.22-24
福島義久：共同研究プロジェクトにおける文献収集について　No.3，p.18-19
福留孝夫：大学教育と図書館の利用（座談会）　No.5，p.1-11／大学における研究活動と事務サービス（座談会）　No.6，p.1-12／大学職員と専門職制　No.3，p.28-32
古川智昭：大学における研究活動と事務サービス（座談会）　No.6，p.1-12

— G —

五藤良子：女性職員の就職意識（座談会）　No.14，p.20-25／研究者用フロア　No.19，p.20-23

— H —

浜田敏郎：ミニミニ図書館（ライブラリー）　八 No.2，p.8-10
浜田裕一郎：統計資料の新しいメディアについて　No.19，p.52-53
原田いづみ：IFLA 東京大会雑感　No.20，p.30／新図書館閲覧課にて　No.16，p.43
長谷川茂樹：日吉キャンパスにおける大学図書館の利用　No.5，p.12
橋本芳一：理工学情報センターに期待する　No.1，p.22
速水融：この一年を振り返って　No.20，p.1-2
東田全義：『萬国政表』の原書の行方　No.18，p.27-28／情報サービスの課題　No.16，p.23-25／レファレンス・サービスから情報サービスへ　No.8，p.16-18／選書課の誕生と今後の展望　No.16，p.25-26
樋口恵子(→武井恵子)：三田情報センターのILL　No.18，p.31-33
平尾行蔵：ミュージック・ライブラリアン　No.19，p.38
広田とし子：シカゴ大学図書館における研修報告　No.20，p.23-25
堀内敏夫：三つの課題　No.9，p.2-3
細野公男：新図書館と図書館・情報学教育　No.15，p.26-28／図書館とコンピュータ　No.8，p.13-15
保崎秀夫：少しでもパイプの役割を　No.9，p.1-2

— I —

市古健次：レファレンス500日　No.13，p.24／レファレンス・サービスとライブラリー・インストラクション　No.18，p.16-22
五十嵐優子：医学情報センターにおける文献分析サービス（共著）　No.3，p.20-22
池田久子(→中村久子)：女性図書館員就業意識調査（共著）　No.12，p.26-28／対話ということ　No.11，p.5
印東太郎：情報科学研究所の活動と研究教育情報センター　八 No.6，p.3-5
井上加代子：雑誌業務を担当して　No.8，p.24
入久巳：医学情報センターに望む　No.1，p.16-17
井関利明：諸科学関連アプローチと情報センター　No.1，p.5-7

石田哲治：本との出会い　No.17，p.23
石黒敦子：日々憂うること　No.9，p.4／女性図書館員就業意識調査（共著）　No.12，p.26-28／指定出版社による一括購入方式のその後　No.17，p.41-43
石川博道：三田文学ライブラリー　No.12，p.36-38／三田情報センターの小展示　No.12，p.46-48／三田情報センターの展覧会　No.11，p.30-32／三田情報センターの特殊コレクションについて　No.9，p.28／政府刊行物収集・整備の現状と今後の構想・計画　No.3，p.4-7
石川忠雄：情報化社会と研究・教育機関（共著）八 No.5，p.2-4
石川武：私学における教員と職員　No.6，p.13-15
石谷一郎：大学における研究活動と事務サービス（座談会）　No.6，p.1-12
伊東弥之助：慶應義塾図書館史その1　No.2，p.12-15／慶應義塾図書館史その2　No.3，p.23-27／図書館の特殊資料紹介（1）書簡　No.6，p.19-21
伊東行雄：原風景としての図書館　No.17，p.46
岩丸良明：理工学情報センターの一利用者として　No.5，p.13-14
岩野節夫：図書館，そして本の選択　No.10，p.26

— K —

上釜喬：大学病院における病歴管理業務について　No.7，p.26-28
神谷不二：大学教育と図書館の利用（座談会）　No.5，p.1-11
金田進：スタンフォード寸描　No.7，p.9
金子芳雄：法律と公害問題　No.4，p.2-4
笠野滋：三田情報センターの公害関係文献　No.4，p.11-13／私の図書館回想（1）　No.20，p.36-42
笠谷博之：語学視聴覚教育研究室の事務組織における現状と展望　No.7，p.29-30
加藤弘和：新日吉図書館の印象　No.19，p.28-29
加藤和子：医学情報センターにおける文献分析サービス（共著）　No.3，p.20-22
加藤孝明：Deposit Library　No.8，p.19-21／インフォマット　No.7，p.8
加藤好郎：BDS（Book Detection System）とインベントリー　No.17，p.39-40／学生アシスタント導入の成果と問題点　No.15，p.33-35／早慶相互協力について　No.20，p.34-35／特別研修を終了して　No.20，p.27
川上清子：ビジネス・スクールと経商資料室　No.18，p.40
風間茂彦：新しいサービス，AVサービス　No.19，p.14-16／日吉図書館のAVサービスの現況　No.20，p.16-18／慶應義塾日吉図書館のイメージ　No.19，p.9-13／慶應義塾図書館（新館）利用者アンケート調査　No.16，p.31-34
木村敏康：館内ツアーに参加して　No.19，p.29
木村八重子：雑談　No.5，p.18
金文京：書痴・書債・売書　No.18，p.25
木下光博："Beilstein" について　No.12，p.40-42
北川節：理工学情報センター所長就任に当たって　No.20，p.3-4
小林節：ロー・ライブラリアンの必要　No.9，p.12
小林胖：大学図書館の「機能」としてのライブラリアン　No.4，p.28-31
小池基之：Adam Smith 書簡雑感　No.11，p.9
小松隆二：足尾鉱毒事件覚書　No.5，p.19-21
高谷康子：学術情報センター「オンライン目録システム」について　No.20，p.12-14／ハワイ大学マノアキャンパスから　No.14，p.13／目録利用案内　No.17，p.43-45
久保亮五：物理学研究者と文献　No.15，p.18-20
黒田昌裕：政策シミュレーションのための多部門成長モデル　No.4，p.25-27

— M —

孫福弘：研究環境改善のための一提案　No.6，p.16-18
槇文彦：慶應義塾大学日吉新図書館・事務棟設計メモ　No.17，p.9-16／設計者のねらい　No.

12，p.4-10
丸山信：文献情報サービス　八No.1，p.9-10
松原秀一：歩を休めて眺める時　No.13，p.13-15／迷路彷徨　No.9，p.9-11
松井朗：医学情報センターにおける Interlibrary Loan　No.18，p.33-34
松本三郎：情報化社会と研究・教育機関（共著）八No.5，p.2-4
松本隆信：奈良絵本について　No.11，p.18
松村高夫：Dr. フレッド・リードのこと　No.16，p.35
松下智之：某日寸信　No.15，p.29
松浦恵子：教養課程日吉における利用者教育の模索　No.19，p.16-20
松浦保：SCIENTIFIC ELITE　No.10，p.2，18
三沢進：日吉情報センターの構成と運営　No.3，p.13-14／日吉情報センター所長就任（重任）に際して　No.7，p.4-5
宮木さえみ：新図書館総合資料室への期待　No.15，p.17／女性職員の就業意識（座談会）No.14，p.20-25
宮入暁子：女性図書館員就業意識調査（共著）No.12，p.26-28／内部からみた日吉情報センターの変遷　No.13，p.15-17
宮本昭司：大学における研究活動と事務サービス（座談会）No.6，p.1-12
宮森清行：大学における研究活動と事務サービス（座談会）No.6，p.1-12
宮崎貞治：医学情報センターにおける無断帯出防止装置の導入成績　No.16，p.37-39
水島三知：理工学情報センターに望む　No.1，p.21
百溪浩：研究者側からみた政府刊行物の利用価値　No.3，p.2-3
Moore, Everret T.：これからの大学図書館（対談）八No.4，p.1-16
森園繁：アメリカの大学図書館での経験　No.2，p.22-26／大学教育と図書館の利用（座談会）No.5，p.1-11／大学における研究活動と事務サービス（座談会）No.6，p.1-12／図書の収集と目録サービス　No.16，p.27-30
本井英：虚子文庫について　No.12，p.29
村越瑞枝：理工学情報センターにおける現状（共著）No.4，p.16-17
村瀬晃：日吉図書館への期待　No.19，p.27-28
村田碩男：日吉図書館と情報サービス　No.1，p.8-10

— N —

永井季子：女性職員の就業意識（座談会）　No.14，p.20-25
長沢雅男：政府刊行物の意義と問題点　No.3，p.8-12
長島敏樹：研究・教育情報センターの業務機械化　No.17，p.26-31
中島昭：文献時代と複写　八No.3，p.2-4
中島紘一：大学における研究活動と事務サービス（座談会）No.6，p.1-12／閲覧・利用サービスとその展望　No.16，p.17-20／現代アメリカの図書館情報サービスの動向　No.1，p.34-38／情報センター職員の養成と図書館・情報学科　No.7，p.16-19／慶應義義図書館の新しい閲覧システム　No.20，p.6-8／コインの裏表　No.5，p.14-15／三田の新館，この3年間の変化　No.19，p.48-50／理工学情報センターにおける現状（共著）No.4，p.16-17／新図書館のプランニング　No.12，p.11-18／雑誌・資料の利用サービス　No.16，p.20-22
中村治雄：文献収集によせて　No.8，p.6
中村初雄：塾内洋書目録法の統一・標準化について　八No.3，p.9-11
中村久子(→池田久子)：女性職員の就業意識（座談会）No.14，p.20-25
中村洸：新図書館にのぞむ法学部図書委員長の見解　No.14，p.7-9
中野博司：J.ハイドン研究所の情報処理　No.11，p.6-8／慶應義塾図書館遠山音楽文庫　No.19，p.36-37
並木和子：女性職員の就業意識（座談会）　No.14，p.20-25／女性図書館員就業意識調査（共著）No.12，p.26-28

南野典子：医学情報センターを御存知ですか？ No.20，p.15
西山知子：Circulation System の機械化（共著） No.16，p.39-42
庭田範秋：工害の経済的保障 No.4，p.4-5

— O —

落合啓一：頭痛の種“テクニカル・レポート” No.19，p.54
大江晁：サービスの向上を目指して No.16，p.1-3／相互協力時代の塾図書館 No.18，p.4-8
小川治之：日吉新図書館におけるサービスの概要 No.17，p.17-22／理工学情報センターの一つの役割 No.10，p.14-18／利用サービスの概要と展望 No.19，p.6-8
小樗辰夫：大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6，p.1-12
大橋優美子：看護学生と読書 No.19，p.34
岡田隆：慶應義塾大学図書館・情報学への国内留学 No.18，p.29-31
岡本正二：洋書取次業に従事して No.9，p.19-21
奥泉栄三郎：逐次刊行物の利用パターンに関する調査研究 No.5，p.22-24／大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6，p.1-12／情報化社会と研究・教育機関（共著） 八 No.5，p.2-4／田口卯吉と『東京経済雑誌』 No.6，p.22
奥沢美佐：慶應義塾図書館蔵書劣化調査計画（共著） No.18，p.23-24
大沢充：第5回国際医学図書館会議の開催 No.19，p.51／医学情報センターの学外のサービスについて No.12，p.30-33
大島通義：三田情報センターへの提言 No.9，p.5-7
大田臨一郎：インクナブラ 八 No.1，p.8
小沢恒二：大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6，p.1-12

— S —

斎藤憲一郎：新しい高等学校図書室（日吉）のサービス No.19，p.43-45／理工学情報センター雑誌目録 No.18，p.37-39
斎藤利弥：数学者と文献 No.11，p.2-4
斎藤泰則：専門分野のコア・ドキュメント No.20，p.28／図書館・研究室合同目録の冊子体目録作成について No.15，p.36
酒井明夫：特別研修を終了して No.20，p.26／よく働きよく学び No.18，p.26
坂本昭雄：大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6，p.1-12
坂本勉：アジアの言語とライブラリアン No.9，p.8
佐野陽子：NLS 磁気テープについて No.13，p.23
佐藤和貴：大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6，p.1-12／合同研究会 No.8，p.22／医学情報センターにおける公害情報サービス No.4，p.13-15／医学情報センター最初の10年 No.13，p.18-20
佐藤朔：文献複写のこと 八 No.2，p.1／生きている図書館 八 No.1，p.1／これからの大学図書館（対談） 八 No.4，p.1-16／総合目録編纂をめざして 八 No.3，p.1／図書館の新幹線 八 No.5，p.1
佐藤孝：ニューヨーク大学図書館 No.9，p.18
沢田允茂：哲学的問題としての環境問題 No.4，p.1-2
関洋：日吉情報センター藤山記念図書館利用の一断面 No.10，p.20-22／蔵書の年代別配架の背景 No.12，p.43-45
関場武：書き入れのある本についての落書 No.4，p.20
関口操：新図書館利用サービスにのぞむ No.14，p.9-10
関口素子：IFLA 東京大会の印象 No.20，p.31-32
仙名保：語り合う人々 No.8，p.12
渋川雅俊：大学教育と図書館の利用（座談会） No.5，p.1-11／大学における研究活動と事務サービス（座談会） No.6，p.1-12／福沢諭吉の読書論 No.18，p.63／IFLA 余滴 No.17，p.38／目録の将来 No.13，p.26-35／ライブラリー・インストラクション No.11，

p.10-15／専門職の問題と図書館員の心情 No.5, p.25／信頼性の高い書籍販売サービスの確立 No.9, p.13-17／図書分類の原理とその基本技法 No.15, p.4-16／図書の値上りと義塾の図書費 No.6, p.26-30／洋書は安くなる!? No.4, p.21-24／全国の大学図書館における資料収集 No.14, p.32-35
嶋井和世：医学情報センター所長に就任して No.8, p.1-2 No.16, p.6-7
清水潤三：国宝“秋草文壺”の思い出 No.8, p.3-5
清水和夫：おいしいケーキのはなし No.9, p.22
下郷太郎：理工学情報センター寸感 No.13, p.21-22
白石克：明石屋六兵衛版『鎌倉絵図』No.10, p.23-25
須田昭五郎：米国西海岸の大学図書館を視察して No.12, p.25
鷲見誠一：入るは易く出るは難し No.7, p.15
鷲見成正：専門雑誌との出会い No.10, p.3-5
鷲見洋一：ランボー詩の『コンコルダンス』をめぐって No.7, p.6-8
鈴木一江：情報化社会と研究・教育機関（共著）八 No.5, p.2-4
鈴木富弥夫：外国人利用者と図書館 No.11, p.29

— T —

舘田鶴子：英国の医学図書館を訪問して No.20, p.19-23
立花香代子：生みの苦しみ No.16, p.36
高田宜美：IMIC 10周年雑感 No.16, p.45-48
高橋潤二郎：公害と学際的研究 No.4, p.8-9
高橋吉之助：工学図書館の将来像 No.1, p.18-21
高宮利行：文学部の考え方 No.14, p.5／ケンブリッジ大学図書館 No.15, p.21
高野利也：医学情報センターに託す夢と現実 No.14, p.27-28
高鳥正夫：新しい門出に 八 No.6, p.1-2／大学教育と図書館の利用（座談会） No.5, p.1-11／大学図書館の収書計画と慶應義塾図書館 No.1, p.23-24／情報センター発足からの10年間 No.13, p.1-9／情報センター二年目を迎えて No.2, p.1-3／情報センター所長就任（重任）に際して No.7, p.1-2／慶應義塾日吉図書館の印象と期待 No.19, p.30-32／三田情報センター発足後の問題と将来への展望 No.1, p.1-4／三田情報センターにおける分類表の現状と将来 No.7, p.10-14／新図書館への期待 No.12, p.1-3／所長・館長13年を顧みて No.16, p.8-10
高山正也：米国の大学図書館 No.18, p.41-52／企業体研究者の情報利用の実態と大学図書館への期待 No.9, p.23-27
高山隆三：情報化社会と研究・教育機関（共著）八 No.5, p.2-4
武正恒：日吉情報センターにおける目録サービスについて No.19, p.23-27
武田るい：私の見たアメリカ No.3, p.27
武井恵子(→樋口恵子)：女性職員の就業意識（座談会） No.14, p.20-25／新館開館準備とPR No.16, p.12-17
玉井裕子：インベントリー雑感 No.17, p.47
田村茂：新図書館総合資料室について No.14, p.11-12
田村俊作：ヘイ・オン・ワイの古本屋 No.20, p.29
田辺真一郎：日吉新図書館を利用して No.19, p.29-30
田中栄一：大学事務職員の未来像とライブラリアン No.2, p.17-20
田中芙美子：指定出版社制度による一括購入方式 No.19, p.55-62／図書館・情報学科図書室に移って No.10, p.6
田中正之：福沢展と義塾図書館の資料 No.19, p.46-47／図書館側からみた日吉学生気質 No.2, p.11
寺尾誠：図書館におけるソフト・サービス No.14, p.6-7
富沢英治：ある出会い No.14, p.26
鳥居泰彦：三田情報センターの情報収集について No.1, p.4-5

外山敏夫：医学情報センター計画とその実現（共著）八 No.6，p.13-17／医学情報センターの立場　No.1，p.14-16／医学研究と関連諸科学　No.4，p.9-10
土屋健三郎：医学図書館文献複写サービス　八 No.2，p.4-7

— U —

有働勤吉：Padova 雑感　No.10，p.11，18
上田修一：慶應義塾図書館蔵書劣化調査計画（共著）　No.18，p.23-24／三田情報センターにおける教員の選書行動（共著）No.19，p.39-42
上田保：感想　No.1，p.12-13
牛場大蔵：医学教育と医学情報センター　No.5，p.16-18

— W —

和田幸一：ちょっと前まで学生だった　No.20，p.33
鷲尾泰俊：着実な問題解決を目指して　No.14，p.1
渡辺彰：情報の量と質　No.18，p.15
渡辺國広：文献複写と私　八 No.2，p.2-4
渡部満彦：むかしの慶應義塾図書館　No.18，p.9-14／OCLC の半年間　No.12，p.39／視聴覚メデアと図書館の接点　No.10，p.19／わが国大学図書館における機械化の現状　No.17，p.32-37

— Y —

矢島和男：図書館とともに10年　No.16，p.44
山田邦博：研究活動雑感　No.3，p.15
山岸健：レオナルド・ダ・ヴィンチの地図　No.8，p.7-11
山崎照雄：大学—その顔と表情　No.11，p.1
柳沢三郎：公害研究と分析化学　No.4，p.5-7
柳屋良博：学術情報流通体制の整備と三田情報センターにおける資料組織上の問題　No.10，p.27-29／日吉キャンパスにおける図書館のあり方について　No.15，p.22-24／日吉の騒音問題を考える　No.14，p.30-31／日吉新図書館建築計画の経緯　No.17，p.3-8／慶應義塾日吉図書館特集の序に代えて　No.19，p.1-2／収書方針に影響を及ぼす諸要因　No.1，p.24-33
安田博：慶應義塾図書館の新しい閲覧システム　No.20，p.9-11／スタンフォードにて　No.16，p.11
横山哲朗：医学情報センター所長就任にあたって　No.19，p.35
吉田哲郎：Gmelins Handbuch の利用を望む　No.14，p.15-19
吉川智江：カウンターの片隅から No.15，p.25／理工学情報センターにおける Interlibrary Loan　No.18，p.35-36

編集後記

KULIC は本号で20号になります。少し前から索引の作成を求められてたのですが，区切りのよい本号でそれを実現しました。

図書館は絶えまなくサービスを続けているわけですが，あるときふと振り返ると変化がいろいろな場面で浮び上ってきます。本誌の前身であった「八角塔」からの索引内容を一瞥してそれを感じます。しかし，来年度定年を迎える笠野君の思い程強いものではないでしょう。

図書館機械化は，このところ数年本誌諸論文のテーマとなってきましたが，いよいよ進み日吉とともに三田でも，直接利用者サービスにその成果が現われるようになりました。また，国際化ということも本号の隠れたテーマになっています。職員による海外研修，国際大会への参加などがそれを示しています。図書館協力も，学術情報センターとのかかわり，早稲田大学図書館との相互協力のスタートなど新しい局面に向っています。

（10月24日　渋川）

編集委員＊情報センター本部　渋川雅俊＊三田情報センター　国井佐代子＊日吉情報センター
樋口恵子＊医学情報センター　玉井裕子＊理工学情報センター　笹島早月